

山王遺跡 8

— 第10次調査報告 —



2017

福岡市教育委員会

さん の う
山王遺跡 8

— 第10次調査報告 —



調査番号 1520
遺跡略号 SNN-10

2017

福岡市教育委員会

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件に恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稲作の村である板付遺跡、古代の外交施設である鴻臚館、貿易都市博多などをはじめとする貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し記録による保存を行うなど、その保護に努めています。

本書で報告する山王遺跡周辺では、これまでに弥生時代から中世にかけての集落跡などが調査されており、当時の生活用具である土器や石器など多くの遺物が出土しています。

今回報告する山王遺跡第10次発掘調査では、弥生時代の土器や木製遺物が多く見付き、この地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

本書の刊行が、市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野でも役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査に際しご理解と多大なご協力をいただいた株式会社翔薬様をはじめ、地元住民の方々には厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月 27 日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が2015（平成27）年度に福岡市博多区山王二丁目において配送センター建設に伴い行った埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当は加藤隆也である。
- (3) 遺構実測は中園将祥、波多江彩香、藤野雅基、朝岡俊也、加藤が行った。
遺構撮影は朝岡、加藤が行った
- (4) 出土遺物の整理は増永好美、篠田千恵子が行い、遺物実測は齋藤瑞穂（新潟大学）、久住猛雄、上方高弘、山本麻里子、加藤が行い、写真撮影は加藤、製図は増永、山本が行った。
- (5) 今回の調査・報告に係る座標は都市再生街区基本調査により設置された基準点を使用しており、図中に使用した方位は国土座標（世界測地系）の座標北である。使用した標高は上記補助点2A693のH=6.212 mである。

山王遺跡第10次調査グリッド中央杭座標一覧

	X 1	X 2	X 3	X 4	X 5	X 6	X 7
Y 1	X = 64,464.363	X = 64,471.628	X = 64,478.893	X = 64,486.159	X = 64,493.424	X = 64,502.143	X = 64,510.861
	Y = -52,436.205	Y = -52,429.334	Y = -52,422.463	Y = -52,415.592	Y = -52,408.720	Y = -52,400.475	Y = -52,392.229
Y 2	X = 64,471.234	X = 64,478.499	X = 64,485.765	X = 64,493.030	X = 64,500.295	X = 64,509.014	X = 64,517.732
	Y = -52,443.471	Y = -52,436.599	Y = -52,429.728	Y = -52,422.857	Y = -52,415.986	Y = -52,407.740	Y = -52,399.495
Y 3	X = 64,478.106	X = 64,485.370	X = 64,492.636	X = 64,499.901	X = 64,507.167	X = 64,515.885	X = 64,524.604
	Y = -52,450.735	Y = -52,443.865	Y = -52,436.994	Y = -52,430.122	Y = -52,423.251	Y = -52,415.006	Y = -52,406.760
Y 4	X = 64,486.351	X = 64,493.616	X = 64,500.881	X = 64,508.147	X = 64,515.412	X = 64,524.131	X = 64,532.849
	Y = -52,459.455	Y = -52,452.583	Y = -52,445.712	Y = -52,438.841	Y = -52,431.970	Y = -52,423.724	Y = -52,415.479
Y 5	X = 64,491.504	X = 64,498.769	X = 64,506.035	X = 64,513.300	X = 64,520.566	X = 64,529.284	X = 64,538.003
	Y = -52,464.904	Y = -52,458.032	Y = -52,451.161	Y = -52,444.290	Y = -52,437.419	Y = -52,429.173	Y = -52,420.928
Y 6	X = 64,464.363	X = 64,501.861	X = 64,509.127	X = 64,516.392	X = 64,523.658	X = 64,532.376	X = 64,541.095
	Y = -52,436.205	Y = -52,461.302	Y = -52,454.431	Y = -52,447.559	Y = -52,440.688	Y = -52,432.443	Y = -52,424.197

- (6) ガラス玉、炉壁の分析は福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎、比佐陽一郎の協力を得た。
- (7) 遺構の呼称は略号化し、竪穴建物をSC、掘立建物をSB、ピットをSP、土坑・貯蔵穴をSK、井戸をSEとした。
- (8) 今回の調査に伴う出土資料および記録類は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、利用に供する予定である

遺跡調査番号	1 5 2 0	遺跡略号	SNN-10
地番	福岡市博多区山王二丁目4-4, 1-2, 2-2, 2-3, 4-2	分布地図番号	37（東光寺）
調査対象面積	4,344.83㎡（敷地面積）	調査面積	996㎡
調査期間	平成27年8月24日～平成28年2月26日		

本文目次

第I章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第III章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	6
3. まとめ	50

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3	Fig. 22	X5Y (2, 3) 遺構実測図 (1/60・1/40)	29
Fig. 2	調査地点位置図 (1/2,500)	4	Fig. 23	X5Y (1, 2) 出土遺物 (1/2・1/4)	31
Fig. 3	調査区配置図 (1/300)	折り込み	Fig. 24	X5Y3 出土遺物 (1/4)	31
Fig. 4	X1 ライン遺構配置図 (1/80)	5	Fig. 25	X5Y3 SE-01 出土遺物 (1/4・1/8)	32
Fig. 5	X1 ライン遺構実測図 (1/40)	6	Fig. 26	X5Y4 遺構配置図 (1/80)	33
Fig. 6	X1 ライン出土遺物 1 (1/4)	7	Fig. 27	X5Y4 遺構実測図 1 (1/40)	34
Fig. 7	X1 ライン出土遺物 2 (1/4)	8	Fig. 28	X5Y4 遺構実測図 2 (1/60)	35
Fig. 8	X1 ライン出土遺物 3 (1/4)	8	Fig. 29	X5Y4 遺構実測図 3 (1/60)	36
Fig. 9	X1Y4 SK-07 出土遺物 (1/4)	9	Fig. 30	X5Y4 出土遺物 (1/4)	37
Fig. 10	X2 ライン遺構配置図 (1/80)	11	Fig. 31	X6 ライン遺構配置図 (1/80)	38
Fig. 11	X2 ライン遺構実測図 (1/40)	12	Fig. 32	X6 ライン遺構実測図 1 (1/40)	39
Fig. 12	X2 ライン出土遺物 (1/4)	13	Fig. 33	X6 ライン遺構実測図 2 (1/60)	40
Fig. 13	X3 ライン遺構配置図 (1/80)	15	Fig. 34	X6 ライン出土遺物 1 (1/4)	41
Fig. 14	X3 ライン遺構実測図 (1/40)	16	Fig. 35	X6 ライン出土遺物 2 (1/4)	42
Fig. 15	X3 ライン出土遺物 (1/4)	17	Fig. 36	X6 ライン出土遺物 3 (1/2・1/4)	43
Fig. 16	X4 ライン遺構配置図 (1/80)	20	Fig. 37	X7 ライン遺構配置図 ・遺構実測図 (1/80・1/40)	44
Fig. 17	X4 ライン遺構実測図 1 (1/40・1/60)	21	Fig. 38	X7 ライン遺構実測図 (1/40)	46
Fig. 18	X4 ライン遺構実測図 2 (1/60)	22	Fig. 39	X7 ライン出土遺物 1 (1/4・1/8・1/20)	47
Fig. 19	X4 ライン出土遺物 1 (1/2・1/4)	23	Fig. 40	X7 ライン出土遺物 2 (1/4)	48
Fig. 20	X4 ライン出土遺物 2 (1/4・1/8)	24	Fig. 41	出土玉類実測図 (1/2)	48
Fig. 21	X5Y (1, 2, 3) 遺構配置図 ・土層断面図 (1/80・1/40)	27			

図版目次

PL. 1	1) 調査前風景 (西から)	2) 調査区設定状況 (南東から)
	3) X1Y1 完掘状況 (南西から)	4) X1Y1 完掘状況 (南東から)
	5) X1Y1 SD-01 堆積状況 (北東から)	
PL. 2	1) X1Y2 完掘状況 (北東から)	2) X1Y2 完掘状況 (南東から)
	3) X1Y3 完掘状況 (北東から)	4) X1Y3 完掘状況 (南東から)
	5) X1Y4 完掘状況 (北西から)	
PL. 3	1) X1Y4 SE-01 完掘状況 (北東から)	2) X1Y4 SE-02 完掘状況 (北東から)
	3) X1Y4 SK-07 検出状況 (南西から)	4) X1Y4 SK-07 完掘状況 (北東から)
	5) X1ライン完掘状況 (南東から)	6) X1ライン調査風景 (北西から)
PL. 4	1) X2Y1 完掘状況 (南東から)	2) X2Y1 SP-09 土層状況 (西から)
	3) X2Y2 完掘状況 (南西から)	4) X2Y3 完掘状況 (南西から)
	5) X2Y3 完掘状況 (南東から)	6) X2Y3 SP-03 検出状況 (北東から)
	7) X2Y4 SK-05 完掘状況 (南から)	8) X2Y4 SC-01 完掘状況 (北から)

PL. 5	1) X 2 Y 4 完掘状況 (南西から)	2) X 3 Y 1 完掘状況 (南東から)
	3) X 3 Y 2 完掘状況 (南東から)	4) X 3 Y 2 南西壁土層状況 (北東から)
	5) X 3 Y 2 北西壁土層状況 (南東から)	
PL. 6	1) X 3 Y 3 完掘状況 (南西から)	2) X 3 Y 3 SK-03 (西から)
	3) X 3 Y 3 SE-01 完掘状況 (南から)	4) X 3 Y 4 完掘状況 (南東から)
	5) X 3 Y 4 北側完掘状況 (南西から)	6) X 3 Y 4 南側完掘状況 (南西から)
	7) X 3 Y 4 SP-101 検出状況 (南西から)	8) X 3 Y 4 SK-03 堆積状況 (北西から)
PL. 7	1) X 4 Y 1 完掘状況 (南西から)	2) X 4 Y 2 完掘状況 (南西から)
	3) X 4 Y 2 SK-01 土層状況 (南西から)	4) X 4 Y 2 SK-01 完掘状況 (北東から)
	5) X 4 Y 3 完掘状況 (南西から)	6) X 4 Y 3 SE-01 完掘状況 (北西から)
	7) X 4 Y 3 SE-02 完掘状況 (東から)	8) 調査区設定風景 (南東から)
PL. 8	1) X 4 Y 4 完掘状況 (南東から)	2) X 4 Y 4 SK-12 完掘状況 (南西から)
	3) X 4 Y 4 SE-02 完掘状況 (南から)	4) X 4 Y 4 南側完掘状況 (南西から)
	5) X 4 Y 4 SB-01 完掘状況 (東から)	
PL. 9	1) X 5 Y 1 完掘状況 (南西から)	2) X 5 Y 1 北東壁土層状況 (南西から)
	3) X 5 Y 2 完掘状況 (南西から)	4) X 5 Y 2 SK-02 土層状況 (南から)
	5) X 5 Y 3 完掘状況 (南西から)	6) X 5 Y 3 SD-01 完掘状況 (北東から)
	7) X 5 Y 3 SE-02 完掘状況 (南東から)	8) X 5 Y 3 SC-01 完掘状況 (北西から)
PL. 10	1) X 5 Y 4 完掘状況 (南西から)	2) X 5 Y 4 完掘状況 (北西から)
	3) X 5 Y 4 SK-27 完掘状況 (東から)	4) X 5 Y 4 SE-01 完掘状況 (南東から)
	5) X 5 Y 4 SC-01 完掘状況 (南西から)	
PL. 11	1) X 5 Y 4 SC-02 完掘状況 (南から)	2) X 5 Y 4 SB-01 完掘状況 (北から)
	3) X 6 Y 1 完掘状況 (南西から)	4) X 6 Y 1 SD-01 土層状況 (南東から)
	5) X 6 Y 2 完掘状況 (南西から)	6) X 6 Y 2 SE-01 完掘状況 (北東から)
	7) X 6 Y 3 完掘状況 (南東から)	8) X 6 Y 3 完掘状況 (南西から)
PL. 12	1) X 6 Y 4 完掘状況 (北西から)	2) X 6 Y 4 SC-01 完掘状況 (南から)
	3) X 6 Y 4 SK-06 完掘状況 (南西から)	4) X 6 Y 4 SK-07 完掘状況 (北東から)
	5) X 6 Y 4 SE-01 完掘状況 (北東から)	6) X 7 Y 1 掘削状況 (南西から)
	7) X 7 Y 2 掘削状況 (南東から)	
PL. 13	1) X 7 Y 2 SE-01, 02 完掘状況 (東から)	2) X 7 Y 2 SE-03 検出状況 (北西から)
	3) X 7 Y 3 完掘状況 (南西から)	4) X 7 Y 3 SE-01 完掘状況 (南東から)
	5) X 7 Y 3 SE-03 完掘状況 (北西から)	
PL. 14	1) X 1 Y 4 SE-01	2) X 1 Y 4 SE-01
	3) X 1 Y 4 SE-02	4) X 1 Y 4 SE-02
	5) X 1 Y 4 SE-02	6) X 1 Y 4 SE-02
	7) X 1 Y 4 SE-02	8) X 1 Y 4 SK-07
PL. 15	1) X 1 Y 4 SK-07	2) X 1 Y 4 SK-07
	3) X 1 Y 4 SK-07	4) X 1 Y 4 SK-07
	5) X 1 Y 4 SK-07	6) X 1 Y 4 SK-07
	7) X 1 Y 4 SK-07	8) X 1 Y 4 SK-07
PL. 16	1) X 1 Y 4 SK-07	2) X 1 Y 4 SK-07
	3) X 2 Y 3 SP-03	4) X 2 Y 4 SK-01
	5) X 2 Y 4 SC-01	6) X 3 Y 3 SE-01
	7) X 3 Y 3 SE-01	8) X 3 Y 3 SE-01
PL. 17	1) X 3 Y 3 SE-01	2) X 3 Y 3 SE-01
	3) X 3 Y 3 SE-01	4) X 3 Y 4 SP-101
	5) X 3 Y 4 SE-02	6) X 4 Y 2 SK-01
	7) X 4 Y 2 SK-01	8) X 4 Y 3 SE-01
PL. 18	1) X 4 Y 3 SE-03	2) X 4 Y 4 SE-01
	3) X 4 Y 4 SE-01	4) X 4 Y 4 SE-03
	5) X 4 Y 4 SC-04	6) X 4 Y 4 SC-04
	7) X 4 Y 4 SC-04	8) X 4 Y 4 SC-04 上面
PL. 19	1) X 5 Y 3 SE-01	2) X 5 Y 3 SE-01
	3) X 5 Y 4 遺物包含層	4) X 6 Y 2 SE-01
	5) X 6 Y 2 SE-01	6) X 6 Y 2 SE-01
	7) X 6 Y 2 SE-01	8) X 6 Y 2 SE-01
PL. 20	1) X 6 Y 2 SE-01	2) X 6 Y 2 SE-01
	3) X 6 Y 4 SK-06	4) X 6 Y 4 SC-01 上面
	5) X 7 Y 2 SE-02	6) X 7 Y 2 SE-02
	7) X 7 Y 2 SE-02	8) X 7 Y 2 SE-03

第 I 章 はじめに

1. 調査に至る経緯

今回報告する発掘調査は、配送センター建設に伴う工事に先立つものである。

2015（平成 27）年 5 月、株式会社 翔葉 様より配送センター建設に伴い埋蔵文化財の有無についての照会があった。埋蔵文化財審査課では、計画地が山王遺跡の範囲内であることから、計画地について遺跡の有無を確認するための確認調査が必要と判断した。2015（平成 27）年 5 月 21 日、27 日、28 日に確認調査を実施し、現地表下 140cm～170cm の基盤層であるローム層の上面にて弥生時代の遺物包含層とともに竪穴建物や柱穴などの遺構を確認した。

協議を重ね、建物基礎の地中梁が遺構面に影響を与えないこと、遺跡面に影響を与える面積が杭と一部の基礎部分のみであり、その面積が工事範囲全体の 1/9 と小さいことから、杭基礎部分と掘削工事による影響範囲を対象に発掘調査を行うものとした。調査は 2015（平成 27）年 8 月 24 日から掘削作業を始め、合わせて 996㎡の発掘調査をおこない 2016（平成 28）年 2 月 26 日までに埋め戻し作業を行い終了した。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	株式会社 翔葉		
調査主体	福岡市教育委員会 (発掘調査：平成 27 年度・資料整理：平成 28 年度)	教育長 星子	酒井 龍彦 (27 年度) 明夫 (28 年度)
調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課 (現・埋蔵文化財課)	課長 調査第 2 係長	常松 幹雄 (27・28 年度) 榎本 義嗣 (27 年度) 加藤 隆也 (28 年度)
庶務担当	文化財部埋蔵文化財審査課 (現・埋蔵文化財課)	管理係長 管理係 管理係	大塚 紀宜 (27・28 年度) 川村 啓子 (27 年度) 入江よう子 (28 年度)
事前協議	文化財部埋蔵文化財審査課 (現・埋蔵文化財課)	事前審査係長 主任文化財主事 事前審査係	佐藤 一郎 (27・28 年度) 池田 祐司 (27・28 年度) 板倉 有大 (27 年度) 吉田 大輔 (28 年度)
調査担当	文化財部埋蔵文化財調査課 (現・埋蔵文化財課)		加藤 隆也 (27・28 年度)

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘を臨む博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部には、小山塊の裾野に源を発する御笠川と那珂川が山裾に沿って緩やかに蛇行しながら北流して博多湾に注いでいる。この御笠川と那珂川に挟まれ春日丘陵と総称される洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層部には阿蘇山の噴火物によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。この丘陵は、奴国の王墓とされる春日市の須玖岡本遺跡から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続き博多湾の海岸砂丘に連なり、その上面には後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開する。

山王遺跡は、この丘陵最北端の標高5～10mに位置する比恵遺跡群と、その東を北流する御笠川に挟まれた低位段丘上に立地している。遺跡の範囲は、東西が160～300m、南北が650mの逆台形状をなし、総面積は15ha余に及び、その北端には日吉神社が座する山王公園が位置している。比恵遺跡群との境界は後世の大宰府水城東門から延びる官道を境界としており、本来的に比恵遺跡群と区別される要因は無い。この山王遺跡から比恵・那珂遺跡群では、1938（昭和13）年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに300ヶ所に及ぶ発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓の様相や、開析谷に構築された灌漑施設等の様相が明らかになりつつある。この地を時系列的に概観すると、人跡の初現は後期旧石器時代に始まり、ナイフ形石器や彫器、剥片などの遺物が出土している。縄文時代では晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが遺構に伴ったものはない。突帯文期に至って遺構が検出される。弥生時代になると、丘陵縁辺の低位な段丘を中心に堅穴住居や貯蔵穴などによる集落が幾つかの集団によって群構成されている。その後中期にかけては、集落域は丘陵の縁辺部から尾根頂部へと次第に拡大していく。中期後半から後期には、丘陵上の全域に集落域が広がる。銅剣や銅弋、銅矛などの鋳型や中子なども出土し、青銅器を生産する工人集団の工房が出現する。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営される。

古墳時代になると、台地上を縦断する道路が南北方向に敷設され、あたかも後世の都市計画の様相を呈する。また、福岡平野で最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営され、その第2主体部には三角縁神獣鏡が副葬されていた。その後6世紀後半には、現在のアサヒビール工場内にあたる場所に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の2基の前方後円墳が築造される。

6世紀後半から7世紀前半には、企画性の高い柵列に囲まれた大規模な掘立柱建物の造営が丘陵の各所ではじまる。これらの建物群は、既存の集落域から離れた場所に造営され、これら官衙的な様相を帯びた企画性の高い建物群は、記紀に記された「那津官家」との関わりが指摘されている。

奈良時代以降になると、集落域は急速に縮小し、遺構の中心域は南側の那珂遺跡群に移る。この時期、那珂遺跡群内では方位に沿うように直線的に延びるが開削され、そこから硯や瓦がまとまって出土することから郡衙や寺院などの存在が想起されている。また、大宰府水城東門から井相田C遺跡、高畑遺跡、板付遺跡を経て比恵遺跡群を通るいわゆる「水城東門ルート」と呼称される官道がN-43°-Wの方位でほぼ直線的に切り通しにより開削され、博多遺跡群に到達すると考えられている。

中世以降は屋敷地が広がり、区画のための直線的な堀や溝が掘削される。屋敷を構成する建物柱穴や井戸、さらには輸入陶磁器を副葬する屋敷内墓なども普遍的に検出される。

なお、山王遺跡はかつて採集された資料により小地域を山王甕棺遺跡と呼称していた。考古学的調査が進むにつれ、遺跡が広く遺存していることが明らかとなってきた。現在では、南東側の比恵甕棺遺跡と合わせて、広く山王遺跡と呼称している。

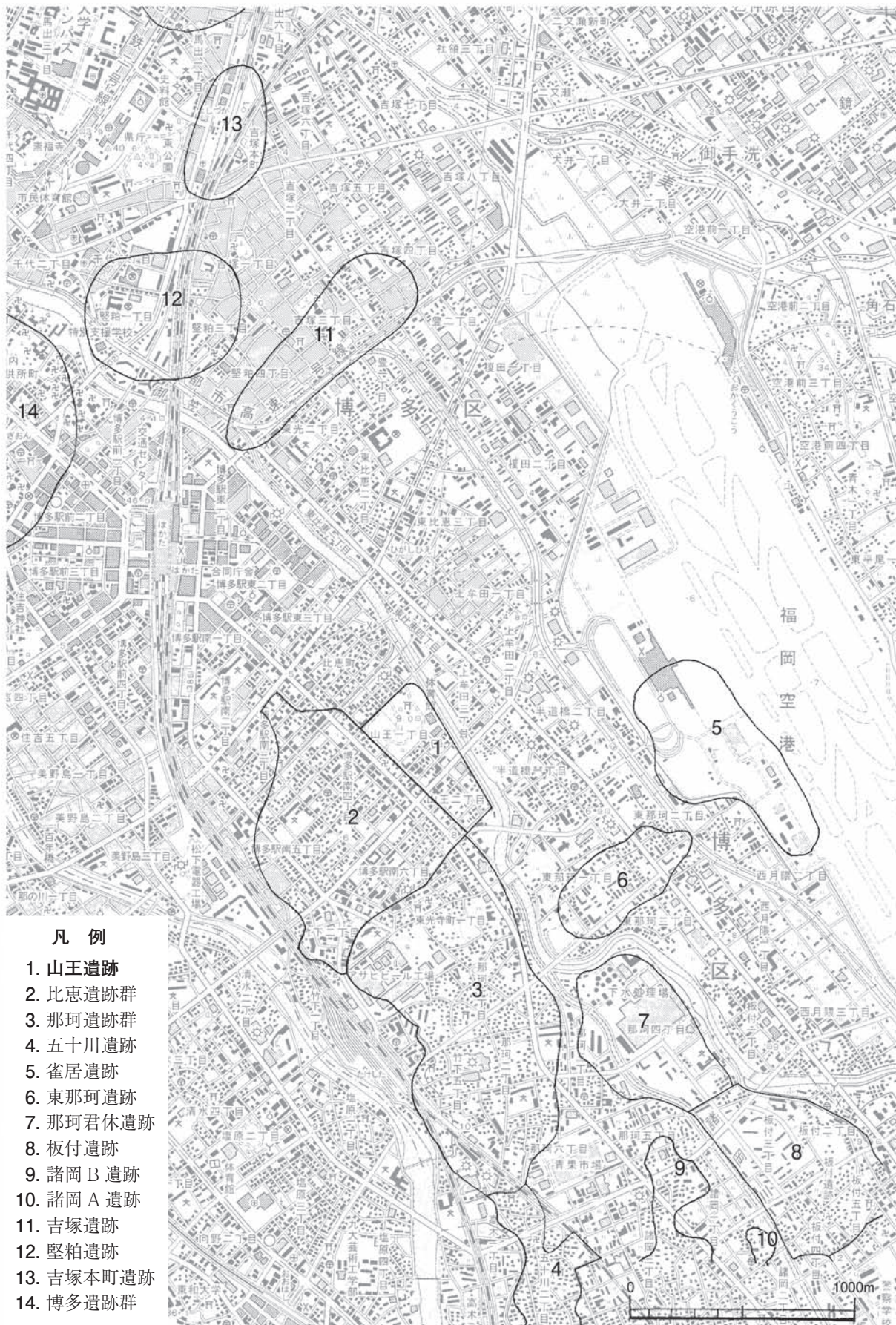


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 2 調査地点位置図 (1/2,500)

第三章 調査の記録

1 調査の概要 (Fig. 3)

各調査区の設定は、敷地の端部に建築側の業者に柱筋ごとに見通しができるようマーキングをしていただいた。柱筋は記号化し、東西方向の柱筋を西からX1、X2、X3・・・と呼称し、南北方向の柱筋を南からY1、Y2、Y3・・・と呼称した。そして調査区の呼称も、その柱筋が交差する中央杭の名称をとりX1Y1、X1Y2、X1Y3・・・と呼称する。遺構番号は調査区の掘削順序が不規則になるため調査区ごとに付加した。よって各調査区にSP-01、SC-01・・・が存在する。

調査区内の現況はアスファルト舗装の駐車場であった。調査区の基本的層序は上から、アスファルト直下にはほぼ敷地全体に厚さ30～40cmのバラス混じりの土による盛土がされている。南側の敷地には太平洋戦争後の遺物を含む客土がされており、その下が旧耕作土と遺物包含層となり、遺構検出

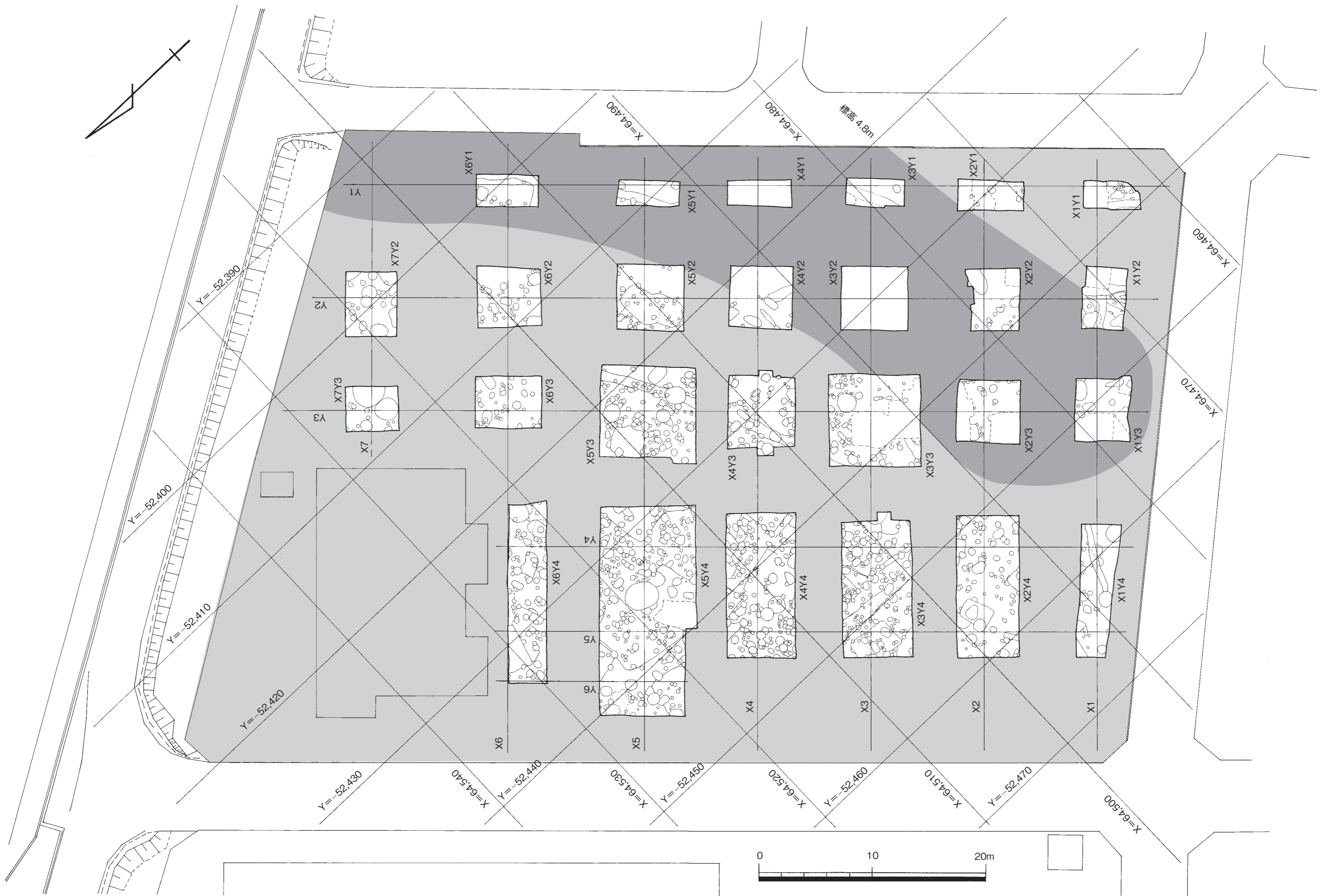


Fig. 3 調査区配置図 (1/300)

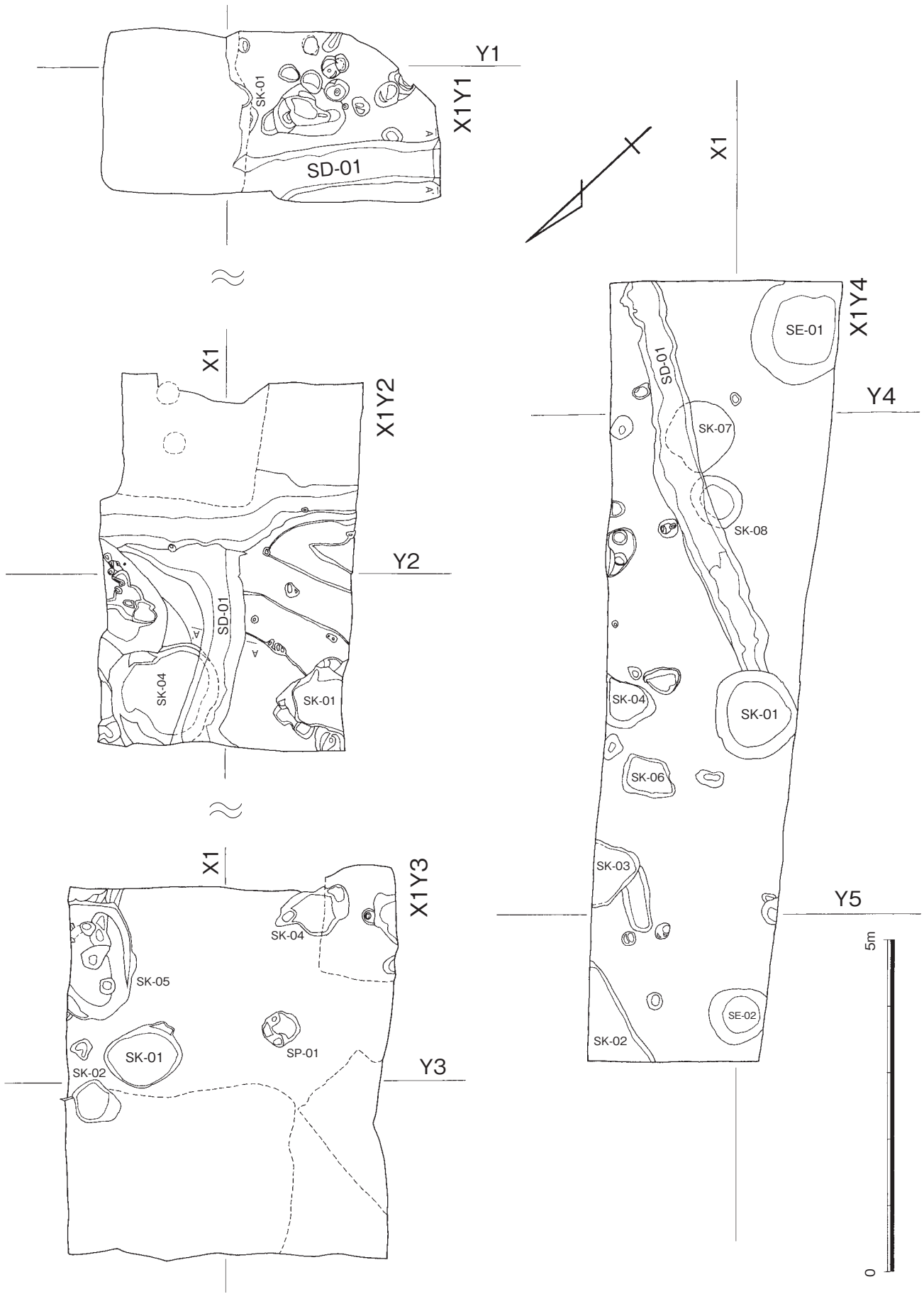


Fig. 4 X1 ライン遺構配置図 (1/80)

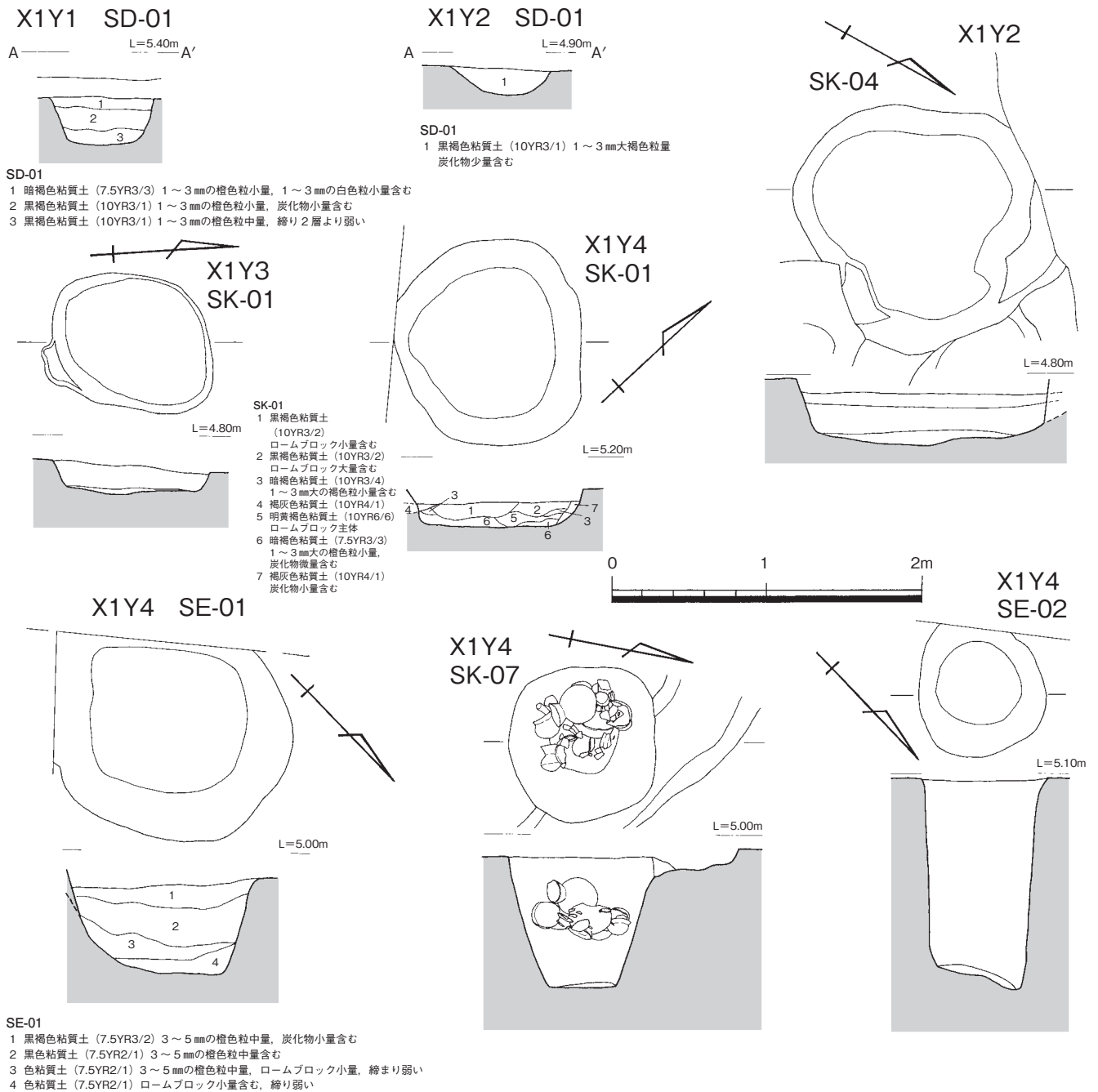


Fig. 5 X1 ライン遺構実測図 (1/40)

面は鳥栖ローム、または八女粘土の上面である。その深さは各調査区で大きく異なり、深い調査区では現地表下約 170cm が遺構検出面となる。調査区によっては、遺物包含層の堆積後その上面から中世の遺構が掘削されているようであるが、調査期間の都合により壁面観察のみで基盤層での検出を行った。

2 遺構と遺物

X1Y1 (Fig. 4, 5, 6, PL. 1)

調査地南西隅に位置している。調査区の東側は大きく攪乱されている。検出遺構は溝、不定形土坑、柱穴などである。SD-01 は N-35° -E に方位をもち、検出最大幅 75cm、底面はほぼ平坦である。出土遺物 (Fig. 6) には瓦器椀 (1, 3)、輸入陶器盤 (2) などがある。

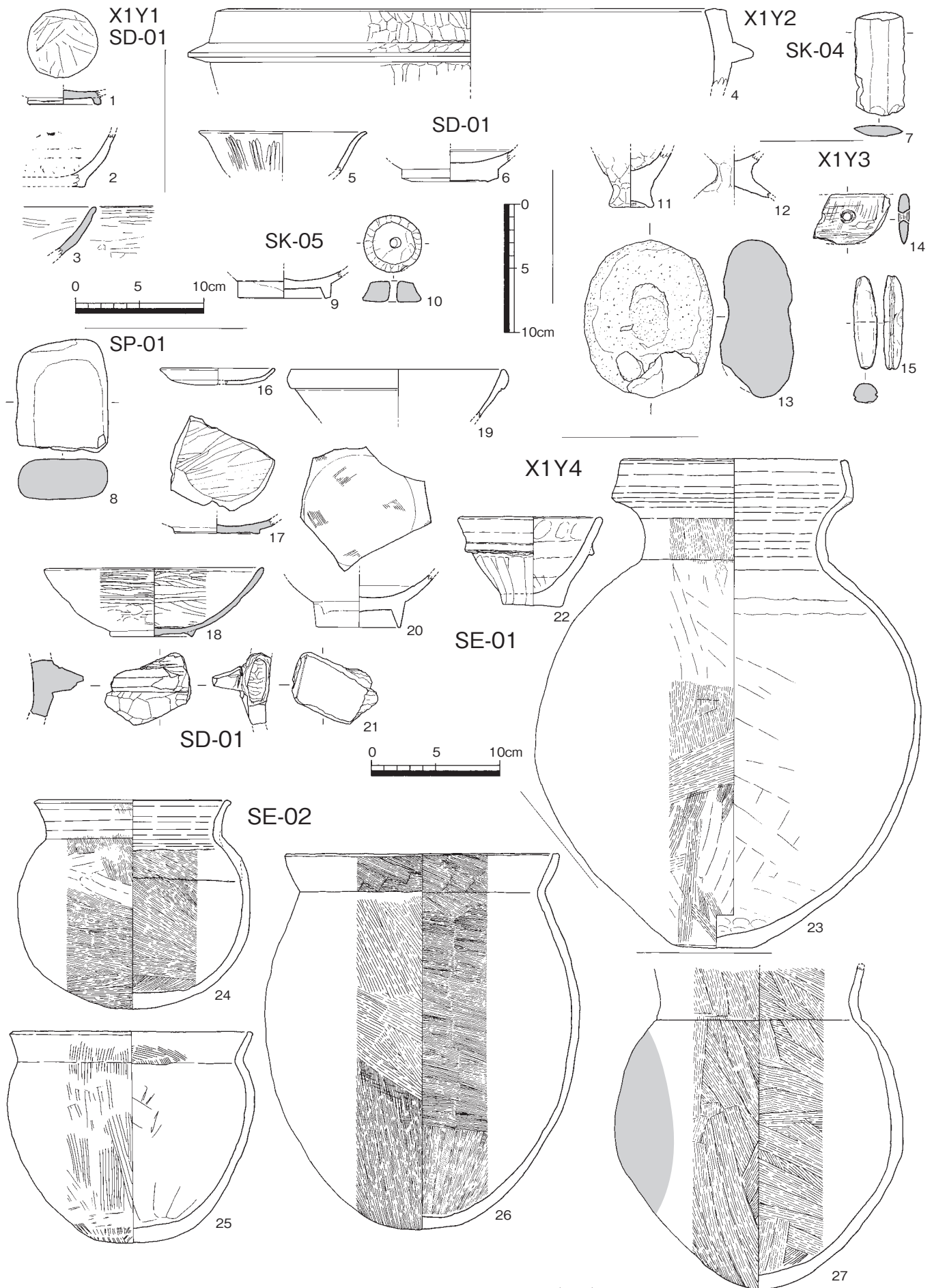


Fig. 6 X1 ライン出土遺物 1 (1/4)

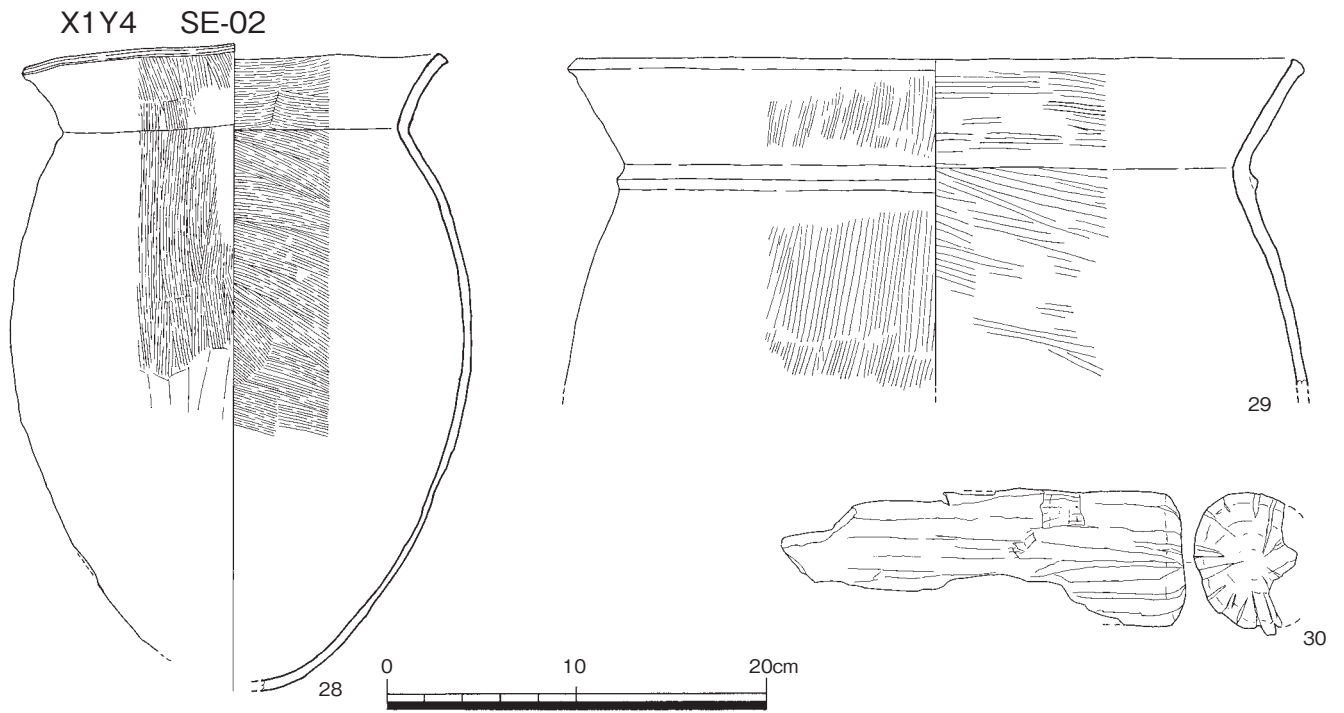


Fig. 7 X1 ライン出土遺物 2 (1/4)

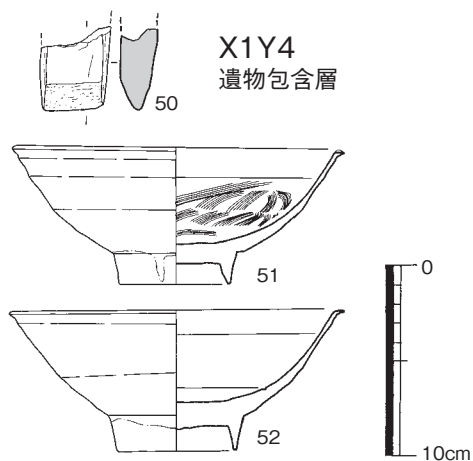


Fig. 8 X1 ライン出土遺物 3 (1/4)

X1Y2 (Fig. 4, 5, 6, PL. 2)

数条の溝が切り合い、不定形の土坑などが検出された。SD-01は緩やかに湾曲しており、断面U字形を呈している。出土遺物 (Fig. 6) には復元口径 39.2cm の滑石製鍋 (4)、青磁椀 (5)、白磁椀 (6) が出土している。SK-04は不定形の土坑で検出された。深さは約 40cm であった。石剣の一部 (7) が出土した。

X1Y3 (Fig. 4, 5, 6, PL. 2)

調査区の北東部は大きく攪乱されている。遺構は数基の土坑が検出された。SP-01は直径 50cm の円形を呈しており、深さは 5cm の遺存であった。砥石 (8) が出土している。SK-01は平面形隅丸方形を呈しており、深さ約 20cm が遺存していた。SK-05は長軸 180cm の不定形を呈しており、深さは 27cm が遺存していた。遺物は白磁椀 (9)、滑石製錘 (10) が出土している。遺構検出時と遺構上面の遺物包含層からは、ミニチュア土器 (11, 12)、凹石 (13)、石包丁 (14)、石錘 (15) が出土した。

X1Y4 (Fig. 4~9, 41, PL. 2, 3, 14, 15, 16)

検出遺構には溝、土坑、井戸がある。SD-01はN-71° -Wに方位をとり、断面はU字形を呈する。出土遺物には、口径 8.8、底径 7.4、器高 1.3cm の土師器皿 (16)、瓦器椀 (17, 18)、白磁椀 (19, 20)、滑石製石鍋 (21) がある。SK-01は長軸 130cm の楕円形を呈する土坑で、掘り込み面は遺物包含層の上面からであるが、遺存する深さは約 25cm である。配置と出土遺物から、井戸の性格を有しており、

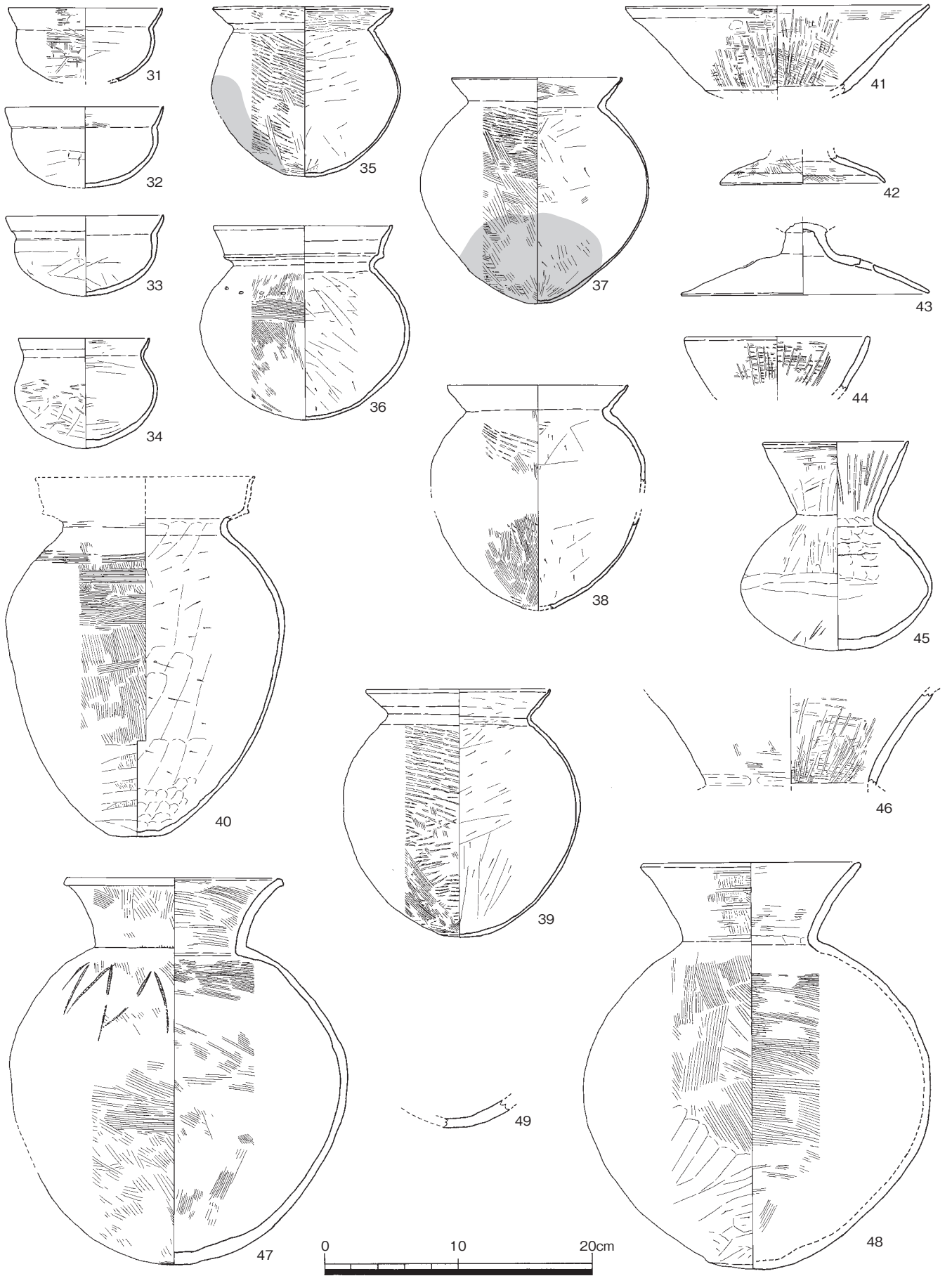


Fig. 9 X1Y4 SK-07 出土遺物 (1/4)

SD-01 と同時に掘削された可能性がある。SE-01 は調査区の隅にて検出された井戸である。長軸約 160cm の楕円形を呈しており、残存する深さは 60cm であった。出土遺物 **22** は小型の鉢である。口径 11.1、底径 4.6、器高 6.9cm である。胴部やや上位に断面三角形の突帯がめぐる。**23** は複合口縁壺である。口径 19.6、胴部最大径 29.9、底径 6.6、器高 37.5cm で、底部は凸レンズ状を呈する。弥生時代後期終末期の井戸である。SE-02 は直径 80cm のほぼ円形の平面をもつ素掘り井戸である。遺存する深さは 140cm であった。出土遺物 **24**、**25** は小型の甕である。**24** は口径 15.1、最大胴部径 17.9、器高 16.3cm である。**25** は口径 18.6、胴部最大径 18.8、器高 16.5cm である。**26**～**28** は甕である。**26** は口径 20.9、最大胴部径 24.2、器高 29.3cm である。**27** は口縁端部を欠いており、胴部最大径 21.1cm である。**28** は口径 22.3、胴部最大径 24.1、器高 34.5cm である。**29** は大型の甕で、復元口径 38.8cm である。**30** は広葉樹の芯持材の堅杵欠損品である。古墳時代初頭の井戸である。SK-07 はSD-01 に切られる。平面形は直径 100cm の略円形を呈し、遺存する深さは約 80cm であり、井戸と考えられる。遺構の中層より土器が集中して出土した。**31** は精製小型丸底鉢である。復元口径 11.7、器高 5.5cm である。外面底部、胴部内面はヘラケズリである。**32** は精製小型丸底鉢である。復元口径 12.0、器高 6.0cm である。**33** は精製小型丸底鉢である。復元口径 11.8、器高 6.0cm である。外部底部はヘラケズリ後ミガキ調整し、胴部内面もヘラケズリ後ナデ、ミガキの器面調整を施す。**34** は精製小型丸底壺である。口径 10.0、器高 8.3cm である。胴部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面はヘラケズリにて器面調整をする。**35** は筑前型庄内甕である。復元口径 13.7、器高 12.8cm である。胴部内面はヘラケズリが施され、外面はタタキである。底部には、倒置状態で左螺旋方向にタタキ板による調整痕跡がみられる。**36** はほぼ完形の山陰系小型壺である。口径 13.5、器高 14.6cm である。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。**37** は筑前型庄内甕である。口径 12.8、器高 17.1cm である。外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリの後ナデ、下位はハケにて器面調整をおこなっている。**38** は筑前型庄内甕である。上部と下部に接点はないが、同一個体と考えられる。復元口径 13.6cm である。器面調整は、上部の外面はタタキの後ナデ、下部の外面はハケ調整、内面はヘラケズリの後ナデである。**39** は筑前型庄内甕である。口径 13.8、器高 18.7cm である。外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリを施す。**40** は山陰系甕である。頸部より下部が遺存している。底径 4.3cm である。器面調整は、外面はハケの後横ナデ、内面はヘラケズリで底部には圧痕がみられる。**41** は高杯の杯部と考えられる。復元口径は 23.0cm である。外面の器面調整は、タタキの後ナデ、ミガキで、内面はハケの後タテミガキを施している。**42** は脚付鉢の脚部と考えられる。復元底径は 12.5cm である。穿孔が 2ヶ所確認できる。全体的に摩滅が著しいが、ハケによる器面調整の痕跡がみられる。**43** は椀状高杯の脚部と考えられる。復元底径 18.3cm である。2ヶ所に穿孔がみられる。全体的に摩滅が著しい。**44** は小型鉢と考えられる。復元口径は 14.0cm で、外面はミガキ、内面はハケの後ミガキを施している。**45** は精製の長頸壺である。口径 10.9、最大胴部径 14.4、器高 15.7cm である。**46** は広口壺の頸部破片と考えられる。**47** は、ほぼ完形の広口壺である。口径 16.4、最大胴部径 25.3、器高 29.3cm である。肩部に工具による山形文様を 3回連続させて施文させている。**48** は、ほぼ完形の広口壺である。口径 16.5、最大胴部径 25.9、器高 30.7cm である。胴部外面の上部はハケ、下部はヘラケズリ、内面はハケによる器面調整をおこなっている。**49** は焼成の不良な瓦質土器の底部と考えられる。半島からの搬入品か。出土遺物から古墳時代初頭の遺構である。

遺構検出時と遺構上面の遺物包含層からは、片刃石斧 (**50**)、白磁椀 (**51**, **52**) が出土した。またガラス小玉 (**306**, **307**, **308**) が出土している。

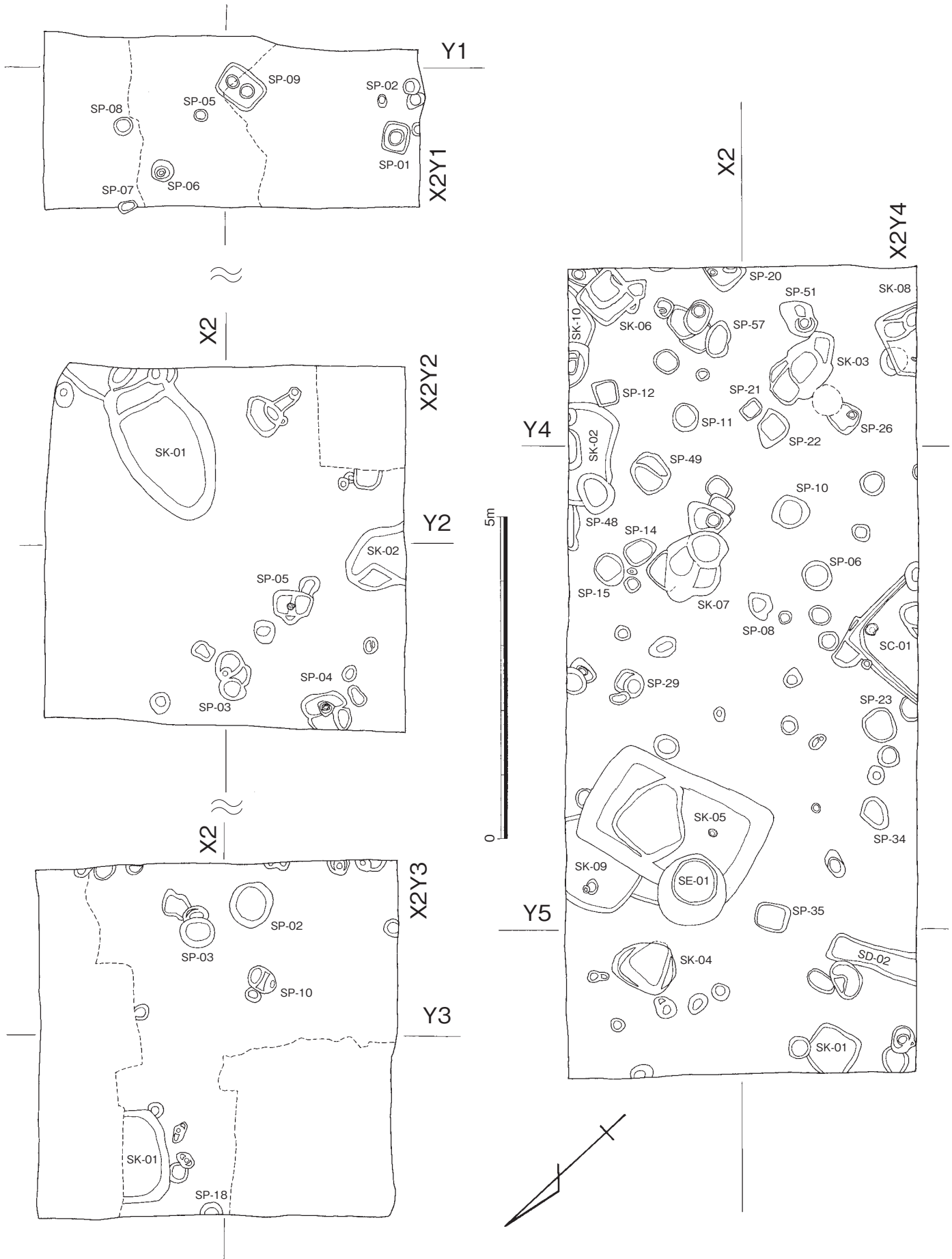


Fig. 10 X2 ライン遺構配置図 (1/80)

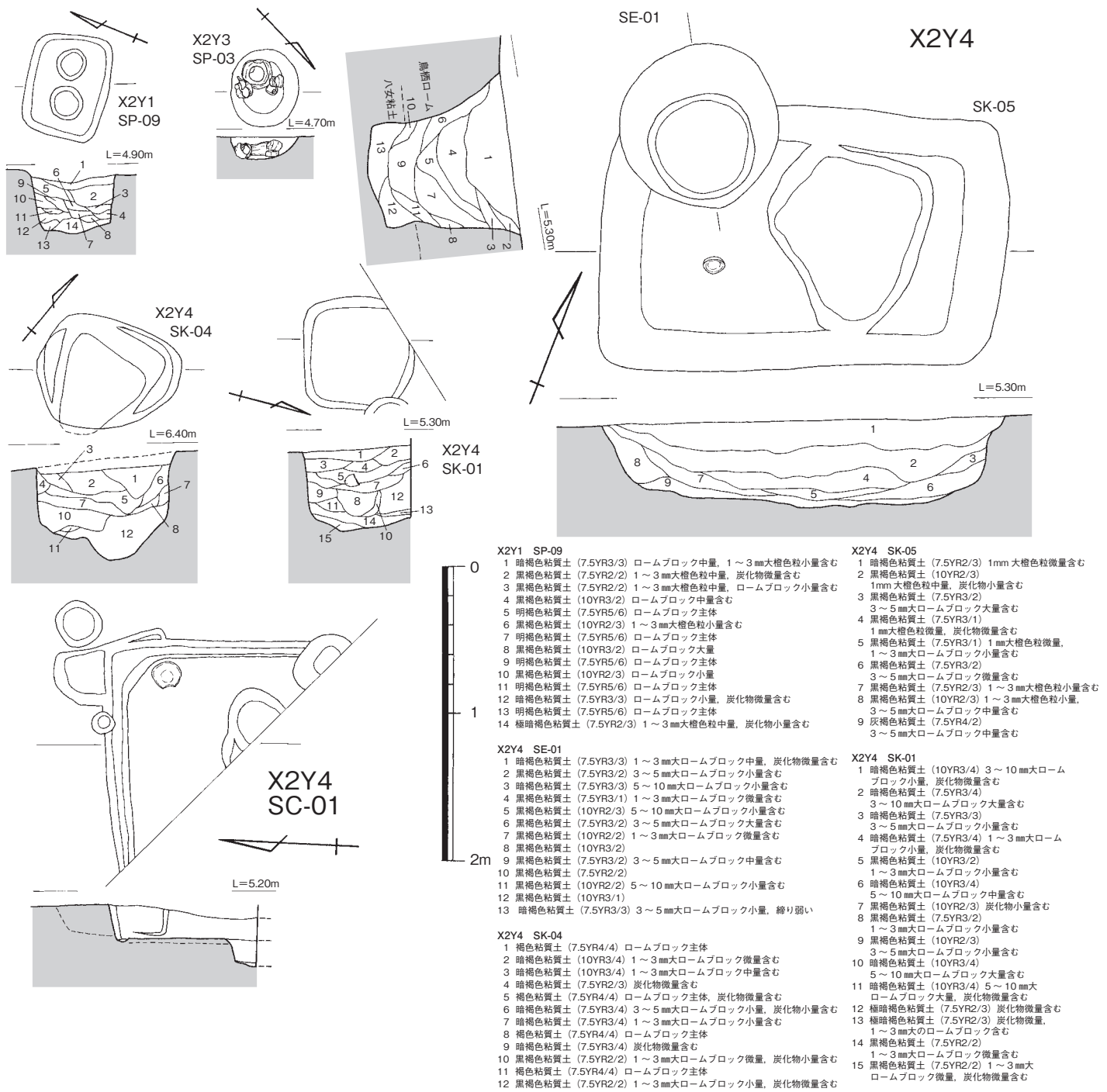


Fig. 11 X2 ライン遺構実測図 (1/40)

X2Y1 (Fig. 10, 11, PL. 4)

調査区全体に攪乱が及んでおり、主に柱穴遺構を検出した。

SP-01 は 40 × 45cm の略方形の平面プランをもち、中央に直径 25cm の柱圧痕がみられる。残存する深さは 28cm であった。SP-09 は 55 × 70cm の長方形の平面プランをもち、中に 2 本の柱圧痕がみられた。1 本は直径 18cm、もう 1 本は 25cm である。太い柱穴の圧痕が深く 35cm を測る。SP-06 も柱圧痕がみられ、深さは 29cm 確認された。調査面積が限られるため、掘立建物の方向や規模は不明である。

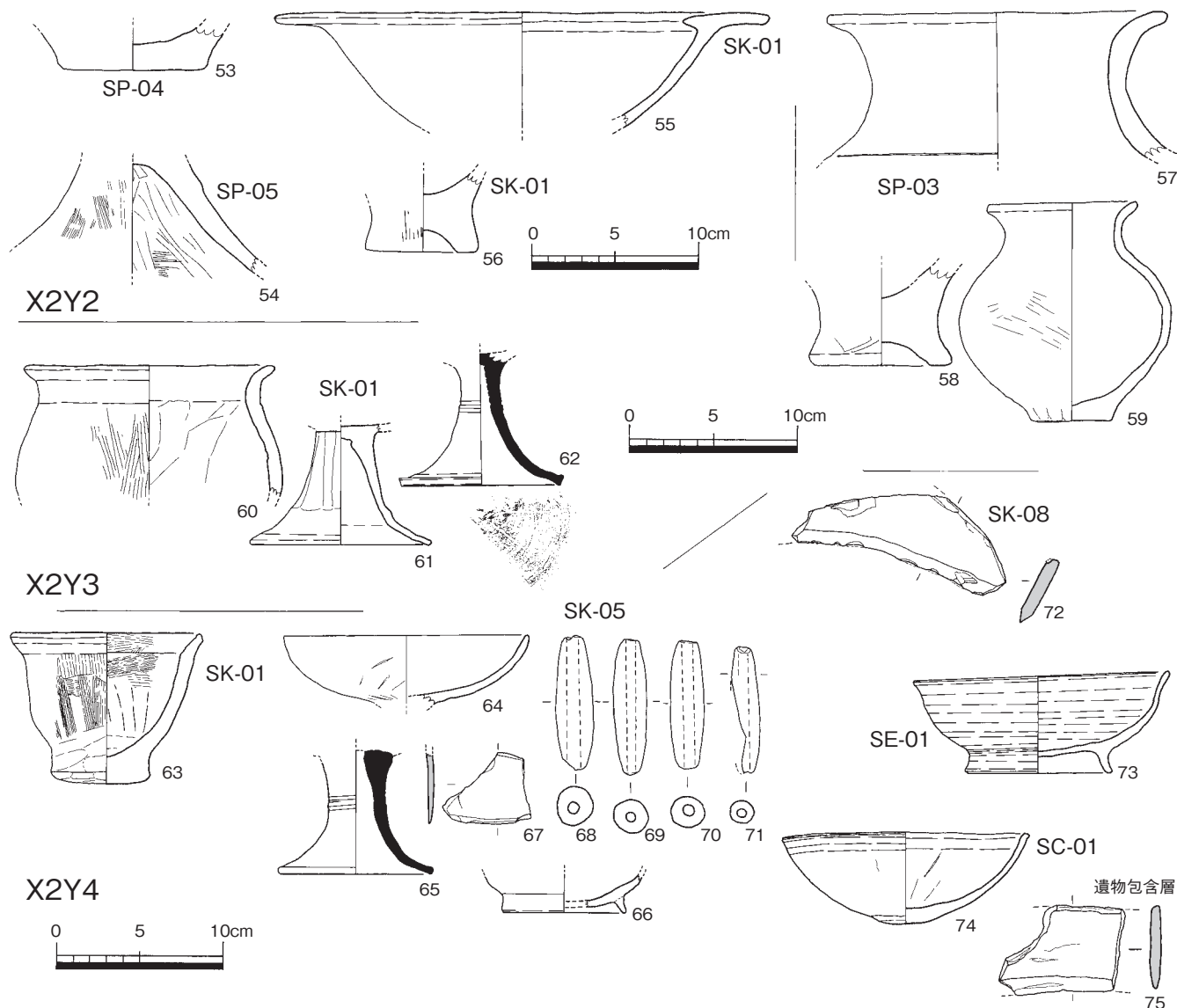


Fig. 12 X2ライン出土遺物 (1/4)

X2Y2 (Fig. 10, 12, PL. 4)

調査区南側の一角には、攪乱が及んでいる。不定形の土坑とピット状遺構を検出した。

SP-04は調査区壁際で検出された不定形のピット状遺構である。直径約70cmの範囲に幾つかの窪みがみられ、その中央部で底面からやや浮いた状態で土器が出土した。53は弥生時代の甕ないしは壺の底部破片である。底径は復元で8.0cmである。SP-05は調査区のほぼ中央部で検出された柱穴である。およそ40×60cmの略長方形の平面プランをもち、西側が一段低くなっている。そのほぼ中央部から遺物が出土した。54は弥生時代の蓋形土器片である。SK-01は調査区東側で検出された土坑である。長軸230cm、短軸150cmの長楕円形の遺構である。遺存していた深さは約50cmである。出土遺物の55は高杯の杯部破片である。復元口径は29.4cmである。56は甕の底部である。底径は6.6cmである。遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。

X2Y3 (Fig. 10, 11, 12, PL. 4, 16)

調査区では部分的に深い攪乱が及んでいた。柱穴、ピット状、土坑を検出した。

SP-02は直径70cmの円形を呈するピット状遺構で、残存する深さは15cmであった。SP-03は45×50cmの楕円を平面形とするピット状遺構である。残存する深さは15cmであった。出土遺物57は壺の頸部片で、胴部との境に沈線が1本めぐり、頸部の器壁は厚く、大きく外反する。復元口径は20.2cmである。58は甕の底部片で、底径は8.5cmである。59は壺である。復元口径8.9、最大胴部径12.6、底径4.7、器高13.2cmである。遺構の時代は、出土遺物から弥生時代前期末から中期初頭頃と考えられる。SK-01は調査区北側で検出された土坑である。遺構の多くを攪乱により失っている。確認された一辺は140cmを測り、平面形は隅丸の方形ないしは長方形プランであったと想定される。確認された深さは23cmである。出土遺物の60は土師器の甕である。復元口径14.5、最大胴部径15.8cm、外面は粗いハケ、内面は粗いヘラケズリで器面調整をおこなっている。61は土師器の高杯脚部である。底径は10.8cmで柱部はヘラケズリにより面取りをしている。62は須恵器の高杯脚部である。底径は9.8cmで脚内面に3本線によるヘラ記号がみられる。柱部に2本の凹線がめぐり、遺構の時期は、出土遺物から7世紀中頃と考えられる。

X2Y4 (Fig. 10, 11, 12, PL. 4, 5, 16)

調査区では、ピット状、柱穴、土坑、井戸、竪穴建物を検出した。SP-12、14、20、26、35など略方形の平面プランをもつ柱穴がみられるが、掘立柱建物として復元できたものはない。

SK-01は、調査区北東部端にて検出された土坑である。75×80cmの略方形の平面プランをもち、深さは約55cmが遺存していた。出土遺物63は、土層断面の中層から出土した完形の小型鉢である。口径11.4、底径5.7、器高9.1cmであり、器壁の内外面はハケで調整している。普遍的にみられる器形ではないが、土器の胎土と製作技法から弥生時代の遺物と考えられる。SK-04は、調査区の北側で検出した不定形の土坑である。長軸100、短軸80cmの土坑であり、中央部が最も深くなる。出土遺物は、図化しないが弥生時代中期の土器片が出土している。SK-05は調査区北側で検出した、SE-01に切られている大型土坑である。長軸が275cm、短軸が180cmを測る長方形プランの平面形を呈し、床面は中央部が緩やかに低くなっている。土坑の平面形は規格的であるが、堆積は自然堆積をしており、性格は不明である。出土遺物64は土師器の鉢ないしは高杯の杯部片である。口径は14.6cmで、器壁は全体的に摩滅している。65は須恵器の高杯脚部である。柱部に2本の凹線がめぐり、復元底径は9.2cmである。66は土師器の高台付椀である。高台径は7.4cmである。67は紛れ込みの弥生時代の石包丁破片である。68～71は底面近くから出土した土錘である。68の長さは8.1、最大幅2.2cmである。69の長さは8.2、最大径2.0cmである。70の長さは7.8、最大幅2.0cmである。71の長さは7.8cm、最大幅は欠損のため不測である。大型の土錘で網用と考えられる。遺構の時期は出土遺物から7世紀中頃と考えられる。SK-08は調査区南端で検出された土坑である。遺構の大半は調査区外に広がると考えられる。確認できた深さは約15cmである。出土遺物72は石鎌の破片である。幅4.4、厚さ0.8cmで、内湾する刃部が遺存する。SE-01はSK-05を切って掘削された井戸である。直径110cmの円形の平面プランをもち、壁の立ち上がりは強い。遺存する深さは約100cmで、下部1/3は白色粘土の八女粘土を掘り込んでいる。出土遺物の73は土師器の高台付椀である。口径14.7、高台径8.7、器高5.8cmを測り、高台は外に踏ん張っている。遺構の時代は、SK-05埋没後間もなく掘削されたものと考えられる。SC-01は調査区西側端にて検出された。竪穴建物の角が確認されたのみで、建物の多くは調査区外に広がる。建物の残存する深さは約25cmで、周壁溝の深さは約

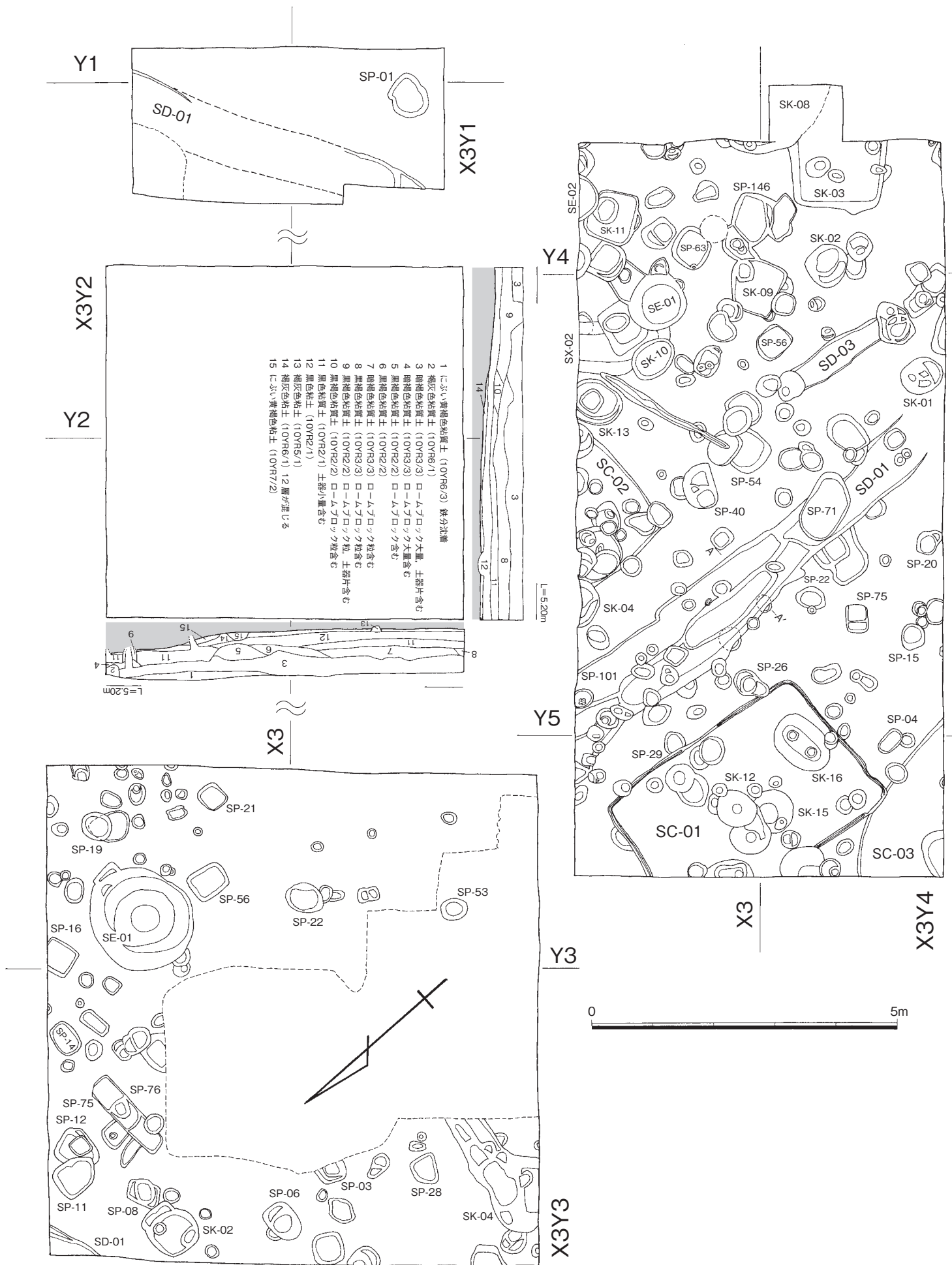


Fig. 13 X3ライン遺構配置図 (1/80)

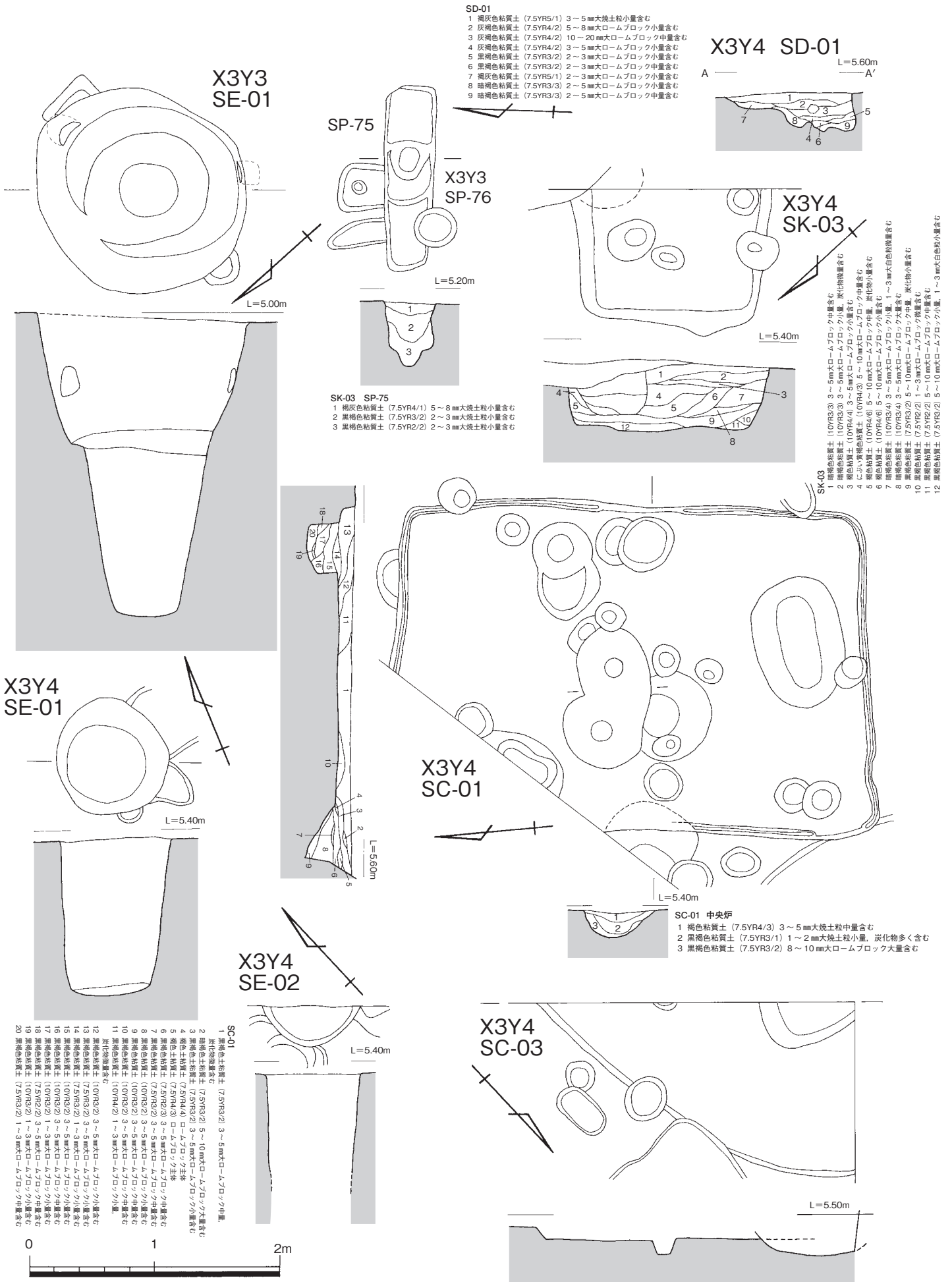


Fig. 14 X3ライン遺構実測図 (1/40)

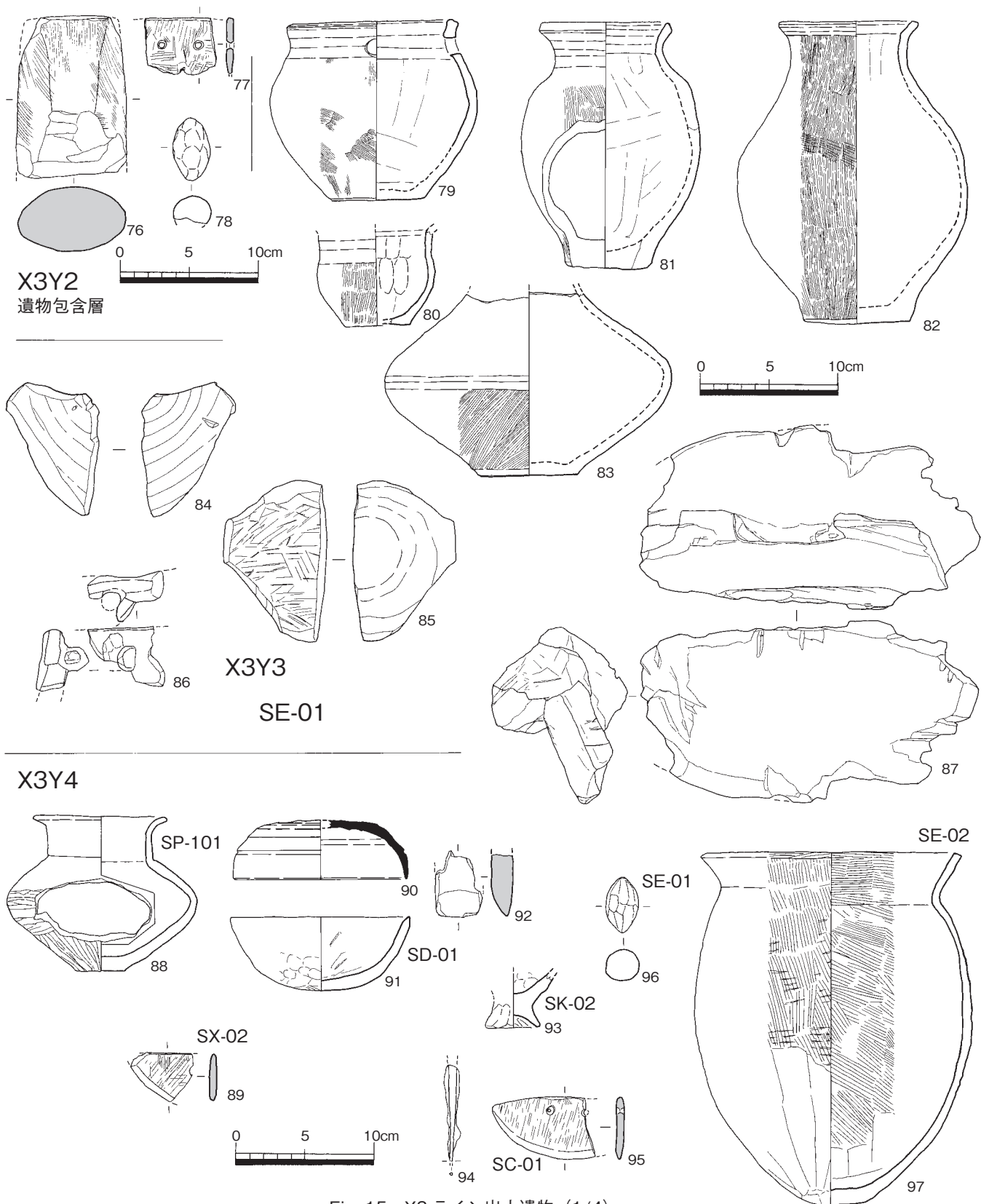


Fig. 15 X3ライン出土遺物 (1/4)

10cmであった。角部床面上に出土遺物 74 が置かれた状態で出土した。74 は土師器の椀である。口径14.6、底径3.1、器高5.5cmである。建物の時期は不明である。遺構検出時に 75 の石鎌の破片が出土している。幅5.1cm、厚さ0.6cmである。

X3Y1 (Fig.13, PL.5)

調査区内では、遺構面まで攪乱が及んでおり、多くの遺構を検出することができなかった。溝とピット状遺構を検出した。

SP-01は調査区西側で検出した不定形のピット状遺構である。長軸約70cm、短軸約60cmを測り、底面は平坦で、残存は約15cmである。SD-01は上面が攪乱されており、部分的な検出となった。西側調査区壁の観察で、溝の底部分が検出され幅約80cmであることが確認された。調査区東側では、溝の南側立ち上がりのみが確認され、方位がN-63°-Eをとることがわかった。時期のわかる遺物は出土していないが、埋土の土質と周辺状況から中世の遺構と考えられる。

X3Y2 (Fig.13,15, PL.5)

この調査区の基盤層は標高4.2mと低く、上面には黒色粘土が厚く堆積していた。検出遺構もなく、浅い谷状を呈すると考えられる。

上層には古代までの遺物を含む層が全体を覆っており、中世までには谷は完全に埋没しており、集落域に取り込まれたものと考えられる。76は玄武岩の大型蛤刃石斧片である。刃部は欠損しており、残存長11.9、幅7.9、最大厚4.8cmである。77は粘板岩製の石包丁である。刃部は欠損しており、厚さは0.6cm、両面から穿孔した2孔の間隔は2.3cmである。78は投弾である。残存長4.6、最大幅2.7cmである。

X3Y3 (Fig. 13, 14, 15, PL. 6, 16, 17)

調査区内には深い攪乱が及んでいたが、南側は遺構密度が低く、南東側の浅い谷の立ち上がり部と考えられる。ピット状遺構、柱穴、土坑、井戸などを検出した。

SP-03、08、12、14、16、21、56など略方形ないしは略長方形の平面プランをもつものが検出されたが、掘立柱建物の規模や方向が特定できたものはない。SP-75、76は柱穴が切り合うものか、段掘り状のものか判断ができなかった。幅40cm、長さ150cmの溝状の平面形をしており、最大の深さは53cmであった。調査区北端の角にて検出されたSD-01の埋土は暗褐色であり、東側のX4Y3、X5Y3調査区で検出された溝と同一遺構の可能性が高い。SE-01は調査区東側で検出された素掘り井戸である。直径150～180cmの略円を平面形とし、最大深さは240cmであった。2段掘りになっており、1段目は約100cmの深さで段をもって足かけ用の穴が2ヶ所みられる。2段目は直径100cmの円形で約140cm掘削されていた。出土遺物79は短頸の甕である。口径12.4、最大胴部径14.9、底径7.0、器高13.1cmであり、頸部の対面に径1.2cmの穿孔が2孔みられる。80は小型の甕ないしは壺の破片である。上部が欠損しており不明である。最大胴部径は8.5、底径4.9cmである。81は壺である。口径9.6、最大胴部径13.4、底径6.3、器高18.1cmである。胴部の一部は欠損しており、打ち欠きの可能性もある。82は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形で出土した壺である。復元口径10.1、最大胴部径16.4、底径7.8、器高22.1cmである。外面の器面調整は細かいタテハケである。83は頸部を欠くが細頸の壺である。最大胴部径20.6、底径7.3cmである。外面の器面調整は細かいハケである。84は広葉樹を削り抜いてつくった容器片である。85は広葉樹を削り抜いてつくった容器の底である。86は広葉樹を削りだしてつくった容器の紐かけの突起部である。87は広葉樹の芯去材でつくった脚付槽または椅子である。弥生時代後期初頭の井戸である。

X3Y4 (Fig. 13, 14, 15, 41, PL. 6, 17)

調査区内で検出された遺構の密度は高く、柱穴、ピット状遺構、溝、土坑、竪穴建物などを確認した。

柱穴には掘方も深く柱痕跡がみられるものもあったが、調査範囲が限られるため規模や方向が確認されたものはない。SP-101はSD-01に切られる。調査区の北側で確認されたピット状遺構で、直径30cmの円形を平面プランとし、深さは40cmである。出土遺物88は壺である。胴部の一部を欠くが、ほぼ完形で出土した。口径9.7、最大胴部径13.6、底径3.5、器高11.3cmである。弥生時代中期初頭から前半頃と考えられる。SX-02はSE-01の東側の調査区端で検出された不定形の土坑である。出土遺物89は粘板岩製の石包丁である。厚さは0.6cmである。SD-01は、調査区のほぼ中央を北から南に緩やかに横切る溝である。方位はN-5°-Eをとり、幅は70～80cmであるが、部分的に掘り返しがおこなわれている。出土遺物90は須恵器の杯蓋である。復元口径12.6、器高4.4cmで天井部と胴部の境に沈線がめぐる。91は土師器の鉢である。口径12.9、器高5.4cmである。92は紛れ込みの弥生時代の片刃石斧片である。溝の時代は、出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。SK-02は調査区南側にて検出された、直径約70cmの楕円形の土坑である。残存する深さは65cmである。出土遺物93は脚付のミニチュア土器である。底径は3.9cmである。SK-03は、調査区南側端にて確認された土坑である。幅約150cmで、検出された長さは110cmで更に調査区外へと広がる。隅丸の角をもち、底面も平坦で規格的で整った掘方である。時期を示す遺物は出土しなかった。SC-01は、調査区北側で検出した竪穴建物である。SC-03を切っており、周壁溝の規模は長軸385cm、短軸260cmである。建物のほぼ中央部に位置するSK-12は被熱により赤色化しており、建物の炉と考えられる。支柱穴は不明である。出土遺物94は断面形円形の不明鉄製品である。95は石包丁で両面から穿孔した孔の間隔は2.4cmである。ガラス小玉309, 310が出土している。SC-02は、SC-01とSD-01を挟んで反対側に方位をあわせるように配置しているが、4cm程度の掘り込みと多くの遺構と切り合うことから、その様相は不明である。SC-03は、SC-01に切られる遺構である。5～8cmの掘方が緩やかに弧を描いており、支柱穴列は確認されていないが円形竪穴建物の可能性が考えられる。SE-01は、調査区東側で検出された素掘りの井戸である。直径約90cmの円形の平面プランをもち、検出された深さは約130cmである。時期のわかる遺物は出土しておらず、出土遺物96は、長さ4.0、最大径2.4cmの投弾である。SE-02はSE-01の東側、調査区端に位置している。遺構は調査区外に広がっており、狭小なため完掘はしていない。直径80cmの円形を平面プランとし、約80cm掘削したところで安全のため作業を止めた。出土遺物97は、ほぼ完形の甕である。口径18.8、最大胴部径19.9、器高25.7cmで外面の調整はタタキの後ハケ目調整をしている。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代初頭頃と考えられる。調査区内で遺構検出作業時にガラス小玉(311, 312, 313, 314, 315)と管玉(316)が出土している。

X4Y1 (Fig. 16, PL. 7)

調査区の基盤層は黄褐色粘土層で遺構は検出されなかった。基盤層の標高は低いところで4.48mを測り、X3Y2と同様に黒色粘土層が堆積しており、浅い谷の中と考えられる。

X4Y2 (Fig. 16, 17, 19, PL. 7, 17)

調査区の南側は浅い谷の影響で遺構の密度が低い。検出された遺構は北側に集中しており、柱穴、ピット状遺構、溝状遺構、不定形土坑である。

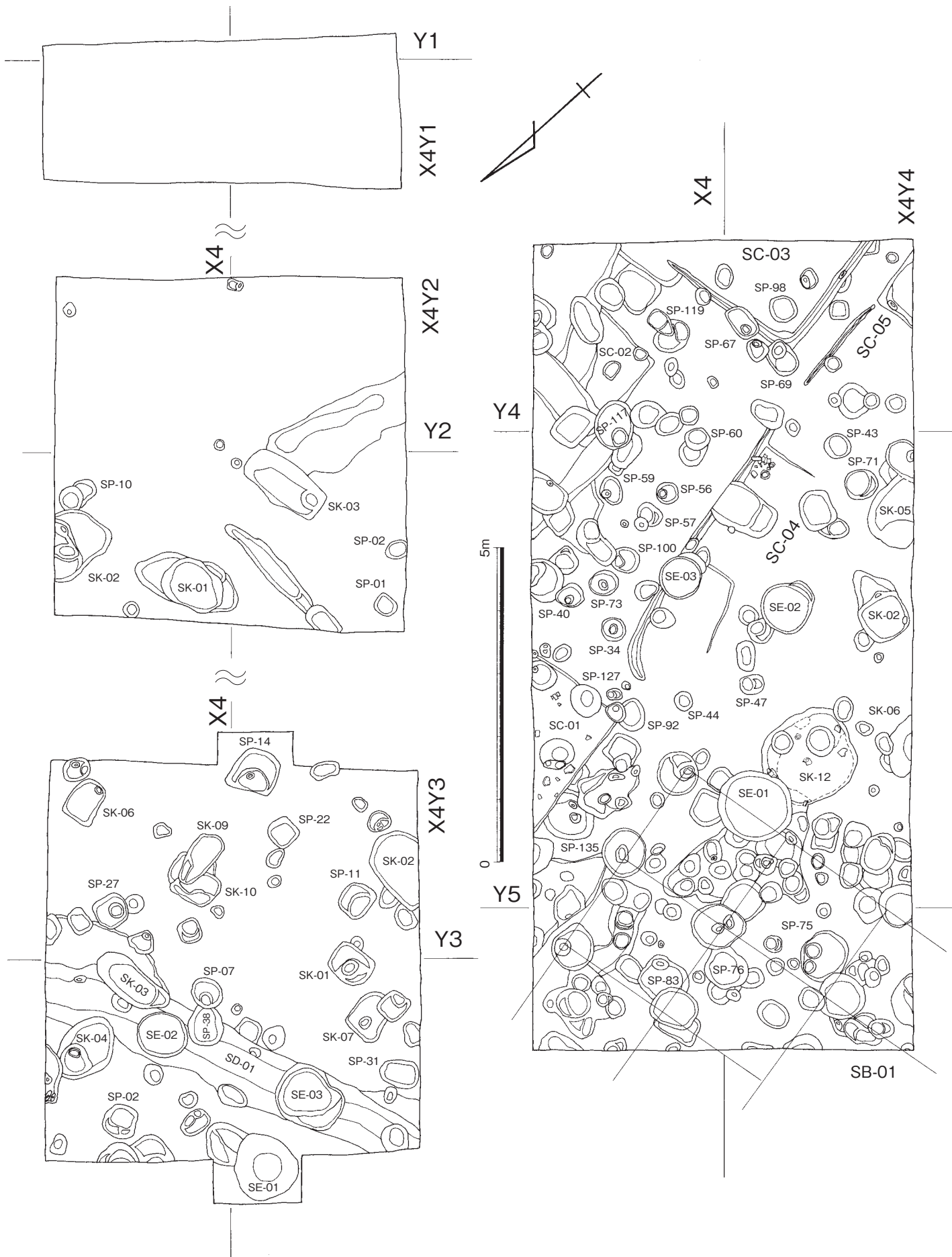


Fig. 16 X4ライン遺構配置図 (1/80)

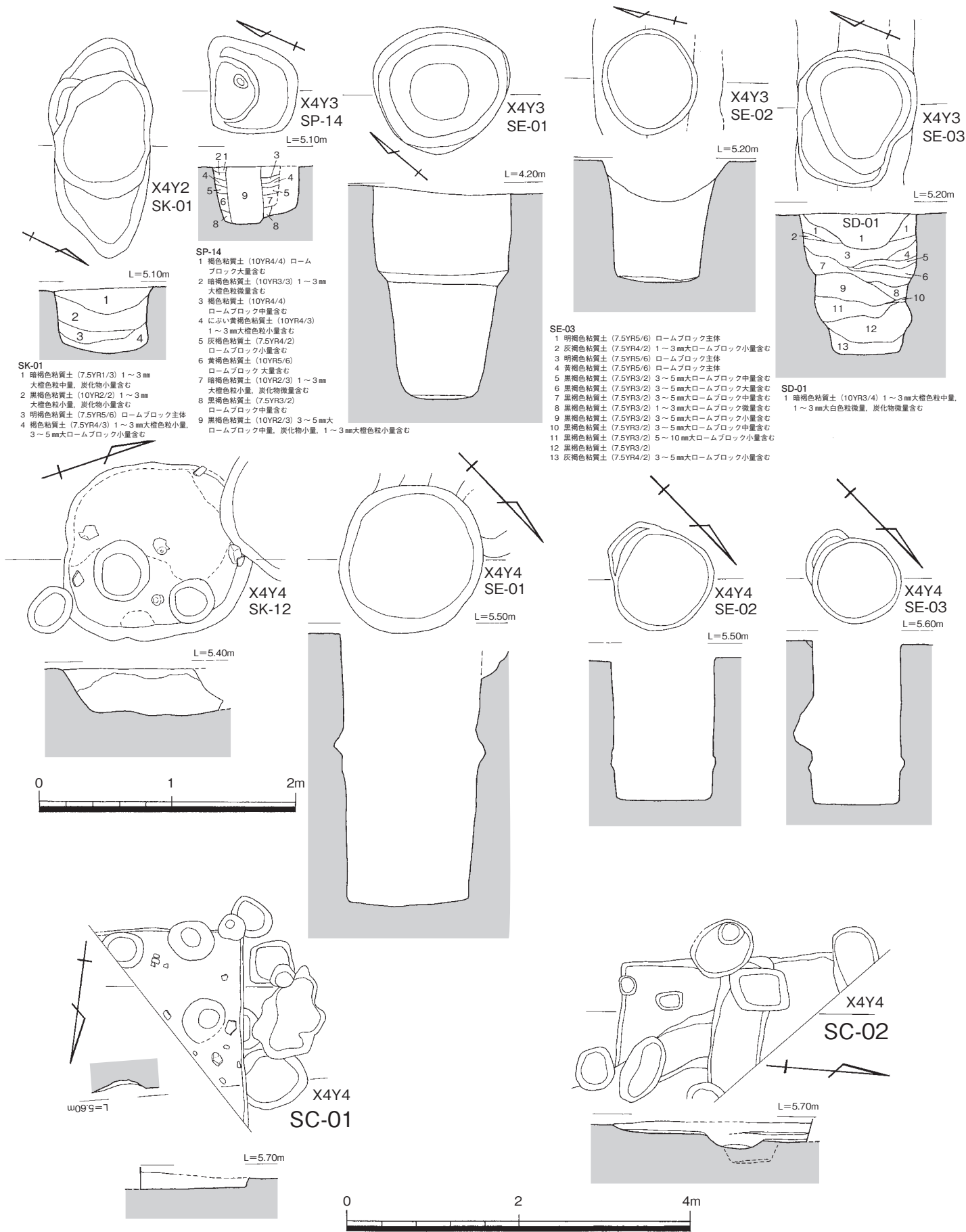


Fig. 17 X4ライン遺構実測図1 (1/40・1/60)

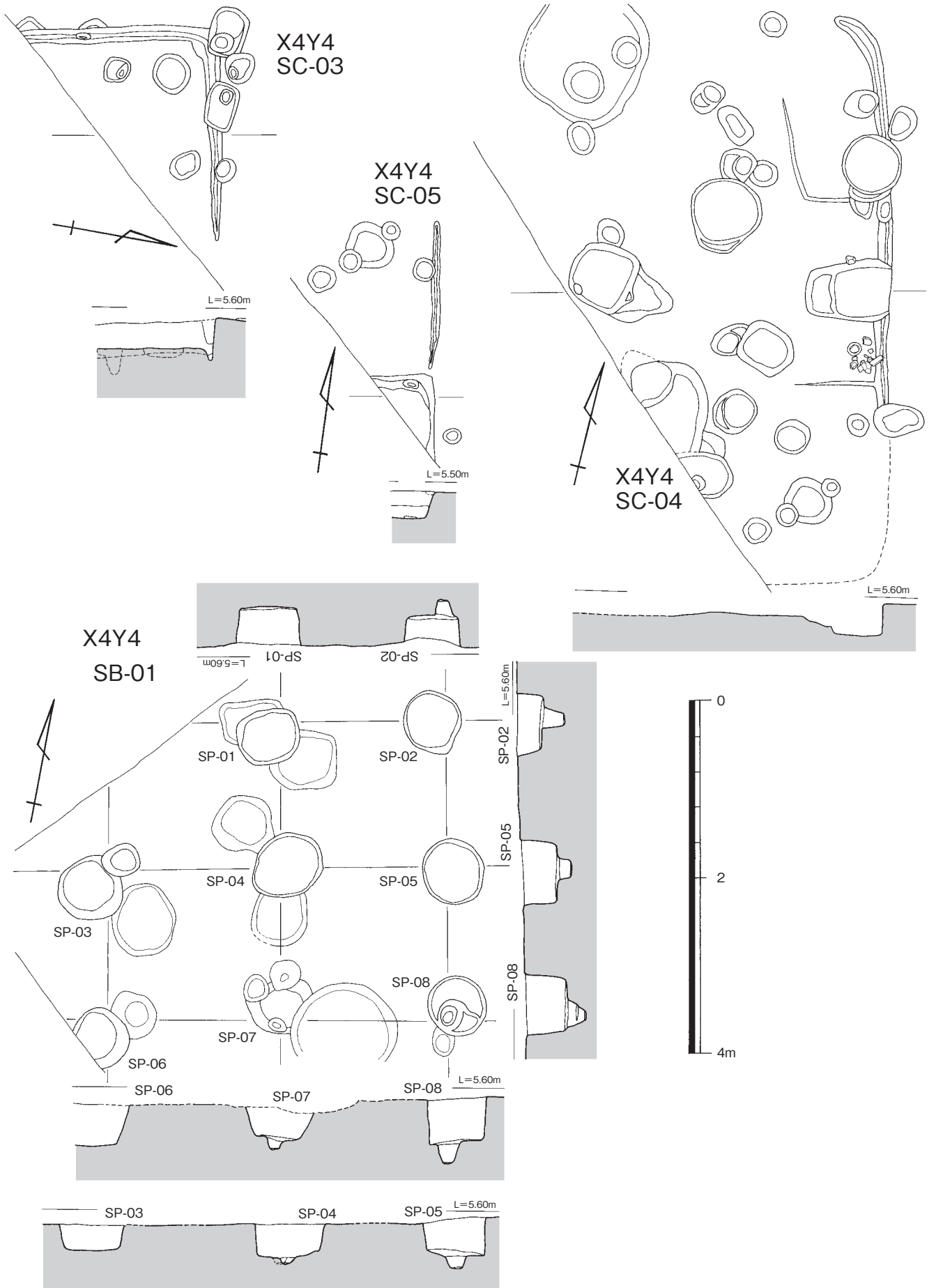


Fig. 18 X4ライン遺構実測図2 (1/60)

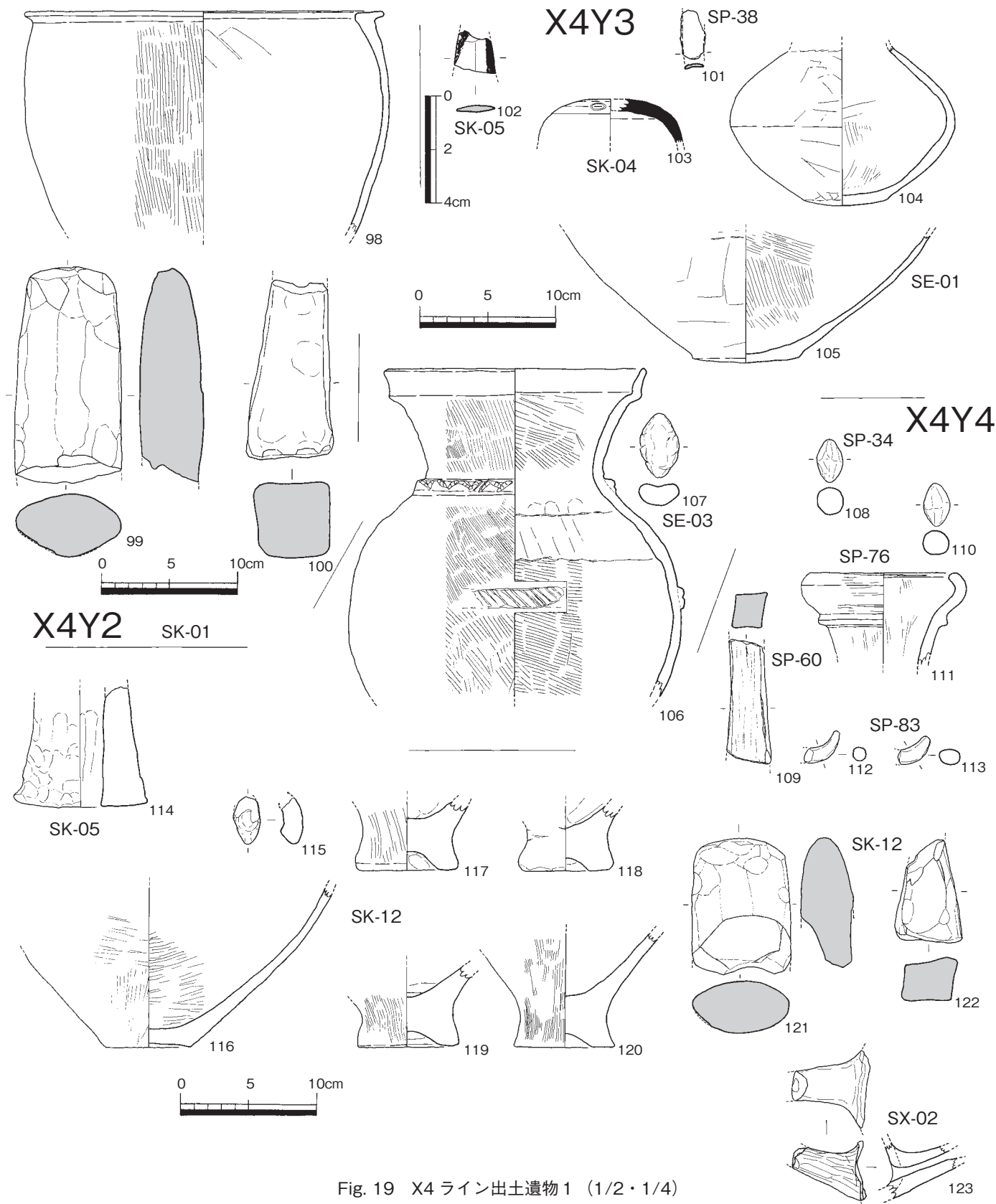


Fig. 19 X4 ライン出土遺物 1 (1/2・1/4)

SK-01 は調査区西側で検出した長軸 170cm、短軸 75cm の不定形土坑で、中央部が楕円形に窪んでいる。遺存する深さは 50cm である。出土遺物 98 は甕である。口径 26.6、最大胴部径 26.8cm である。弥生時代中期初頭頃のものと考えられる。99 は玄武岩の太型蛤刃石斧片である。最大幅は 7.7cm、最大厚さは 4.6cm である。100 は土製の支脚である。断面形が略方形を呈しており、底部は

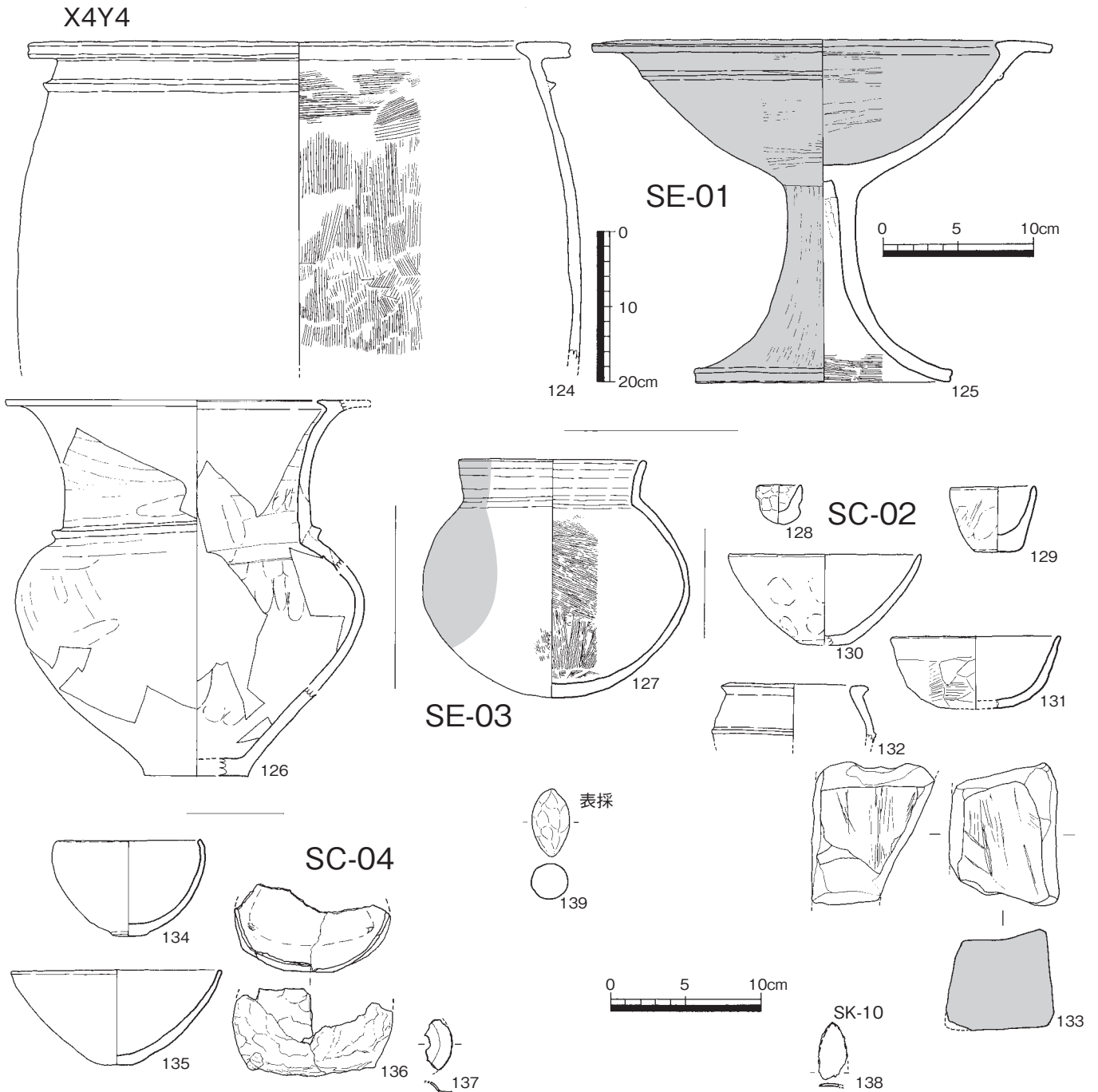


Fig. 20 X4 ライン出土遺物 2 (1/4・1/8)

約 5.5cm の略方形である。遺構内からは 5cm 大の炉壁塊が出土しており、分析では銅ではなく、鉄成分が検出された。谷の落ち際に位置し、堆積状況もレンズ状に自然堆積していることから、二次的な堆積も考えておかねばならない。

X4Y3 (Fig. 16, 17, 19, PL. 7, 17, 18)

調査区の南側は遺構密度がやや低く柱穴遺構が主体となっているが、北側には井戸が集中して掘削されはじめる。

SP-14 は、調査区南側にみられる柱穴遺構の性格の明瞭な例である。一辺約 70cm の略方形の平面プランをもち、遺存する深さは 55cm であった。土層断面の観察では、約 25cm の柱痕跡がみられ、柱

を埋めた埋土の状況も明瞭である。遺構の底面には柱の圧痕もみられる。残念なことに組み合わせられる他の柱穴が検出されず、建物規模や方向は不明である。SP-38はSE-02の西側に位置する直径30cmのピット状遺構である。出土遺物101は用途不明鉄製品の破片で、断面は細く湾曲している。SD-01は調査区のやや北側をN-82°-Eの方位に掘削されている。底面深さは西側に緩やかに低くなっている。X3Y3、X5Y3の溝と同一であれば、中世期の遺構である。SK-01は、55×65cmの略方形を呈する土坑ないしは柱穴である。深さは約60cm遺存しており、遺構内から遺物102の石剣の先端部近くの破片が出土している。断面形は細い菱形を呈しており、後世の紛れ込みと考えられる。SK-04はSD-01に切られる不定形土坑である。長軸115cm、短軸80cmの不定形の平面プランをもち、底面の北側は更に一段深くなる。遺存する深さは60cmである。遺構内から遺物103の須恵器杯蓋が出土している。口縁部を欠損しており、口径は不明であるが天井部に竹管文が押されている。SE-01は北側調査区際にて検出した井戸である。全てを調査するため調査区を拡幅した。直径約100cmの円形を平面プランとする素掘り井戸である。遺存する深さは170cmであるが、上面から約65cmの鳥栖ロームと八女粘土層の境目で緩く段がつき、更に100cm掘削している。出土遺物104は壺の胴部である。最大胴部径16.3cm、底径6.2cmである。105も壺の下半部の破片である。底径は7.7cmである。SE-02はSD-01の底から検出された。上部は溝によって壊されていると考えられるが、現状で直径約70cmの円形プランをもち、深さ約90cmが遺存していた。図化できる遺物は出土していない。SE-03もSD-01の底から検出された。歪な平面形をもつことから、2基の井戸が切り合っていることも考えられる。深さは110cmが遺存していた。出土遺物106は甕である。復元口径19.2cm、最大胴部径24.8cmである。口縁は複合口縁状をなし、頸部下に帯状の突帯を貼り付け、その上に工具により山形文を施文する。また、胴部にも帯状の突帯を貼り付け、斜め方向の凹線の連続文を施す。107は焼成前に潰された投弾である。長さは4.7cm、幅2.9cm、厚さ1.5cmで意図的に潰されている。遺構の時期は古墳時代初頭である。

X4Y4 (Fig. 16~20, 41, PL. 8, 18)

調査区内では、南東側調査区でみられる黒色粘質土層の堆積はみられない。標高約5.4mの基盤層上面には薄い遺物包含層が堆積している。堅穴建物の遺存が不良であることから、本来は南東側との比高差があったが、後世に削平されたものと考えられる。

SP-34は調査区のほぼ中央部に位置している。直径約35cmの円形の平面プランをもつ柱穴である。約35cmの深さがあり、底面に更に径10cmほどの柱圧痕が10cmの深さでみられる。出土遺物108はほぼ完形の投弾である。長さ3.2、最大厚2.0cmである。SP-60は調査区南東側に位置し、直径約35cmの円形の平面プランをもつ柱穴である。約50cmの深さが遺存しており、出土遺物109の砥石が出土した。石材は砂岩で、両端は欠損している。約9cmが遺存しており、4面に擦痕がみられる。SP-76はSB-01のSP-04に切られる。直径約60cmの楕円形の平面プランをもち、約30cmの深さが遺存していた。出土遺物110は投弾である。長さ3.2、最大厚さ1.8cmである。111は袋状口縁壺の口縁部破片である。復元口径12.0cmで、口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期と考えられる。SP-83はSB-01のSP-01に切られる。一辺約65cmの略方形の平面プランをもち、深さ約20cmが遺存しており、底面は平坦である。出土遺物112、113はミニチュア土器の把手と考えられる。断面径は1.0~1.5cm、長さは約3cmである。土器の胴部は出土していないが甌と考えられる。SK-05は南側調査区端にて検出した土坑で、遺構の一部は調査区外に広がる。長軸は約100cmを測り、現存する深さは約55cmであった。出土遺物114は支脚である。上部は欠

損しており、断面径は楕円形を呈している。体部中央には径2.3～2.7cmの穿孔がみられる。SK-12はSE-01に切られる土坑である。140×150cmの隅丸長方形の平面プランをもち、最大深さは約35cmで底面は船底形を呈しており、白色粘土を一面に張っている。出土遺物115は投弾の破片であり、最大厚さ2.0cmである。116は壺の底部破片である。底径6.2cmで緩やかな上げ底になっている。117～120は甕の底部である。すべて上げ底であり、底径は6.9～7.6cmである。121は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。現状で最大幅7.1cm、最大厚3.8cmである。122は砂岩製の砥石破片である。4面に擦痕がみられる。遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前半頃と考えられる。SX-02は調査区南東角で検出された不定形の土坑であり、遺構の大半は調査区外へ広がる。深さ約20cmが遺存しており底面は平坦である。出土遺物123は注口土器の注口部である。外面はやや赤色をしており、赤色顔料の塗布の可能性がある。SE-01は調査区中央部やや北寄りで見出された素掘りの井戸である。平面は直径約120cmの円形を呈し、深さは約210cmが残存していた。底面は直径約90cmの円形をしている。壁面は、鳥栖ロームと八女粘土の境目が窪んでいる。出土遺物124は甕棺の上部片である。復元口径71.2cmである。井戸枠に転用か。125は丹塗磨研の高坏である。復元口径30.5cmで口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。126は壺である。口縁は鋤先形をしており、頸部と胴部の境目に断面三角形の突帯を巡らせている。遺構の時期は、切り合い関係と出土遺物から弥生時代中期後半の始め頃と考えられる。SE-02は調査区のほぼ中央部で見出した素掘りの井戸である。平面は直径約80cmの円形を呈しており、深さは約110cmが遺存していた。壁面は、鳥栖ロームと八女粘土の境目が窪んでいる。遺構の時期が特定できる良好な遺物は出土していない。SE-03はSE-02の東側にて見出された素掘りの井戸である。平面は直径約65cmの円形を呈しており、深さは約125cmが遺存していた。壁面には足かけの凹みがみられた。出土遺物127は短頸の丸底壺である。口径12.3、器高15.9cmである。SC-01は、調査区北端で見出された竪穴建物である。建物の角と考えられる遺構を確認したが、その範囲は調査区外に広がっている。見出された深さは約20cmである。建物のカマドか確定はできないが、被熱により赤色化した遺構が近接している。SC-02は、調査区東端にて見出された。多くの遺構と切り合っており、建物規模は不明である。出土遺物128、129は手づくねのミニチュア土器である。128の口径は3.0、器高2.6cmである。129の口径は5.6、底径3.3、器高4.3cmである。130は平底の鉢である。口径12.6、底径3.0、器高6.1cmである。131は丸底の鉢である。口径11.0、器高4.8cmである。132は小型壺である。胴部の上位に突帯がめぐる。復元口径9.6cmである。133は砂岩製の砥石片であり、4面に擦痕がみられる。掘削時にガラス小玉(318)が出土している。遺物には紛れ込みがみられ、古墳時代以降の建物と考えられる。SC-03は、調査区南端にて見出された竪穴建物である。建物の角が確認され、壁際に幅約15cm周壁溝がめぐる。約35cmの深さで平坦な床面が遺存していたが、床面上にて遺物は出土しなかった。SC-04は、調査区南側で周壁溝が見出された竪穴建物と考えられる遺構である。付設していたと考えられる壁際土坑とベッド状遺構の痕跡がみられる。また、壁溝部から遺物が集中して出土した。土坑を建物の中央と仮定すると長さ約7mに復元可能である。出土遺物134、135は鉢である。134の口径は9.4、底径2.4、器高6.3cmである。135は口径13.8、底径1.9、器高6.4cmである。136は器壁の薄い手づくね土器で、革袋形か三足器の破片と考えられる。137は土器とは離れた場所から出土した不明青銅器片である。形状から銅釦の可能性が考えられるが、復元径は4.2cmと小さい。建物の時期は、その想定される形状から弥生時代終末期頃と考えられる。SC-05はSC-04の南側で方向を合わせるように見出された竪穴建物の痕跡である。壁際土坑と壁溝の可能性が考えられる。規模と時期は不明である。SB-01は調査区北側で確認された大型掘立建物である。W-15°-Nに方位をとる2間以上×2間以上

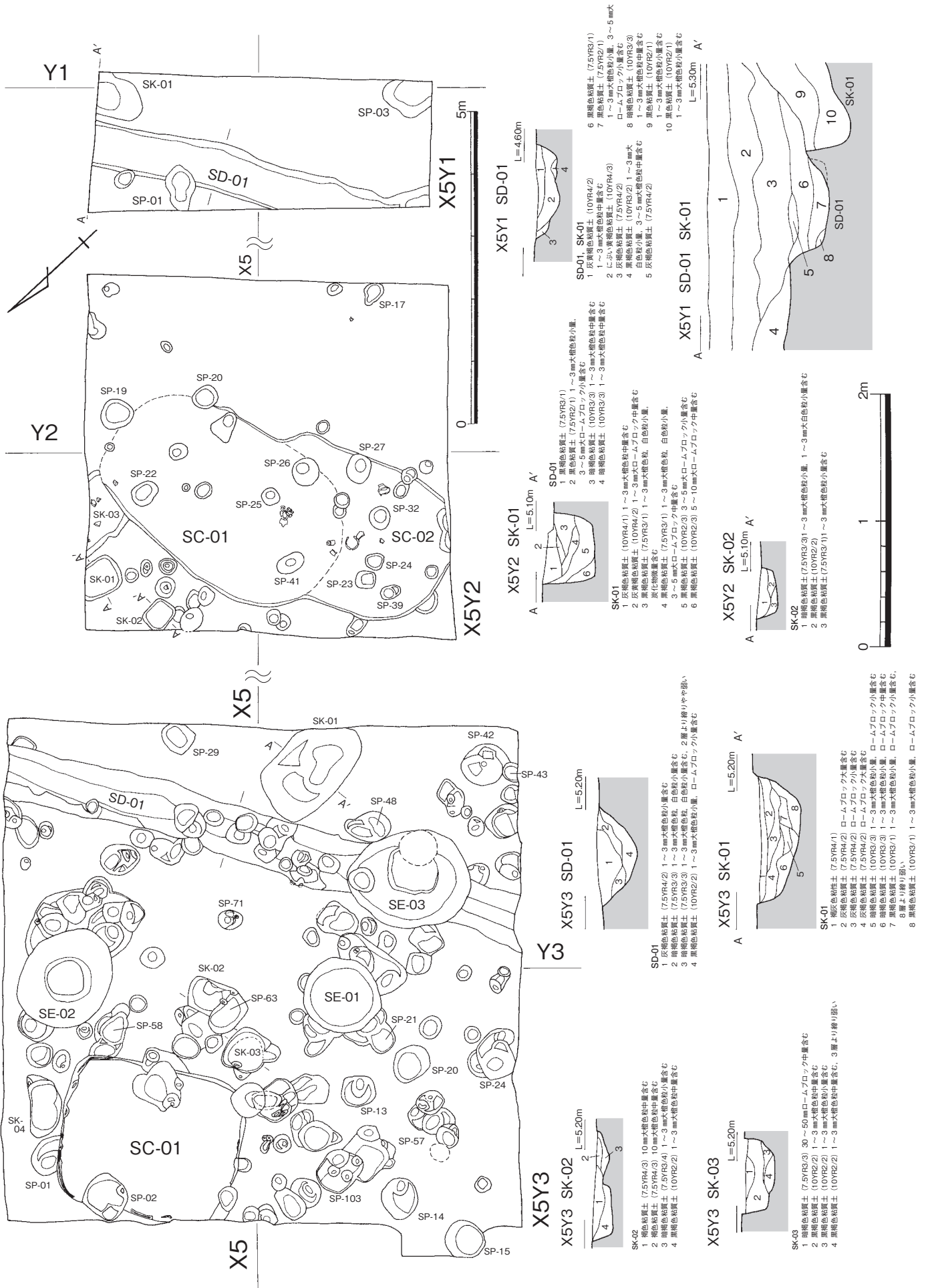


Fig. 21 X5Y (1, 2, 3) 遺構配置図・土層断面図 (1/80・1/40)

の総柱建物である。柱穴の平面形は径 65～70cm の円形を呈しており、残存の良好な柱穴は約 70cm の深さがあった。柱の圧痕から想定される柱の径は 20cm 程度である。柱間は芯々で 170～190cm である。各柱穴からは、須恵器の小破片が出土しており、SP-04 からは用途不明鉄製品 **138** が出土している。残存長 3.5cm、厚さ 0.2cm で緩やかに湾曲している。建物の建築時期は、配置からも X5Y4 の SB-01 と同時期と考えられる。この調査区の表採遺物にはほぼ完形の投弾 **139** がある。長さ 4.5、幅 2.5cm である。また、滑石製白玉 **317, 320** とガラス玉未成品 **319** が出土している。

X5Y1 (Fig. 21, 23, PL. 9)

調査区は浅い谷の中に入っているようで、基盤層の上には黒色粘土層が堆積しており、遺構の密度も低い。検出した遺構はピット状遺構、不定形の土坑と中世の溝である。SK-01 は調査区東壁端にて検出された不定形の土坑である。出土遺物 **140** は灰白色をした粘板岩系の不明石製品である。板状製品の莖部と考えられる。SK-01 に切られる SD-01 の掘り込み面は更に上面からと考えられ、確認された溝はその底面部分と考えられる。溝の方位は W-60° -N にとる。断面形は緩やかな U 字形を呈している。出土遺物 **141** は土師器小皿である。口径 9.2、底径 6.5、器高 1.3cm である。12 世紀前半頃の遺物と考えられる。この調査区の遺物包含層から **142** の投弾が出土している。長さ 3.7、最大幅 2.2cm である。

X5Y2 (Fig. 21, 22, 23, PL. 9)

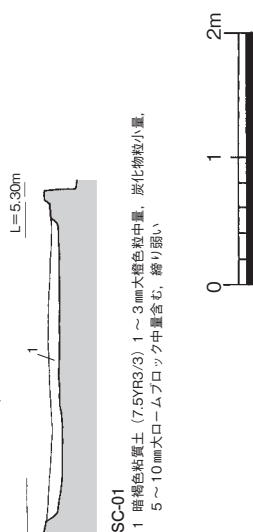
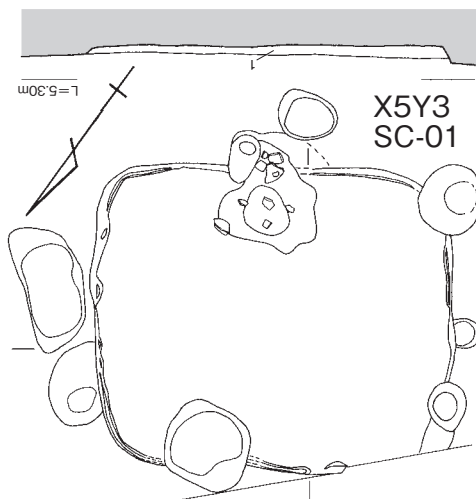
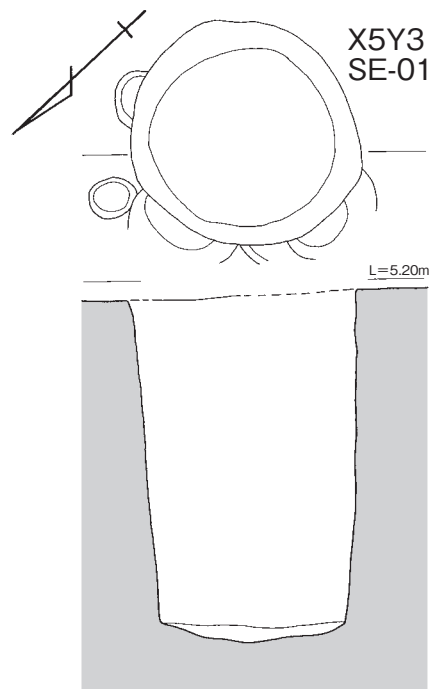
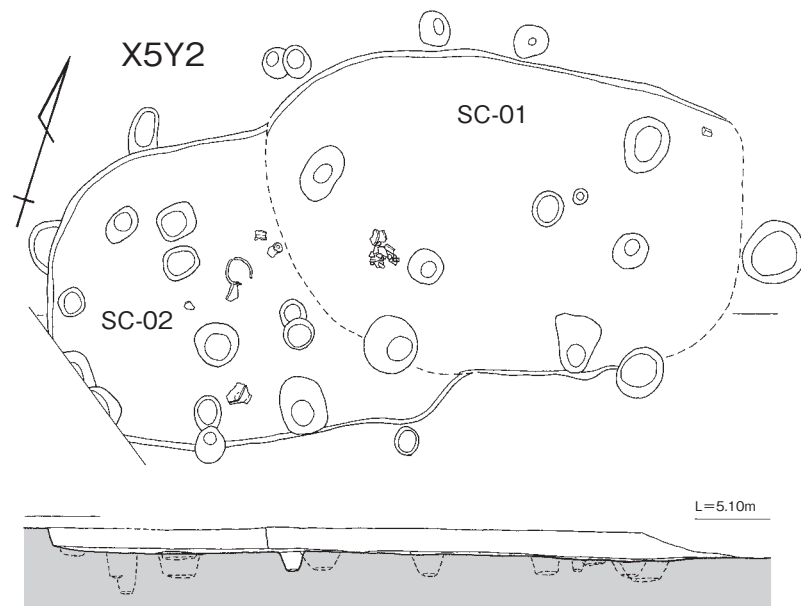
調査区内の検出遺構は、立地状況から北側に集中しており、ピット状遺構、柱穴、土坑、竪穴建物を検出した。

SK-01 は調査区北端にて検出された、隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。長軸 70 × 短軸 55cm を測り、深さ 40cm が遺存する。SK-02 も調査区北端にて検出された、隅丸方形の平面形を呈する土坑である。一辺約 45cm を測り、深さ約 15cm が遺存していた。図化できる遺物は出土していない。SK-03 は SC-01 を切る不定形の土坑である。底面は緩やかな船底形を呈し、最深部で 15cm が遺存していた。出土遺物 **143** は須恵器の大型容器の胴部破片である。**144** も須恵器容器の底部片である。SC-01 は小判形を呈する竪穴建物である。遺存が悪く床面の一部と考えられる部分を検出した。規模は長軸約 400cm、短軸 240cm と考えられ、支柱穴等の構造は不明である。出土遺物 **145** は床面上で検出した甕である。口径 26.0cm である。**146** は甕底部片である。底径 7.2cm である。SC-02 は SC-01 に切られる同形の竪穴建物である。建物の長軸は不明であるが、短軸長は約 240cm と考えられる。床面上から遺物が出土した。**147** は蓋形土器である。天井部径は 6.4cm である。**148, 149** は甕の上部である。**148** の口径は 22.3cm である。**149** の口径は 28.0cm である。**150, 151** は甕の底部である。**150** の底径は 6.7cm である。**151** の底径は 6.4cm である。2 基の竪穴建物はほぼ同規格で、出土遺物にも時間差がみられないことから、建物は時間を空けずに建替えられたと考えられる。建物の時期は、弥生時代中期初頭頃と考えられる。

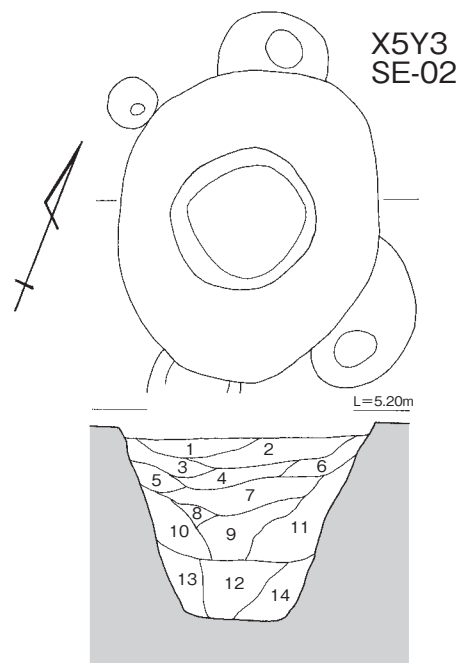
X5Y3 (Fig. 21, 22, 24, 25, 41, PL. 9, 19)

調査区からは多くのピット状遺構、柱穴、土坑、溝、井戸、竪穴建物を検出した。

SP-21 は SE-01 の西側にて検出されたピット状遺構である。直径約 40cm で、深さ約 35cm 遺存していた。出土遺物 **152** は蓋形土器である。天井部径は 6.4cm である。SP-39 は調査区南側で検出された直径約 40cm の不定形ピットである。出土遺物 **153** は直口壺の頸部である。口径 10.4cm を測る。



SC-01
1 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) 1~3mm大橙色粒中量, 炭化物粒少量,
5~10mm大ロームブロック中量含む, 締り弱い



SE-02

- 1 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 1~3mm大橙色粒微量含む, 締り強い
- 2 褐灰色粘質土 (7.5YR4/2) 1~3mm大橙色粒少量含む, 締り強い
- 3 褐灰色粘質土 (7.5YR4/1) 1~3mm大橙色粒中量含む
- 4 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 1~3mm大橙色粒中量含む
- 5 褐灰色粘質土 (10YR4/1) ロームブロック中量含む
- 6 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 1~3mm大橙色粒中量, 炭化物少量含む
- 7 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 1~3mm大橙色粒少量含む
- 8 褐色粘質土 (10YR4/6) ロームブロック大量含む, 締り強い
- 9 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) 1~3mm大橙色粒少量含む
- 10 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) 1~3mm大橙色粒少量含む 9層に比べ締り弱い
- 11 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) 1~3mm大橙色粒少量含む 9層に比べ締り弱い
- 12 黒褐色粘性土 (7.5YR2/2)
- 13 黒褐色粘性土 (7.5YR2/2) 12層に比べて締り弱い
- 14 黒褐色粘性土 (7.5YR2/2) 12層に比べて締り弱い

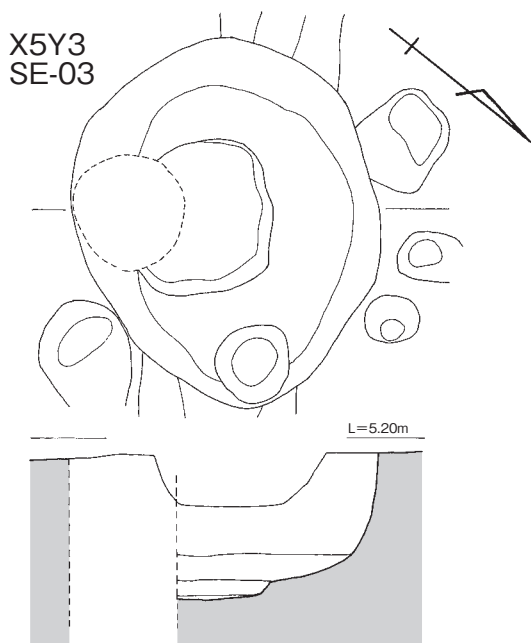


Fig. 22 X5Y (2, 3) 遺構実測図 (1/60・1/40)

SP-43は調査区南端にて検出されたピットである。直径約25cm、深さ約15cmである。出土遺物**154**は小型鉢の上半部片で、復元口径10.0cmである。SP-48はSD-01の南側にて検出された深さ約20cmの不定形ピットである。出土遺物**155**は小型の甕片である。滑石製白玉**321**が出土している。SP-58はSC-01とSE-02の間にて検出された不定形ピットである。深さは約55cm遺存していた。出土遺物**156**は土器脚部の破片で脚径は11.0cmである。SD-01はN-62°-Eに方位をとる溝で、X3Y3、X4Y3調査区からつづくものと考えられる。断面形がU字形を呈しており、灰褐色土を埋土の主体としている。出土遺物**157**は須恵器の甕である。底部にヘラ記号が刻まれている。**158**は石包丁の破片である。SK-01は調査区南壁端にて検出した不定形の土坑である。長軸170cm、短軸105cm、深さ約35cmである。出土遺物**159**は直径4.0cm、厚さ1.2cmの円盤状土製品で土器片を打ち欠き加工したものである。SK-02はSP-63に切られた不定形土坑である。SK-03はSC-01の南側にて検出された直径60cmの土坑である。深さは25cm遺存しており、石包丁(**160**)が出土している。SC-01は、調査区北側で検出した小型の竪穴建物である。230×280cmの規模をもち、南側に被熱により赤色化した土坑をもつ。床面は平坦であったが、検出面から10cm程度しか遺存していなかった。土坑から**161**の壺の下半部片が出土している。胴部にコ字突帯をめぐらし、底径は7.4cmである。SE-02は調査区北東にて検出した井戸である。平面形が長軸160cmの楕円形を呈する井戸である。約100cmの深さが遺存していた。壁は比較的緩やかで擂鉢状を呈するが井戸枠があったか不明である。出土遺物**162**、**163**は越州窯系青磁碗である。9世紀後半から10世紀前半頃の井戸と考えられる。SE-03はSD-01により削平されている。200×150cmの楕円の平面形をもち、深さ約45cmが遺存していた。時期が特定される遺物は出土しなかった。この調査区の遺物包含層からは**164**の投弾が出土している。SE-01は調査区中央やや西寄りにて検出した素掘り井戸である。平面は径120cmの円形を呈しており、深さは170cmが遺存していた。底面の径は約95cmで、壁は真直ぐに立っている。出土遺物**165**～**171**は壺である。**165**は黒褐色の壺で、胴部に断面三角形の突帯をめぐらす。口径16.7、底径5.3、器高18.5cmである。**166**はミガキ調整で仕上げた壺である。復元口径15.6cmである。**169**の口径は16.0cmである。**172**～**178**は甕の上半部片である。**179**はほぼ完形に復元できる甕である。口径27.1、底径7.2、器高36.5cmである。**180**～**188**は甕の底部片である。**189**、**190**は支脚である。**191**は砂岩製の砥石で、4面に擦痕がみられる。**192**は投弾である。**193**は広葉樹を斜桁目に木取りした用途不明部材である。本来は円形の部材と斜め方向に組み合っていたと考えられる。この遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。調査区内で遺構検出時に滑石製白玉**322**が出土している。

X5Y4 (Fig. 26～30, 41, PL. 10, 11, 19)

この調査区が今回の調査において最も広く、遺構密度の高い調査区である。ピット状遺構、柱穴、土坑、貯蔵穴、井戸、竪穴建物、大型掘立柱建物などを検出した。

SP-36はSC-03の北側に位置するピット状遺構である。平面は約40cmの円形を呈しており、深さは約40cm遺存しており、**194**の投弾が出土した。投弾の長さ3.3、最大幅2.2cmである。SP-64はSP-36の北側にて検出された。ピット状遺構である。長軸50cm、短軸30cmの長円の平面形を呈しており、深さは約35cm遺存していた。出土遺物**195**が出土した。砂岩製の砥石片で、2面に擦痕がみられる。SP-65はSP-64の東側に位置するピット状遺構である。平面形は直径約60cmの楕円形を呈しており、深さは約55cm遺存している。長さ4.3、最大幅2.2cmの投弾(**196**)が出土している。SP-172はSC-01の北側に位置している。平面は直径約30cmの楕円形を呈しており、深さは約35cm

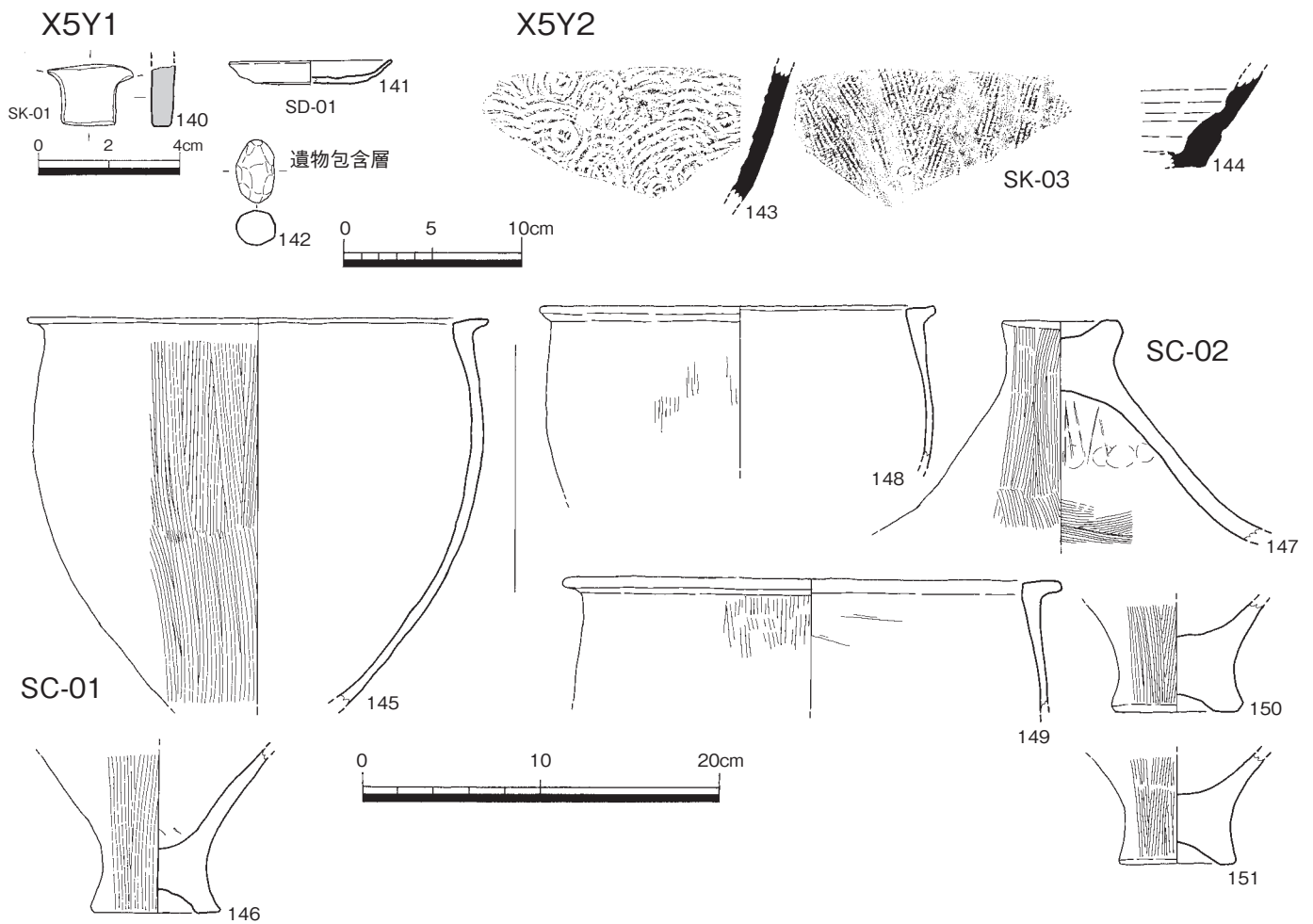


Fig. 23 X5Y (1, 2) 出土遺物 (1/2 · 1/4)

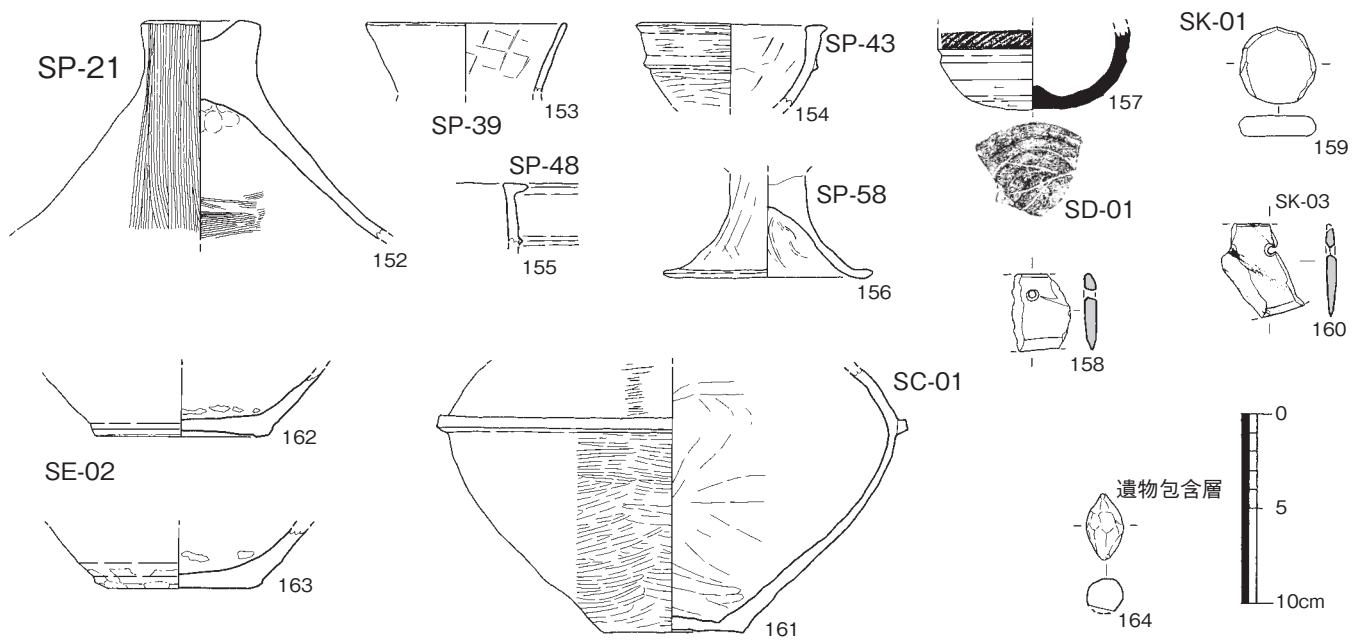


Fig. 24 X5Y3 出土遺物 (1/4)

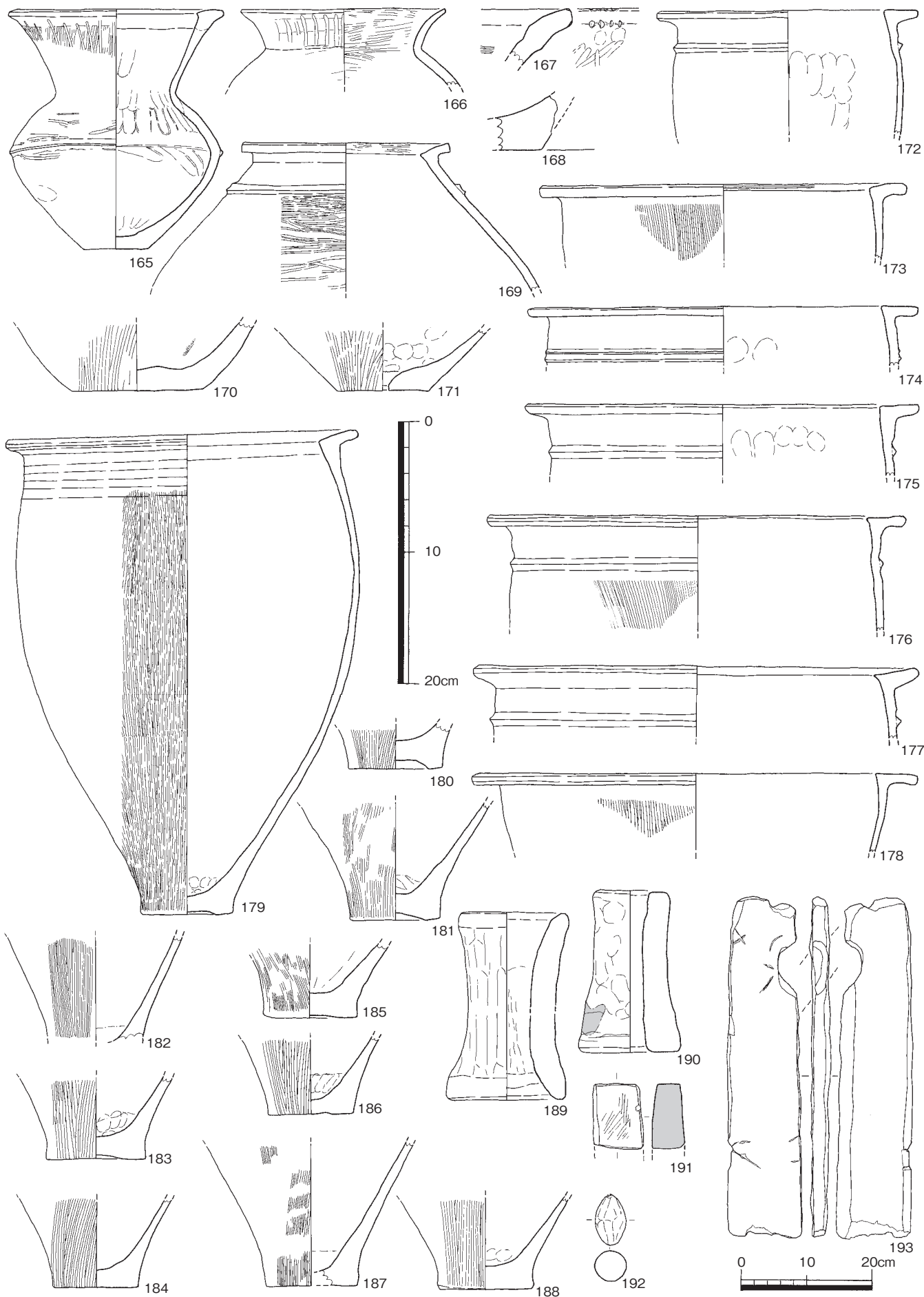


Fig. 25 X5Y3 SE-01 出土遺物 (1/4 · 1/8)



Fig. 26 X5Y4 遺構配置図 (1/80)

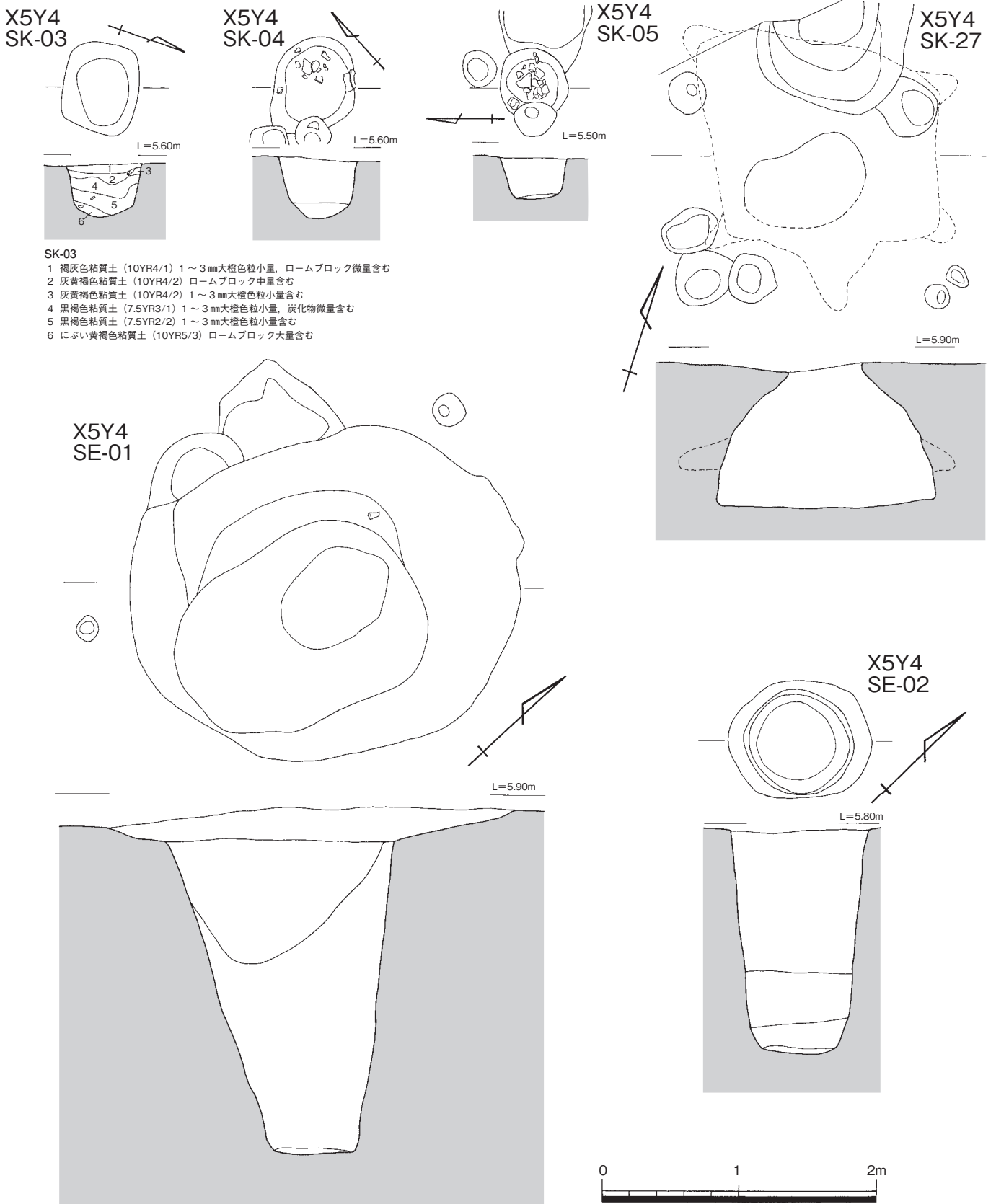


Fig. 27 X5Y4 遺構実測図1 (1/40)

遺存していた。砂岩製の砥石片 (197) が出土している。SK-03はSC-01の西側で検出された土坑である。平面は長軸65cm、短軸55cmの略長方形を呈しており、約40cm遺存していた。柱穴の可能性も考えられる。SK-04はSC-03の西側にて検出された土坑である。長軸80cm、短軸50cmの不定形

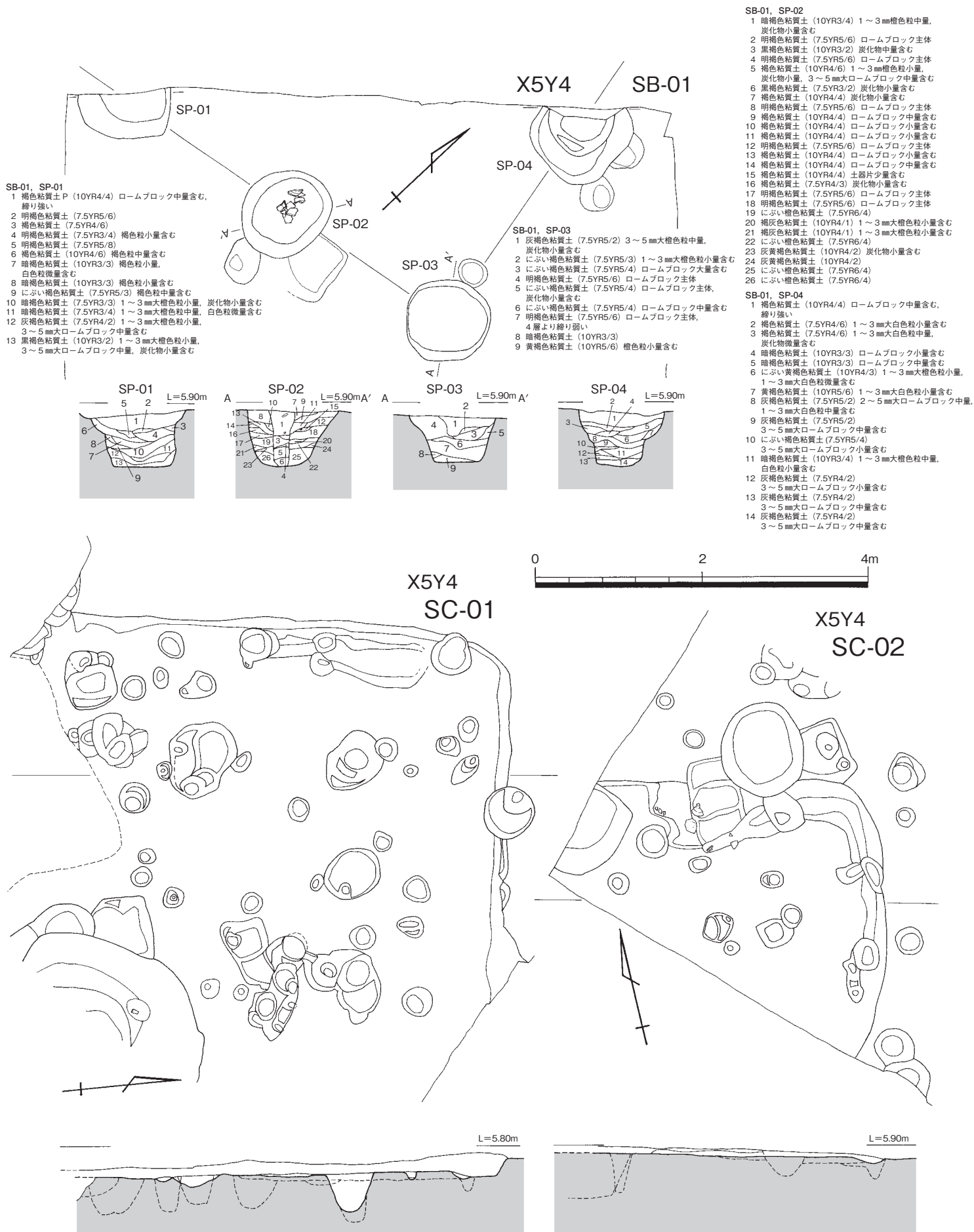


Fig. 28 X5Y4 遺構実測図 2 (1/60)

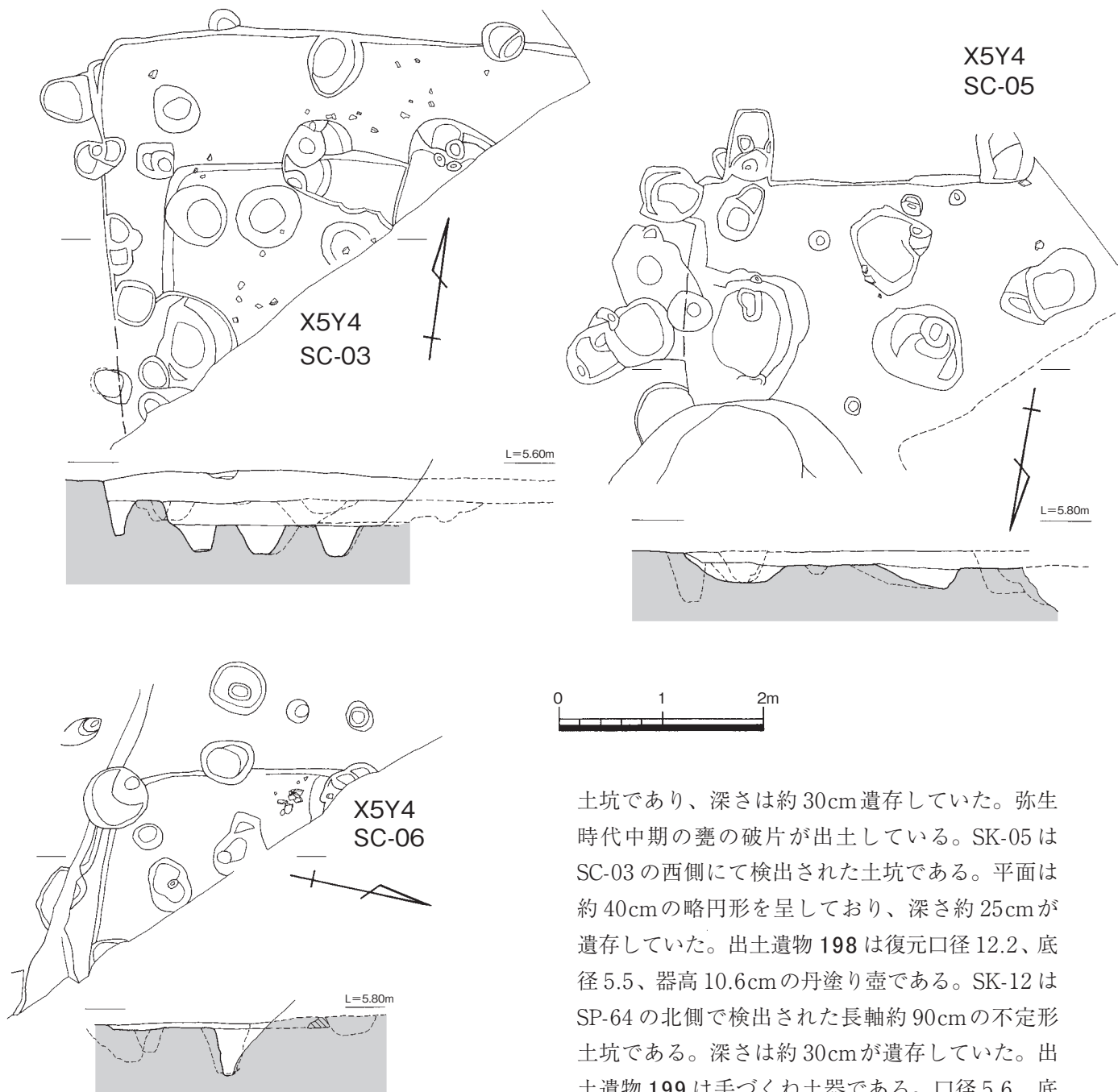


Fig. 29 X5Y4 遺構実測図 3 (1/60)

土坑であり、深さは約 30cm 遺存していた。弥生時代中期の甕の破片が出土している。SK-05 は SC-03 の西側にて検出された土坑である。平面は約 40cm の略円形を呈しており、深さ約 25cm が遺存していた。出土遺物 198 は復元口径 12.2、底径 5.5、器高 10.6cm の丹塗り壺である。SK-12 は SP-64 の北側で検出された長軸約 90cm の不定形土坑である。深さは約 30cm が遺存していた。出土遺物 199 は手づくね土器である。口径 5.6、底径 2.6、器高 3.2cm である。SK-13、14 は SC-03 の床面下から検出された不定形土坑である。深さ約 25cm が遺存しており、石包丁 (200) が出土している。厚さは 0.9cm である。SK-27 は調査区北端にて検出された貯蔵穴である。上面は多くの遺構と切り合っている。深さ約 100cm 遺存する袋状を呈しており、床面は約 150 × 160cm の略方形をしている。各角部には横方向の掘り込みがみられる。出土遺物 201 は上面から出土した甕底部である。下層から出土した遺物は少ないが、肩部に羽状文をもつ壺の破片が出土していることから、遺構の時代は弥生時代前期と考えられる。SK-28 は SC-05 内にて検出された土坑である。平面は径約 60cm の略円形を呈しており、深さ約 5cm である。出土遺物 202 は須恵器の杯身である。古墳時代後期の遺物である。SE-01 は調査区のほぼ中央部で検出された井戸である。平面は約 230 × 290cm の楕円形を呈しており、上部は緩やかな播鉢形をしており、下部は最大約 150cm の円形プランで、約 220cm 掘削している。出土遺物 203 はミニチュアの鉢である。復元口径 4.3、底径 4.4、器高 4.3cm である。204、205 は白磁皿、206 は青磁碗、207

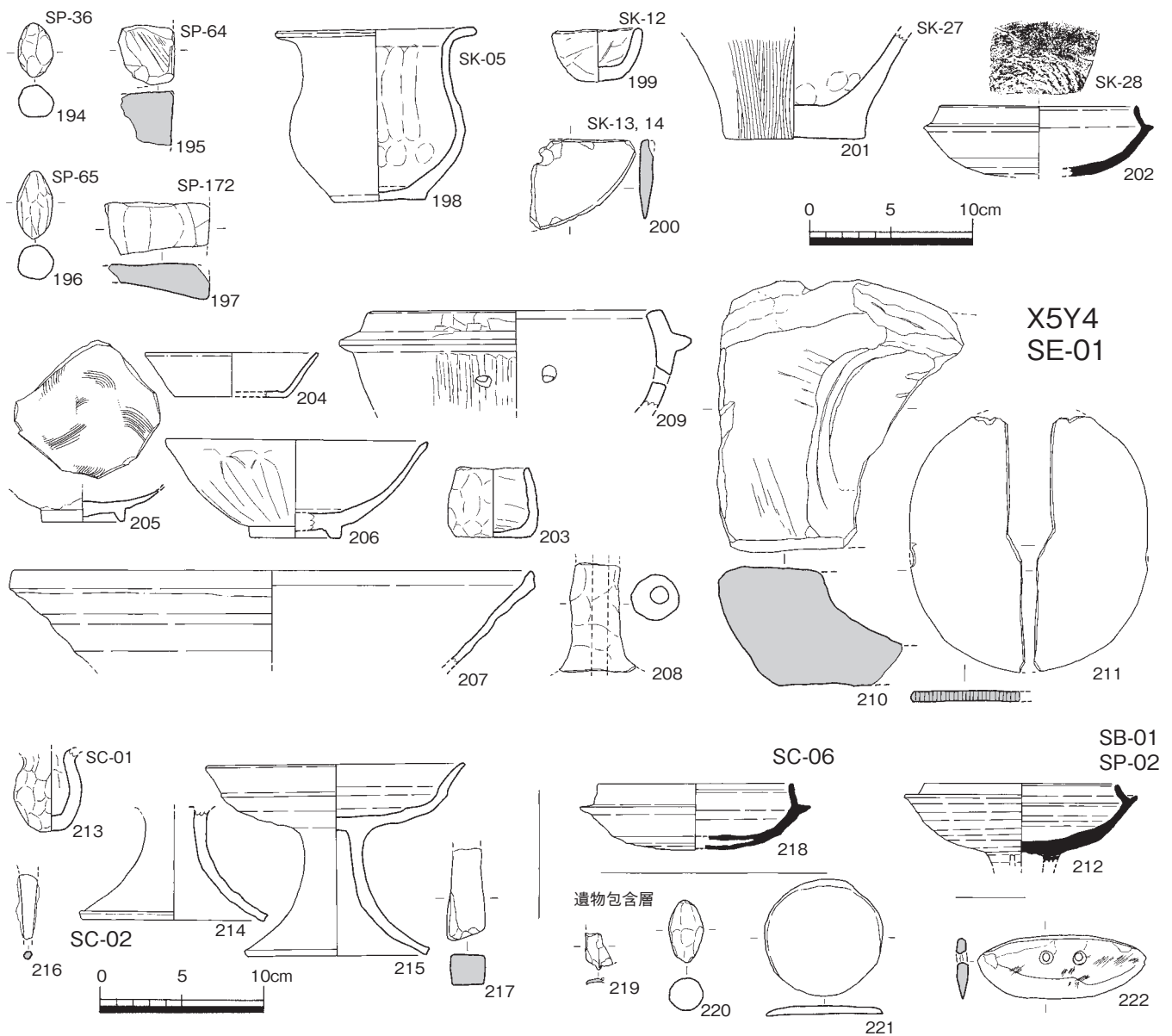


Fig. 30 X5Y4 出土遺物 (1/4)

は東播系鉢、208は器台脚部、209は滑石製石鍋、210は中央部が凹んだ砂岩製石製品の破片である。211は針葉樹の板材で曲物の底板である。遺構の時期は出土遺物から、13世紀代の井戸と考えられる。SE-02は調査区北端で検出された素掘り井戸である。平面は径約100cmの円形を呈しており、深さ160cmが遺存していた。上層からは須恵器の小片が出土している。SB-01は調査区北端にて検出された1間以上×2間以上の大型掘立柱建物である。建物の方位はW-12°-Nをとる。柱穴平面は100~120cmの略円形を呈しており、底面は標高5.15mでほぼ揃っている。柱間は230と270cmと考えられる。SP-02の底面から須恵器の高杯(212)が潰れた状態で出土している。蓋受け径は約13cmである。6世紀末から7世紀前半にかけての遺物であり、建物はそれ以降に建てられたものである。SC-01はSE-01の北側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。建物の掘方は角部を検出するに留まっているが、壁際には幅30~60cmの溝がめぐる。内側で検出されたSP-145、120を仮に4本柱の一对と仮定すると一辺5.4mの建物を復元することができる。床面は削平の為、時期の分かる遺物は出土していない。出土遺物213はミニチュアの壺である。SC-02は調査区北側、西よりで検出した建物である。確認できたのは一つの角部のみで、遺構は調査区外に広がる。幅30~50cmの

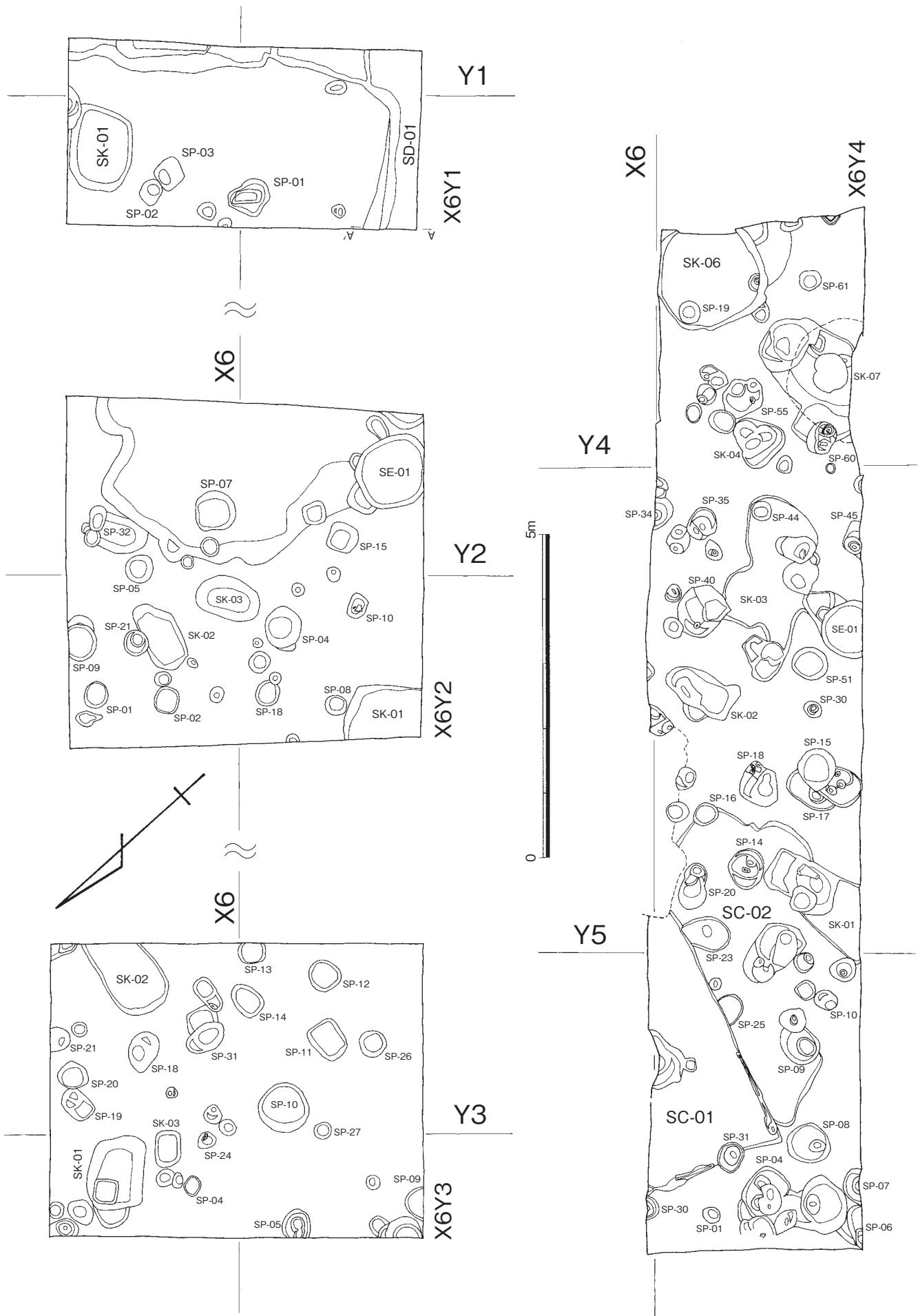


Fig. 31 X6 ライン遺構配置図 (1/80)

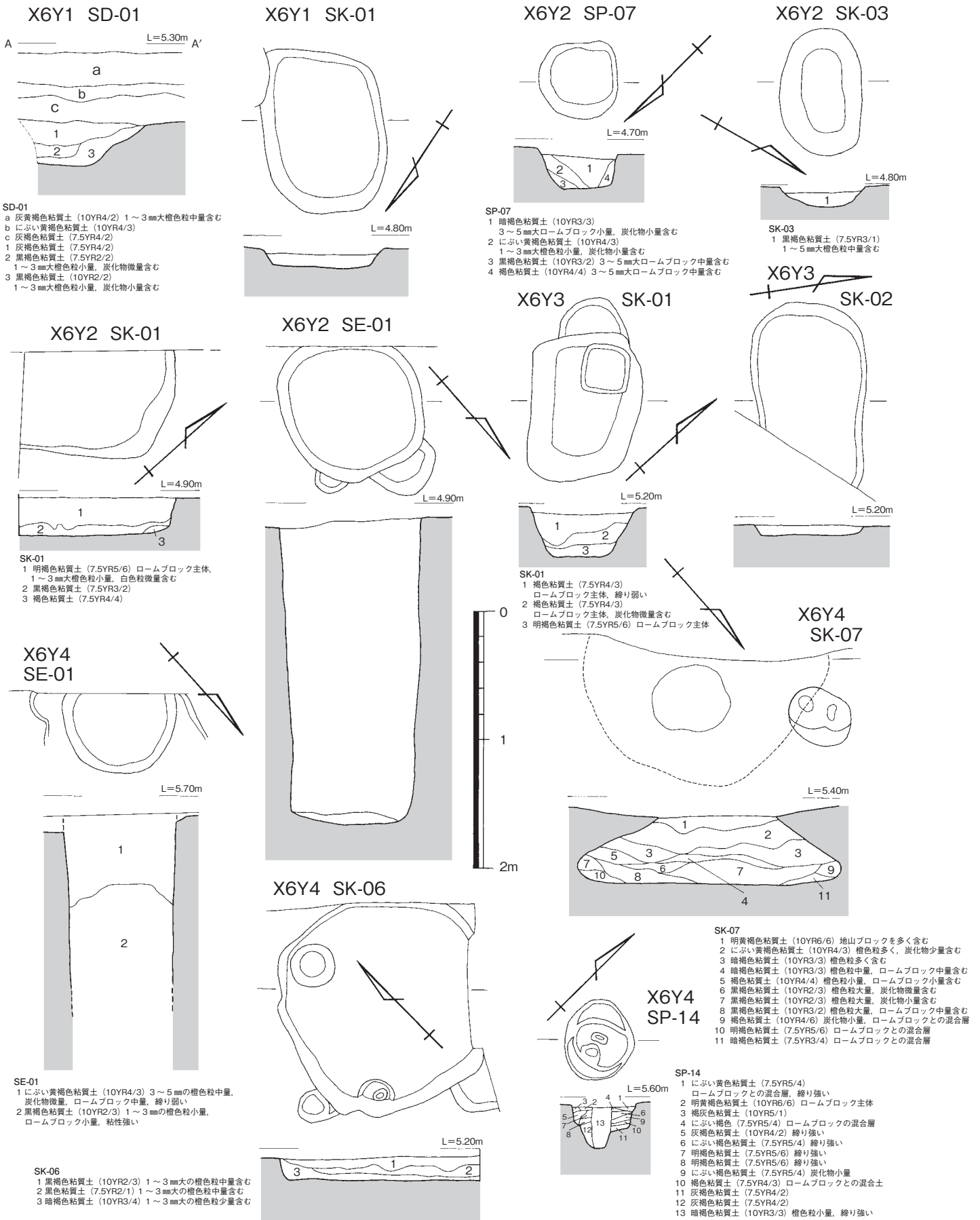


Fig. 32 X6 ライン遺構実測図 1 (1/40)

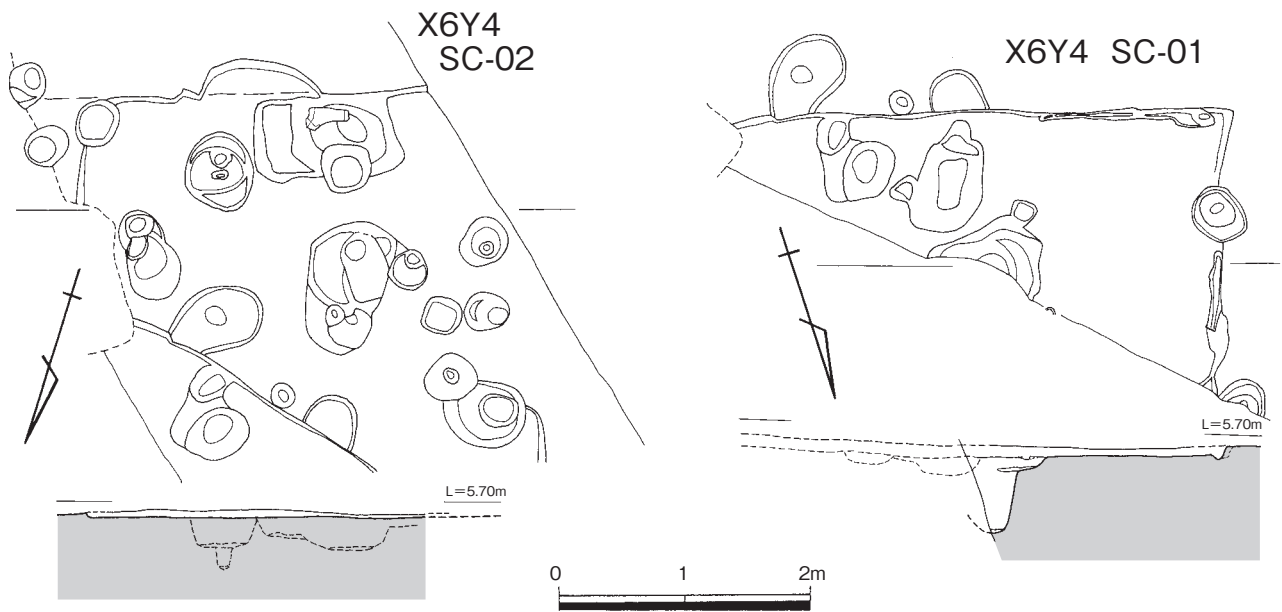


Fig. 33 X6 ライン遺構実測図 2 (1/60)

溝を建物際に掘削している。また、北側の壁には被熱により底面が赤色化した土坑が敷設されている。出土遺物 214, 215 は土師器の高杯である。215 の杯部の口径は 15.6cm である。216 は断面円形の鉄製品であり、217 は粘板岩系の砥石である。古墳時代以降の建物と考えられる。SC-03 は調査区南端にて検出された竪穴建物である。多くの遺構と切り合っており詳細は不明である。竪穴建物の角と考えられる部分を確認しており、更に内側にも段落ちがみられるがベッド状をなすものか別の建物かも不明である。床面上から遺物は出土していない。SC-05 は SE-01 の南側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。遺存が悪く部分的にしか確認できなかったが、仮に建物壁ならば SC-01, SC-03 と建物方位があっており、時代的に近いものと考えられる。SC-06 は SC-01 の北側で検出された建物である。調査区際には、被熱にて赤色化した土坑が一部みえており、床面上から出土遺物 218 が出土した。須恵器の杯身であり、蓋受け径 12.8、器高 4.1cm である。遺構の時期は出土遺物から 6 世紀末から 7 世紀にかけての建物と考えられる。出土遺物 219～222 は、調査区内遺構検出時に出土した。219 は青銅製ヤリガンナである。220 は投弾、221 は白磁皿の口縁を打ち欠き、径 7.2cm に加工した円盤状製品、222 は立岩産の石包丁で孔間は 2.1cm である。ガラス小玉 323, 325, 326, 327, 328, 329 と棗玉 324 が出土している。

X6Y1 (Fig. 31, 32, 34, PL. 11)

調査区の基盤層の標高は 4.7 m で、浅い谷の肩部にあたる立地から、遺構の密度は低かった。検出遺構はピット状遺構、土坑、溝である。

SD-01 は調査区内にて直角に屈曲するか、または分岐する。溝の方位は W-43° -N をとり、底面は緩やかな U 字形を呈する。埋土の発色から中世の溝と考えられる。SK-01 は調査区東側で検出された不定形土坑である。長軸 115、短軸 90cm の浅い土坑である。残存は約 10cm であったが遺物は出土しなかった。調査区内にて遺構検出時に、白磁碗 (223) の外側底部に墨書がある遺物が出土している。

X6Y2 (Fig. 31, 32, 34, 35, PL. 11, 19, 20)

調査区からはピット状遺構、土坑、井戸を検出した。

X6Y2 SE-01

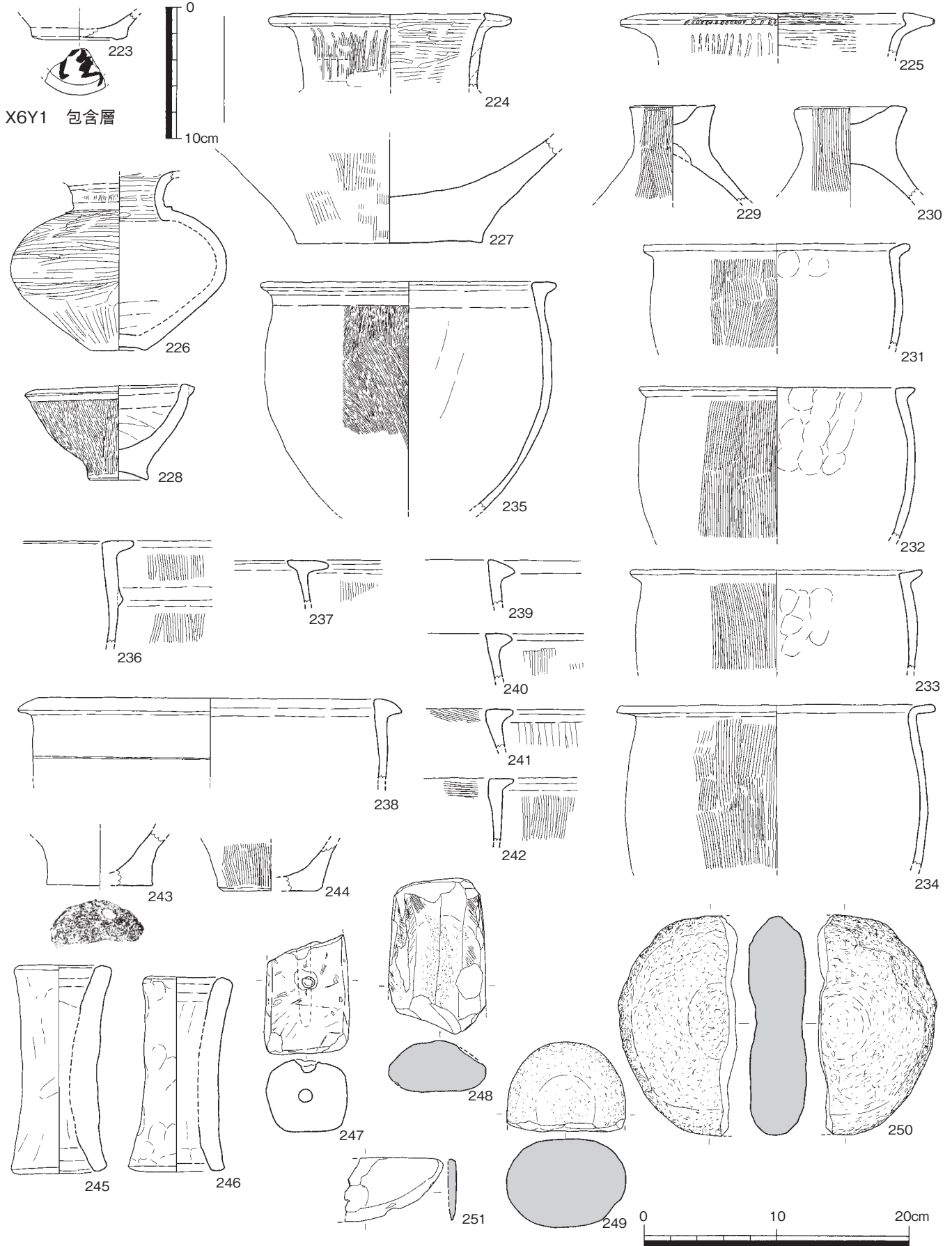


Fig. 34 X6 ライン出土遺物 1 (1/4)

X6Y2 SE-01

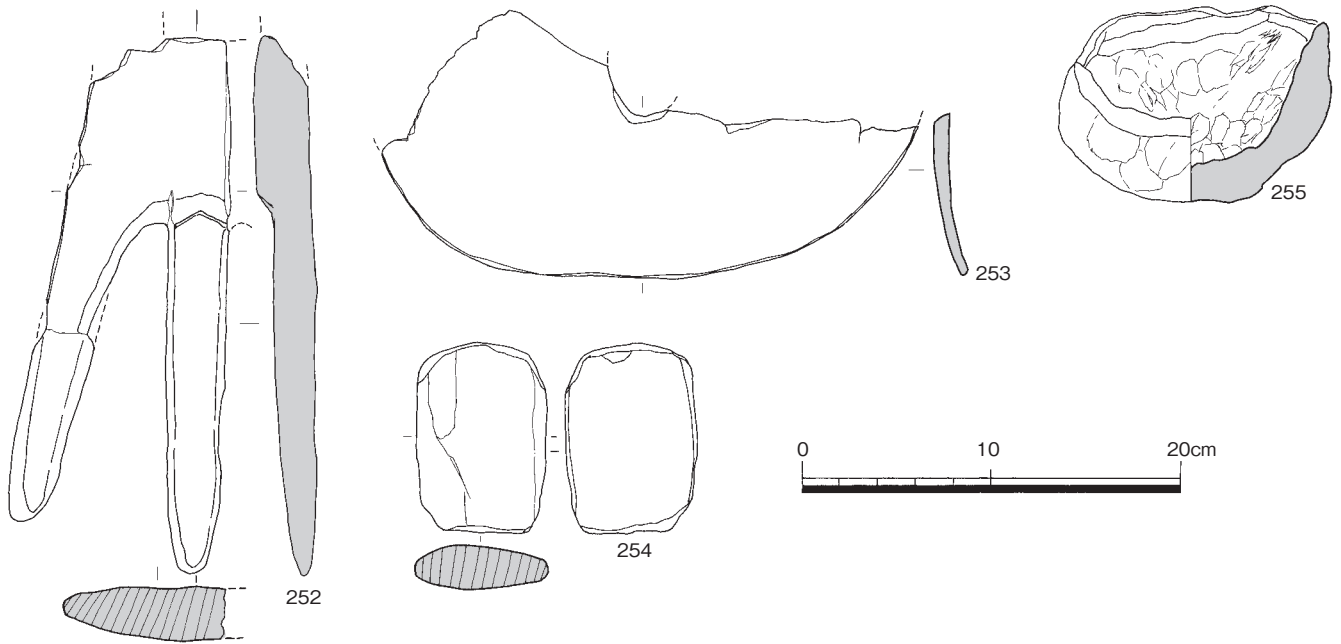


Fig. 35 X6 ライン出土遺物 2 (1/4)

SP-07 は調査区中央部やや東寄りにて検出されたピット状遺構である。平面は径約 60cm の円形を呈しており、深さ 30cm が遺存していた。時期の分かる遺物は出土していない。SK-01 は調査区西端にて検出した土坑である。平面の角も明瞭で、底面もほぼ平坦なことから規格的な掘削が感じられるが、全体像は不明である。時期の分かる遺物は出土していない。SK-03 は、調査区ほぼ中央部で検出された土坑である。平面は長軸 100、短軸 65cm の楕円形を呈し、深さは 15cm が遺存していた。時代が分かる遺物は出土していない。SE-01 は、調査区南端にて検出された素掘り井戸である。平面は、径約 100cm の略円形を呈しており、深さ約 300cm が遺存していた。井戸の壁は、ほぼ垂直に立っており、底面は径約 80cm の円形であった。出土遺物 224～227 は壺である。224 の口径は 18.3cm である。226 の頸部と胴部の境には外向きの断面三角形の突帯をめぐらせている。228 は小型鉢である。口径 12.7、底径 4.6、器高 7.1cm である。外面上部には煤が付着している。229, 230 は蓋形土器である。231～242 は甕の上部、口縁部である。復元口径は 20.0～29.2cm である。243, 244 は甕の底部片である。243 の外底部には穀物の圧痕がみられる。245, 246 は筒形の器台である。247 は中心部を棒状工具で刺突する。248 は玄武岩の大型蛤刃石斧片である。249 は叩き石で煤が付着している。250 は凹み石。251 は石包丁である。252～255 は木製品である。252 はカシ材の三又鋏である。253 は広葉樹製の鋏泥除けである。254 はカシ材柁目の部材で農具の再加工品と考えられる。255 は広葉樹のコブを利用した割り抜き容器である。井戸の埋没時期は出土遺物から、弥生時代中期前半と考えられる。

X6Y3 (Fig. 31, 32, 36, PL. 11)

調査区での基盤層標高は 5.15 m とやや高くなっているが、遺構の密度は高くない。検出遺構はピット状遺構、柱穴、土坑である。

SP-24 は調査区中央部やや西寄りで検出したピット状遺構である。平面は径 20cm の略円形を呈しており、残存する深さは約 15cm である。高杯 (256) が出土した。復元口径 15.8cm である。SK-01

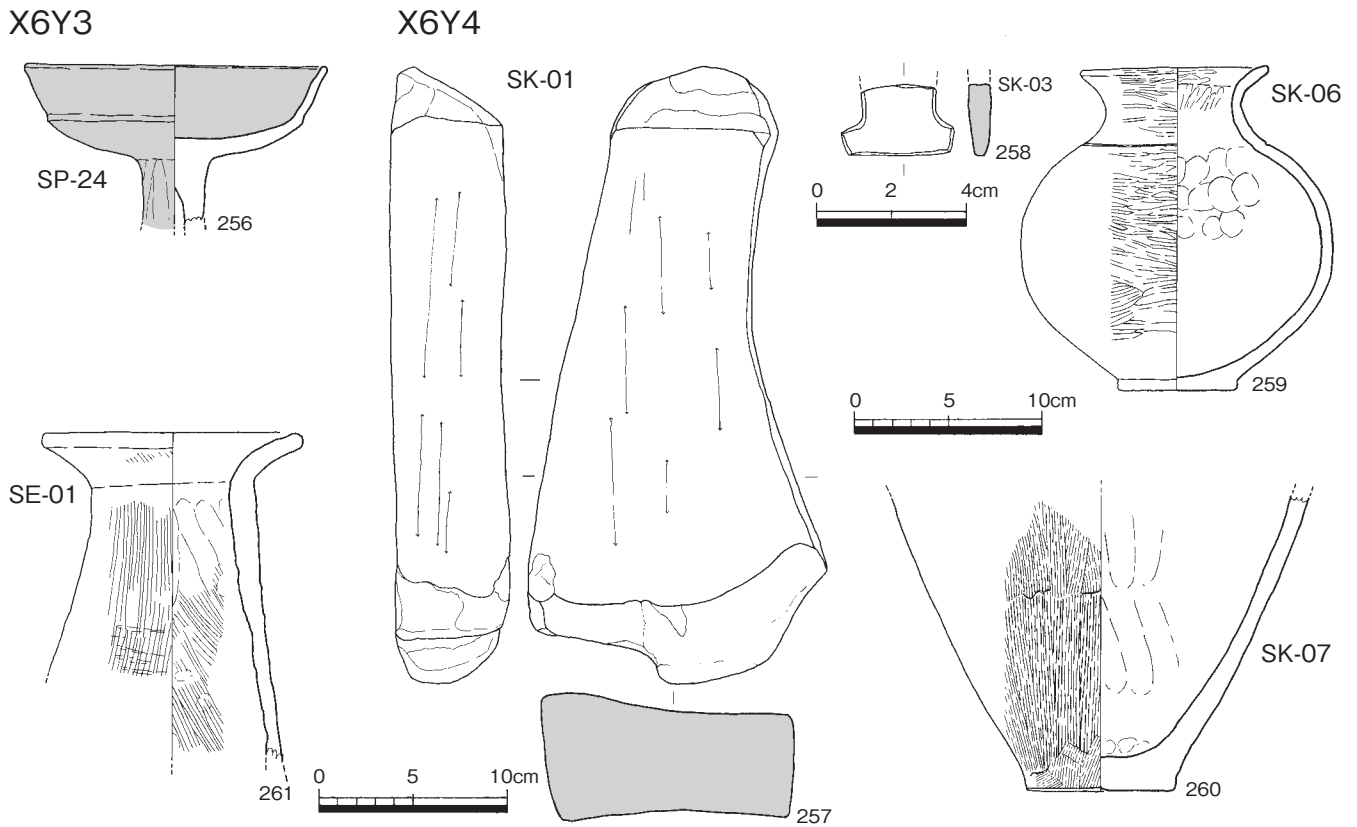


Fig. 36 X6ライン出土遺物 3 (1/2・1/4)

は調査区北側で検出した不定形の土坑である。長軸 120、短軸 85cm を測り、深さは 30cm 遺存しており、底面は平坦である。時期の分かる遺物は出土していない。SK-02 は調査区東端にて検出した土坑である。長軸 140cm 以上、短軸 90cm の長楕円の平面形をもち、深さは約 10cm で床面は平坦である。時期の分かる遺物は出土していない。

X6Y4 (Fig. 31, 32, 33, 36, 41, PL. 12, 20)

調査区内基盤層の標高は約 5.5 m と更に高くなっていることから、竪穴建物を中心とする多くの柱穴などの集落遺構を検出した。

SP-14 は SC-02 内にて検出された柱穴である。平面は径 55cm の略円形を呈し、深さは約 35cm が遺存する。土層断面の観察から径 15cm の柱材が使われていたことが判る。SK-01 も SC-02 内から検出された不定形土坑である。竪穴建物に付随する遺構とも考えられる。底面から砂岩製砥石 (257) が出土している。長さ 32.2cm、最大幅 15.9cm、最大厚 5.6cm である。SK-03 は調査区中央部やや南寄りにて検出した不定形の窪みである。出土遺物 258 は、石製品の茎部片である。器壁は丁寧に磨かれている。厚さは 0.6cm である。SK-06 は調査区南東端で検出された貯蔵穴である。上部構造は削平されており、床面上約 20cm が遺存する。床面の平面は径 150cm の略円形を呈している。出土遺物 259 は壺である。復元口径 9.7、底径 6.1、器高 17.1cm で、頸部と体部の境に沈線をめぐらせる。遺構の時期は弥生時代前期の後半頃と考えられる。SK-07 は SK-06 の西側に位置する貯蔵穴である。断面形は裾広がり袋状で、底面は径約 180cm の円形を呈している。出土遺物 260 は甕の底部である。遺構の詳細な時期は不明であるが、立地状況からも弥生時代前期の可能性が考えられる。SE-01 は中央部やや南寄りの調査区西壁際にて検出した素掘り井戸である。平面は径約 90cm の円形を呈してお

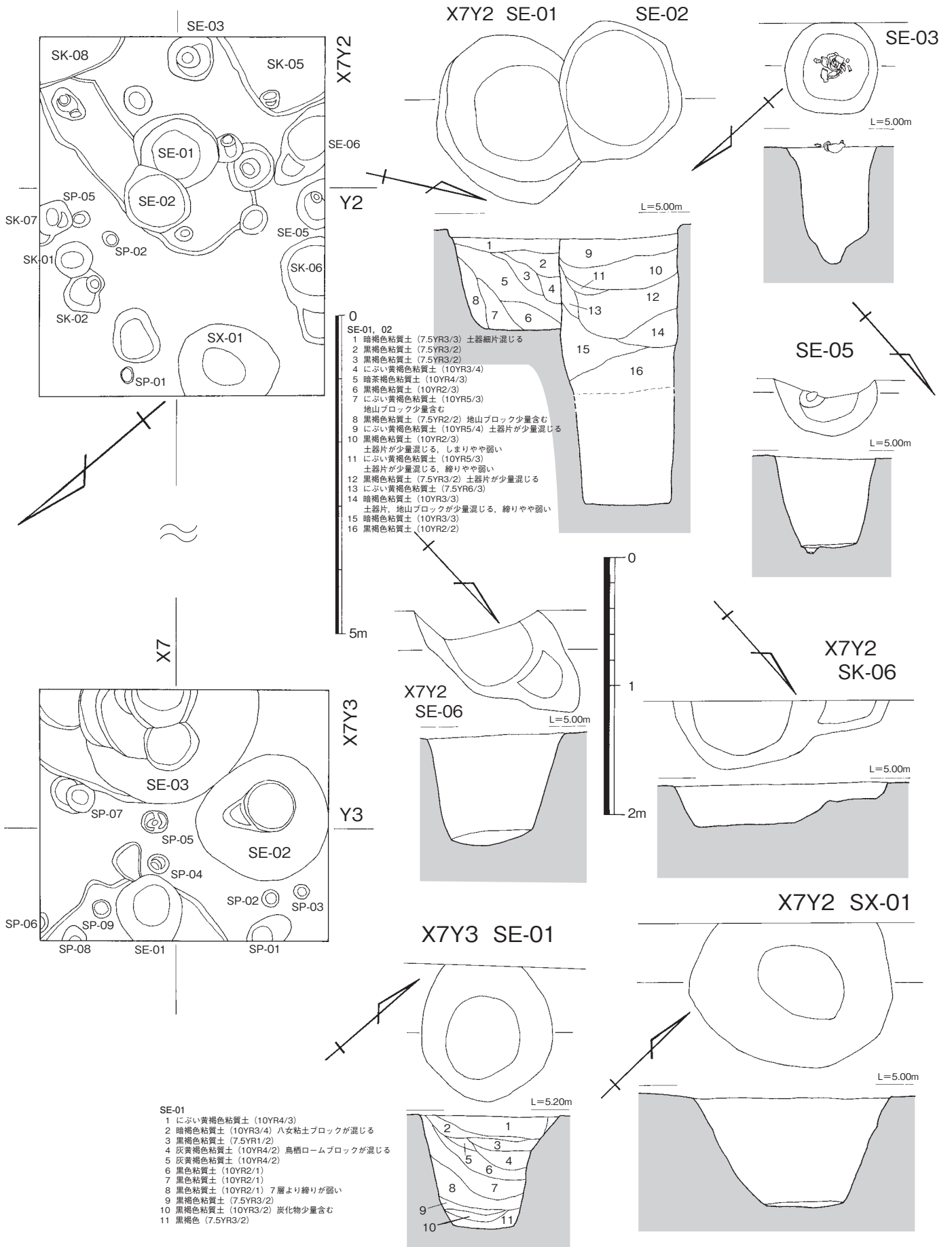


Fig. 37 X7ライン遺構配置図・遺構実測図 (1/80・1/40)

り、130cmほど掘削したが安全確保のため作業を中止した。出土遺物 **261** は弥生時代の器台である。SC-01 は調査区北側にて検出した竪穴建物である。建物の一角のみの確認で規模などは不明である。床面の残存は10cm未満と悪いが、床面は平坦であった。掘削時にガラス小玉 **330, 331, 332, 334** や赤褐色ガラス管玉 **333** が出土した。床面上からは、弥生時代終末期の壺の上部が出土している。SC-02 は調査区のやや北寄りにて検出された建物の可能性がある遺構である。遺存が不良でほとんど床面がみられなかった。SC-01 との切り合いも不明である。時期の分かる遺物は出土していない。調査区内の遺構検出作業時に滑石製白玉 **335, 336, 337** が出土した。

X7Y1 (PL. 12)

この狭小な調査区は、発掘調査着手時に掘削をおこなった。基盤層まで表土を剥いたが、顕著な遺構はみられなかった。遺構面が深く湧水もあり、安全な作業が確保できないことから写真撮影を行い埋め戻した。

X7Y2 (Fig. 37, 39, PL. 12, 13, 20)

調査区の基盤層標高は約4.9 mである。検出遺構ではピット状遺構、柱穴、土坑、そして井戸の数が多い。

SK-01 は調査区東側で検出した土坑である。平面は約55cmの略円形を呈し、深さは約35cmである。出土遺物 **262** は投弾である。長さ3.3、幅2.1cmである。SK-07 は調査区東壁端で検出された土坑である。平面は長軸50cmの不定形を呈しており、深さは約55cmが遺存していた。出土遺物 **263** は玄武岩製の大型蛤刃石斧片である。最大幅8.2、最大厚5.2cmである。SE-01、SE-02の素掘り井戸は調査区のはほぼ中央部にて検出された。SE-01の平面は径約120cmの略円形を呈しており、残存は約70cm遺存しており、SE-02に切られる。SE-02の平面は径約100cmの略円形を呈しており、残存は約210cm遺存していた。出土遺物 **264~266** は甕である。**265** と **266** は直接接合しないが口径37.0cm、底径10.4cmの同一個体の甕棺と考えられる。**267** は広葉樹の梯子である。残存長110cm、最大幅30cm、最大厚14cmである。**268** はカシ材柵目木取りの一木造りの鋤である。**269** はカシ材柵目木取りの三又鋤である。井戸の時期は出土遺物から弥生時代後期前半頃と考えられる。SE-03は調査区の南壁端にて検出された素掘り井戸である。平面は径約70cmの略円形を呈しており、深さは90cm遺存していた。井戸が埋没した上面から遺物が出土した。**270** は器高15.7cmの支脚である。**271** は壺である。口径9.6、底径6.3、器高8.7cmである。**272** は壺蓋で復元口径14.0cmである。**273** は丹塗り壺で復元口径12.5cmである。井戸祭祀に伴うものと考えられる。SE-05は調査区南西壁端から検出された井戸である。平面は径約70cmの略円形を呈すると考えられる。深さは約65cm遺存していた。SE-06はSE-05の南側にて検出された井戸である。平面形は不定形である。深さは約80cm遺存していた。SK-06も南西壁端で検出された不定形土坑である。深さは約30cm遺存しており、底面は平坦である。SX-01は北西壁端で検出された断面播鉢形を呈する土坑である。平面は径約150cmの略円形である。いずれからも小破片の土器が出土しているが、時期の特定までには至っていない。遺構検出作業時に遺物が出土した。**274** は須恵器の杯蓋で口径14.8cm。口唇部に段をもつ。**275** は土錘である。最大径1.9cmである。**276** は投弾である。長さ3.8、最大幅2.3cmである。

X7Y3 (Fig. 37, 38, 40, PL. 13)

調査区の基盤層標高は5.2 mである。ピット状遺構と井戸を検出した。

X7Y3
SE-02

X7Y3 SE-03

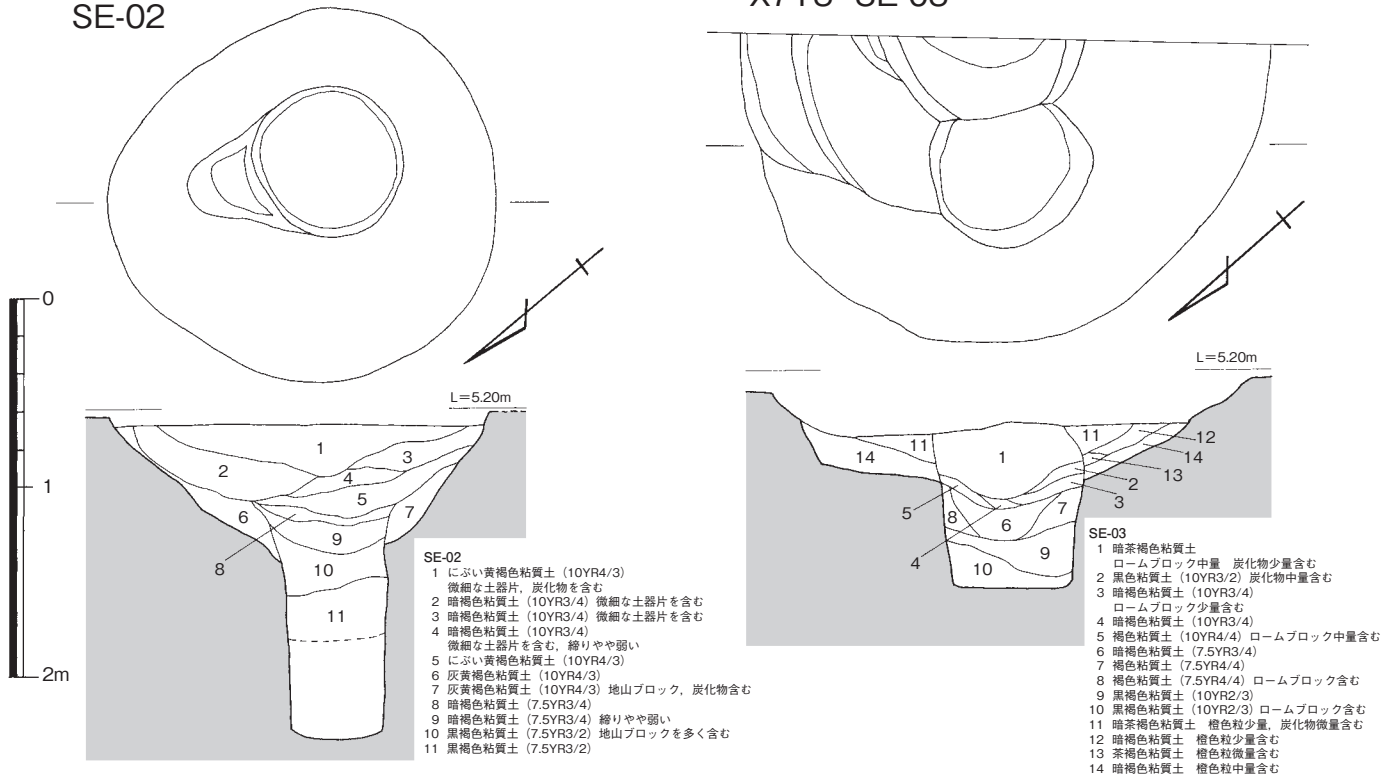


Fig. 38 X7 ライン遺構実測図 (1/40)

SE-01は調査区北西壁端にて検出された井戸である。平面は径約100cmの円形を呈しており、深さ90cmが遺存していた。井戸の上部が削平されている可能性もある。出土遺物277~281は土師器小皿である。口径8.5~9.7cm、底径6.4~8.2cm、器高1.0~1.4cmである。282は土師器丸底杯である。口径15.4、器高2.9cmである。283は瓦器椀である。口径16.8、底径6.8、器高5.1cmである。284, 285は滑石製石鍋である。285の底径は31.4cmである。井戸の埋没時期は、出土遺物から13世紀前半頃と考えられる。SE-02は調査区西側で検出された井戸である。上部の平面は径約200cmの円形を呈しており、挿鉢形をしている。下部の平面は径約70cmの円形を呈し、ほぼ真っ直ぐに100cm掘る。土層断面の観察では顕著な井側の存在は確認できなかった。出土遺物286は白磁皿で、口径10.0、底径4.8、器高2.6cmである。287は白磁椀で、口径17.0、底径5.8、器高7.2cmである。288は青白磁小壺である。口径5.0cmである。289は陶器鉢である。底径8.2cmである。290は精緻な石製品の破片である。291, 292は砥石である。291は両面、292は3面に使用痕がみられる。293は青銅製の取っ手である。井戸の埋没時期は、出土遺物から13世紀初頭頃と考えられる。SE-03は調査区の南東端にて検出された井戸である。上部の平面は径約260cmの円形を呈し、下部は径約70cmの円形に約60cm掘削している。土層断面の観察では、井筒状の構造物の痕跡がみられる。出土遺物294~297は土師器杯である。口径12.2~16.0、底径7.7~10.4、器高3.1~3.4cmである。298, 299は黒色土器椀で底径はそれぞれ7.3、8.1cmである。300は土師器椀である。口径12.8、底径7.7、器高5.9cmである。301, 302は白磁椀である。301は口径16.8、底径6.1、器高6.2cmである。302は玉縁の口縁で口径は15.7、底径6.7、器高6.3cmである。303は不

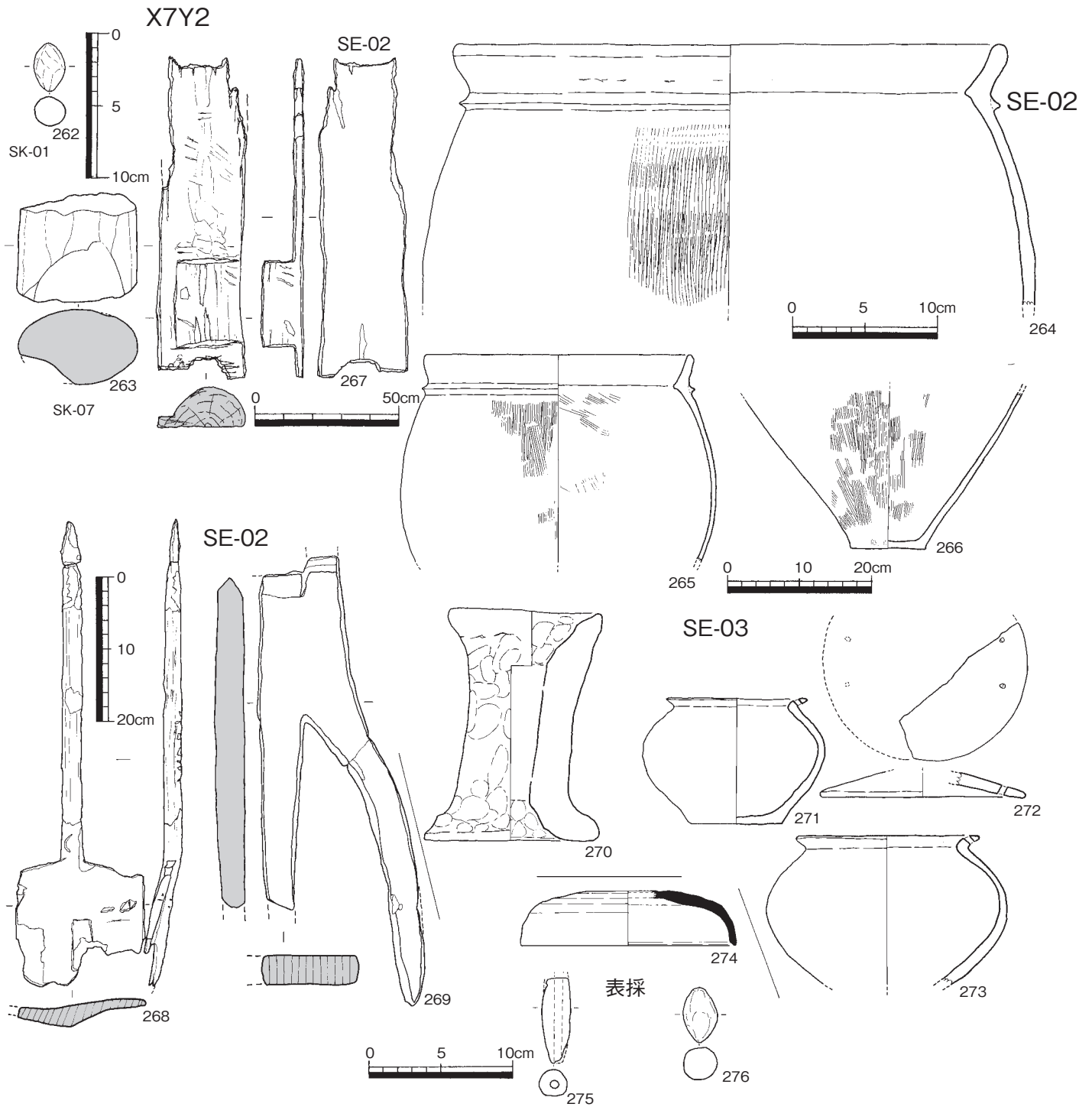


Fig. 39 X7 ライン出土遺物 1 (1/4・1/8・1/20)

明鉄製品で断面は円形である。井戸の埋没時期は13世紀前半頃が考えられる。調査区での遺構検出作業中に遺物が出土している。**304**は土師器小皿で口径9.6、底径6.9、器高1.4cmである。**305**は須恵器杯身である。蓋受け径は12.7cmで、外底面にヘラ記号がある。古墳時代後期の遺物である。

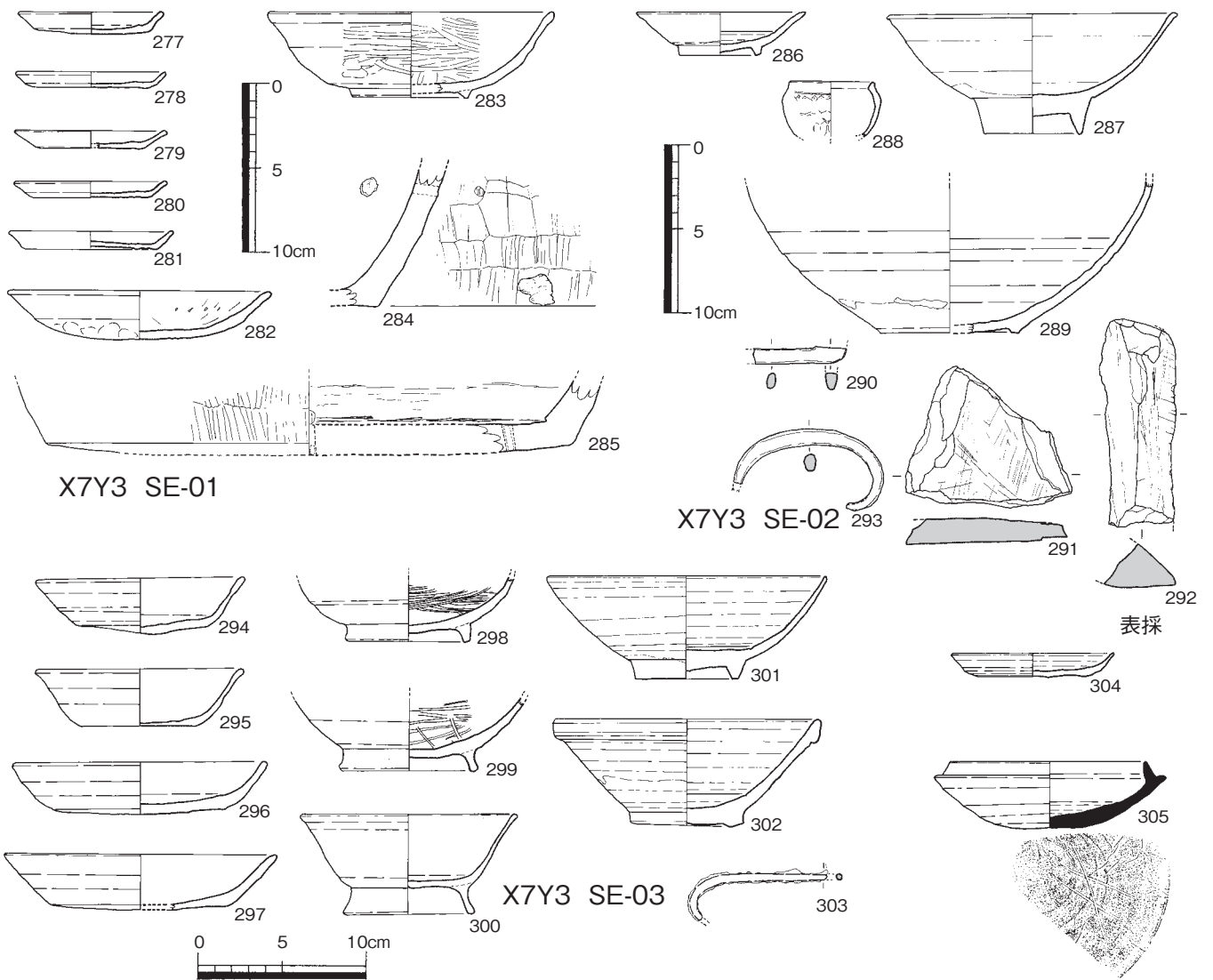


Fig. 40 X7 ライン出土遺物 2 (1/4)

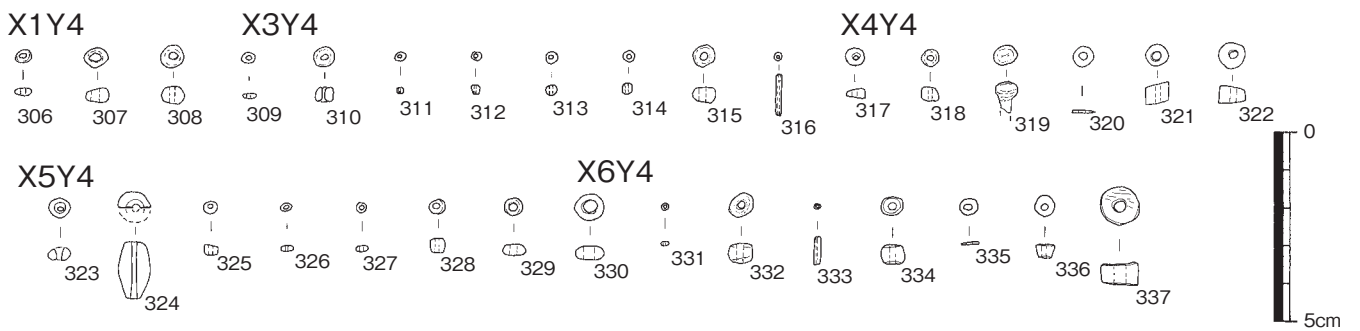


Fig. 41 出土玉類実測図 (1/2)

山王遺跡第 10 次調査出土ガラス玉観察表

遺物番号	出土地点	観察所見	色	形状	重量 (g)	分析所見
306	X1Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡は散在しているが、一部は孔の長軸に平行して引伸ばされた形状を呈することから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.034	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
307	X1Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	側面に歪みが見られ、厚みも均一。微細な粒子が凝集した様子が見られる。気泡や微細な粒子は孔の長軸と平行に並ぶように見えており、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.155	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
308	X1Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	表面が凹凸しているものの厚みも均一で平面形状も整っている。微細な粒子が凝集した様子が見られる。気泡や微細な粒子は孔の長軸に平行に並ぶように見えており、引伸ばしによる成形と考えられる。均整性も否定できない。	0.201	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
309	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡は散在しているが、一部は孔の長軸に平行して引伸ばされた形状を呈することから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.021	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
310	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	孔と側面に歪みが見られ、厚みも均一。微細な粒子が凝集した様子が見られる。気泡や微細な粒子は孔の長軸と平行に並ぶように見えており、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.139	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
311	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡は散在しているが、一部は孔の長軸に平行して引伸ばされた形状を呈することから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.009	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
312	X3Y4 SC-01	小玉	青緑色	微細な気泡が多量に見られる。多くは独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見えていることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.021	Si, O, K, Mn, Fe, ΔCa, Ti, × Al, Co Mnも顕著に見られる。
313	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡はそれぞれ独立し散在しているが、孔の長軸に平行して引伸ばされたものや、表面には筋状の流線が観察されることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.031	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
314	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡はそれぞれ独立し散在しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見えている。表面には筋状の流線が観察されることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.034	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
315	X3Y4 SC-01	小玉	淡青色	微細な粒子が凝集し、気泡は散在する様子が見られる。孔内部に黒褐色の固形物が堆積している。孔には長軸方向の扁平な気泡が観察される。気泡や微細な粒子の並びに規則性は見られず、引伸ばし、もしくは均整性も否定できない。	0.116	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
316	X3Y4 SC-01	管玉	青緑色	側面には孔の長軸と並行する無数の筋が観察される。小口面は折り返したような凹凸が見られる。引伸ばしによる成形と見られる。	0.065	Si, O, K, Mn, Fe, ΔCa, Ti, × Al, Co Mnも顕著に見られる。
318	X4Y4 SC-02	小玉	淡青色	全体に丸みを帯びている。気泡は比較的多く存在する。多くは独立しているが、孔の長軸と平行して並ぶように見えている。表面には筋状の流線が観察されることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.104	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
319	X4Y4 SC-02 周辺	不定形	青緑色	部分的に丸みを帯びた不定形が顕著。青緑と白緑色がマーブル状を呈している。表面に近い部分に微細な気泡が見られるが、大半は不透明となっている。	0.492	Si, Pb, O, Ba, ΔAl, K, Ca, Fe, Cu 強いPbのピークとBaが見られることから鉛バリウムガラスと考えられる。着色にはFe, Cuの関与が推定される。
323	X5Y4 SK-23	小玉	青緑色	全体に丸みを帯びるが側面は流線状を呈する。孔は側面で大気泡が多数存在する。気泡は非常に少ないが、孔の外周に平行して並ぶものが見られる。側面に段差が見られることから、巻き付けによる成形が推定される。表面には風化によるものか、微細な筋が無数に入る。	0.172	Si, O, Ca, Mn, Fe, ΔAl, K, Ti, × Co Naは見られず、Mgは認められない。低アルカライタイプで、着色にはCuが関与しているものと考えられる。Mnも顕著に見られる。
324	X5Y4 SK-27	霽玉	乳白色 (風化)	表面は風化により白色の粉が吹いているが、風化層をクリーニングすると乳白色半透明の素地が見える。	1.012	Si, Pb, O, Ba, ΔAl, Ca, Fe 強いPbのピークとBaが見られることから鉛バリウムガラスと考えられる。乳白色に見えるのは風化によるためか？
325	X5Y4 SP-185	小玉	淡青色	透明度が低い。気泡は比較的多く、表層近くには存在するものも散在して孔によって並ぶものが見られる。側面は規則性は低く、表面には筋状の流線が観察されることから、引伸ばしによる成形と推定される。	0.056	Si, O, Al, K, Ca, Fe, Cu, ΔNa, Ti, Pb Naの規則性もみよ、CaがKを上回っていることから、ソーダ石灰ガラスと見られる。Alのピークは相対的に高く、高アルカライタイプで、着色にはCuが関与しているものと考えられる。
326	X5Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	比較的透明度は高いが気泡も多い。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶ部分も見られることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.027	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
327	X5Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	透明度が高く全体に丸みを帯びている。気泡は大小多数が存在する。一部は孔の長軸に並ぶ様子が観察されることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.017	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
328	X5Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	微細な気泡が多量に見られる。多くは独立しており、明確な規則性は認められない。引伸ばし、もしくは均整性作りの可能性も考えられる。	0.091	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
329	X5Y4 遺構検出時	小玉	淡青色	整ったドーナツ状の外観を呈する。気泡は大小多数存在し、存在物とともに孔の長軸と平行に並ぶ状況が観察されることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.088	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Pb Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCuが関与しているものと考えられる。
330	X6Y4 SC-01	小玉	白色 (風化)	風化により白色に着色するが、わずかに白緑色の微細な粒子が多数混在している。気泡は観察されないが、存在物や画像が成形技法を示す痕跡は観察されない。	0.428	Si, Pb, ΔAl, Ca, Fe, Cu 強いPbのピークが見られ、Baは抽出されないことから鉛ガラスと考えられる。着色にはFe, Cuの関与が推定される。
331	X6Y4 SC-01 周辺	小玉	黄緑色	不透明な黄緑色のガラスに白緑色の微細な粒子が多数混在している。気泡は観察されないが、存在物や画像が孔の長軸に平行している状態で見られることから、引伸ばしによる成形と考えられる。	0.007	Si, O, K, Fe, Cu, ΔAl, Ca, Ti, Mn Kが明瞭に抽出されていることから、カリガラスと見られる。着色にはCu, Pbが関与しているものと考えられる。
332	X6Y4 SC-01 周辺	小玉	青緑色	大小の気泡が多量存在し、特に微細な気泡は孔の長軸方向に平行して並ぶ様子が観察される。引伸ばしによる成形と見られる。	0.195	Si, O, K, Mn, Fe, ΔCa, Ti, × Al, Co Mnも顕著に見られる。
333	X6Y4 SC-01 周辺	管玉	赤褐色	側面には孔の長軸と並行する無数の筋が観察される。小口面は折り返したような凹凸が見られる。引伸ばしによる成形と見られる。	0.05	KとCaは相対的に低く、Naの微細なピークが見られることから、ソーダ石灰ガラスと見られる。Alのピークは相対的に低く、着色にはCuが関与しているものと考えられる。
334	X6Y4 遺構検出時	小玉	青緑色	大小の気泡が存在し、特に微細な気泡は孔の長軸方向に平行して並ぶ様子が観察される。また同じく孔の長軸に平行して黒色の存在物が観察される。引伸ばしによる成形と見られる。	0.25	Si, O, K, Mn, Fe, ΔCa, Ti, × Al, Co Mnも顕著に見られる。

○特に強いピーク
○明瞭に存在が確認できるピーク
×微細なピーク (K, a, [L, a]) 線のピークのみでKβ [Lβ] 線ピークが見えない
×極めて弱く存在が推定されるピーク

3 まとめ

今回の第10次調査では、弥生時代から中世に至る多くの遺構と遺物を発見した。最も古い遺構は弥生時代前期後半期の貯蔵穴である。第4次調査でも貯蔵穴がみつかり、北西側120mに位置する第6次調査では当該期の木棺、甕棺など埋葬施設が発見されている。また、浅い谷を挟んだ南東側100mの第9次調査でも甕棺と貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴は住居と共に生活域を構成することから、掘削深度の浅い住居は削平されて残存しないだけで、本来は墓域や集落が広範囲に営まれていたと考えられる。貯蔵穴の床面の形状には、略方形と略円形を呈する形状の違いがみられる。その差異が時代的なものか、用途の違いなのかについては出土遺物も少なく現時点では不明である。

弥生時代中期の初頭から前半頃の時期には、小判形を呈する竪穴建物、井戸や土坑がみられる。第6次調査でも長軸3.7m×短軸2.2mの平面形が小判形を呈し、支柱穴を持たない竪穴建物が検出されている。検出された場所は浅い谷への落ち際であるが、本来は広範囲に分布していたものが、高所部分は後世の流れ出しや削平等により、滅失してしまったと考えられる。素掘りの井戸は、周辺遺跡を含めて最古級のものである。このことから、素掘り井戸の掘削は丘陵の中位から始まり、後期以降には丘陵全体に普遍的に分布していく過程が想定される。

弥生時代の後期から古墳時代初頭にかけての時代が、調査地周辺では遺構と遺物量が最も増える時代である。竪穴建物、土坑、井戸などが密に切り合っており、集落的景観が恒久的に広がっていたことは明らかである。奴国の中心地とされている比恵、那珂遺跡群と様相を同じくする。遺跡名は異なるが、当時の集落のあり方としての区別はみられない。特筆されるもののひとつに、赤褐色に発色するガラス製品の出土が挙げられる。X6Y4区の弥生時代終末期の竪穴建物SC-01からガラス小玉とともに出土したものである。所謂「インド・パシフィックビーズ」または「ムティサラ」と呼ばれるガラスの管玉である。このガラスの生産は南インドで開始され、後に東南アジアに広がったと考えられている。今回出土したガラスが竪穴建物に伴うかどうかは不明であるが、全国で一般的に出土するものは小玉であって、管玉状のものは弥生時代後期から終末期の北部九州に集中するようである。福岡市内では南八幡遺跡第5次、今宿五郎江遺跡第4次、井尻B遺跡第32次調査地点から出土している。古墳時代初頭においても、土坑(井戸)出土の祭祀土器資料が示すように、当該地は、中国の史料で「魏志倭人伝」と略称される歴史書に記述されている奴国の中心地の一面を担っていたと思われる。

古墳時代では、後期の大型掘立柱建物が、方位を揃えて建てられていることが明らかとなった。地形的には、北側に向けて高くなっていったと考えられることから、大型建物は規則的な配置をもって複数棟建てられた可能性を有している。西側に隣接する比恵遺跡群では、6世紀後半から7世紀後半にかけて柵で囲まれた倉庫群や「口」の字形の配置を呈する建物が確認されており、今調査の建物群もこれらと関係をもつ施設であった可能性が考えられる。

奈良時代には、大宰府水城の東門と博多を繋ぐ官道が近くを貫く。そのことと関係するのか、古代末から中世にかけては、浅い谷は埋没し平坦化した調査地周辺には、直線的に伸びる区画溝や井戸などがつくられ、屋敷地としての景観が広がっている。

近年では、この丘陵を弥生時代の「都市」と評価できるのではないかという議論もされている。つまり、この地の発掘成果は、福岡の地域史のみならず日本史の復元に寄与できる重要なものなのである。
<参考文献>

大賀克彦 2001「インドの赤い風」『ガラスのささやき～古代出雲のガラスを中心に』2001年度企画展「古代の技術を考えるⅡ」島根県立八雲立つ風土記の丘

肥塚隆保、大賀克彦、比佐陽一郎、高妻洋成 2002「弥生・古墳時代のMutisalahに関する考古科学研究」『日本文化財科学会第19回大会』日本文化財科学会第19回大会実行委員会



1) 調査前風景 (西から)



2) 調査区設定状況 (南東から)



3) X1Y1 完掘状況 (南西から)



4) X1Y1 完掘状況 (南東から)



5) X1Y1 SD-01 堆積状況 (北東から)



1) X1Y2 完掘状況 (北東から)



2) X1Y2 完掘状況 (南東から)



3) X1Y3 完掘状況 (北東から)



4) X1Y3 完掘状況 (南東から)



5) X1Y4 完掘状況 (北西から)



1) X1Y4 SE-01 完掘状況 (北東から)



2) X1Y4 SE-02 完掘状況 (北東から)



3) X1Y4 SK-07 検出状況 (南西から)



4) X1Y4 SK-07 完掘状況 (北東から)



5) X1ライン完掘状況 (南東から)



6) X1ライン調査風景 (北西から)



1) X2Y1 完掘状況 (南東から)



2) X2Y1 SP-09 土層状況 (西から)



3) X2Y2 完掘状況 (南西から)



4) X2Y3 完掘状況 (南西から)



5) X2Y3 完掘状況 (南東から)



6) X2Y3 SP-03 検出状況 (北東から)



7) X2Y4 SK-05 完掘状況 (南から)



8) X2Y4 SC-01 完掘状況 (北から)



1) X 2 Y 4 完掘状況 (南西から)



2) X 3 Y 1 完掘状況 (南東から)



3) X 3 Y 2 完掘状況 (南東から)



4) X 3 Y 2 南西壁土層状況 (北東から)



5) X 3 Y 2 北西壁土層状況 (南東から)



1) X3Y3 完掘状況 (南西から)



2) X3Y3 SK-03 (西から)



3) X3Y3 SE-01 完掘状況 (南から)



4) X3Y4 完掘状況 (南東から)



5) X3Y4 北側完掘状況 (南西から)



6) X3Y4 南側完掘状況 (南西から)



7) X3Y4 SP-101 検出状況 (南西から)



8) X3Y4 SK-03 堆積状況 (北西から)



1) X4Y1 完掘状況 (南西から)



2) X4Y2 完掘状況 (南西から)



3) X4Y2 SK-01 土層状況 (南西から)



4) X4Y2 SK-01 完掘状況 (北東から)



5) X4Y3 完掘状況 (南西から)



6) X4Y3 SE-01 完掘状況 (北西から)



7) X4Y3 SE-02 完掘状況 (東から)



8) 調査区設定風景 (南東から)



1) X4Y4 完掘状況 (南東から)



2) X4Y4 SK-12 完掘状況 (南西から)



3) X4Y4 SE-02 完掘状況 (南から)



4) X4Y4 南側完掘状況 (南西から)



5) X4Y4 SB-01 完掘状況 (東から)



1) X5Y1 完掘状況 (南西から)



2) X5Y1 北東壁土層状況 (南西から)



3) X5Y2 完掘状況 (南西から)



4) X5Y2 SK-02 土層状況 (南から)



5) X5Y3 完掘状況 (南西から)



6) X5Y3 SD-01 完掘状況 (北東から)



7) X5Y3 SE-02 完掘状況 (南東から)



8) X5Y3 SC-01 完掘状況 (北西から)



1) X5Y4 完掘状況 (南西から)



2) X5Y4 完掘状況 (北西から)



3) X5Y4 SK-27 完掘状況 (東から)



4) X5Y5 SE-01 完掘状況 (南東から)



5) X5Y4 SC-01 完掘状況 (南西から)



1) X5Y4 SC-02 完掘状況 (南から)



2) X5Y4 SB-01 完掘状況 (北から)



3) X6Y1 完掘状況 (南西から)



4) X6Y1 SD-01 土層状況 (南東から)



5) X6Y2 完掘状況 (南西から)



6) X6Y2 SE-01 完掘状況 (北東から)



7) X6Y3 完掘状況 (南東から)



8) X6Y3 完掘状況 (南西から)



1) X6Y4 完掘状況 (北西から)



2) X6Y4 SC-01 完掘状況 (南から)



3) X6Y4 SK-06 完掘状況 (南西から)



4) X6Y4 SK-07 完掘状況 (北東から)



5) X6Y4 SE-01 完掘状況 (北東から)



6) X7Y1 掘削状況 (南西から)



7) X7Y2 掘削状況 (南東から)



1) X7Y2 SE-01, 02 完掘状況 (東から)



2) X7Y2 SE-03 検出状況 (北西から)



3) X7Y3 完掘状況 (南西から)



4) X7Y3 SE-01 完掘状況 (南東から)



5) X7Y3 SE-03 完掘状況 (北西から)

出土遺物 1



22

1) X1Y4 SE-01



23

2) X1Y4 SE-01



24

3) X1Y4 SE-02



25

4) X1Y4 SE-02



26

5) X1Y4 SE-02



27

6) X1Y4 SE-02



28

7) X1Y4 SE-02



32

8) X1Y4 SK-07

出土遺物 2



33

1) X1Y4 SK-07



34

2) X1Y4 SK-07



35

3) X1Y4 SK-07



36

4) X1Y4 SK-07



37

5) X1Y4 SK-07



39

6) X1Y4 SK-07



43

7) X1Y4 SK-07



45

8) X1Y4 SK-07

出土遺物 3



47

1) X1Y4 SK-07



48

2) X1Y4 SK-07



59

3) X2Y3 SP-03



63

4) X2Y4 SK-01



74

5) X2Y4 SC-01



79

6) X3Y3 SE-01



81

7) X3Y3 SE-01



82

8) X3Y3 SE-01

出土遺物 4



83

1) X3Y3 SE-01



85

2) X3Y3 SE-01



86

3) X3Y3 SE-01



88

4) X3Y4 SP-101



97

5) X3Y4 SE-02



98

6) X4Y2 SK-01



100

7) X4Y2 SK-01



104

8) X4Y3 SE-01

出土遺物 5



106

1) X4Y3 SE-03



125

2) X4Y4 SE-01



126

3) X4Y4 SE-01



127

4) X4Y4 SE-03



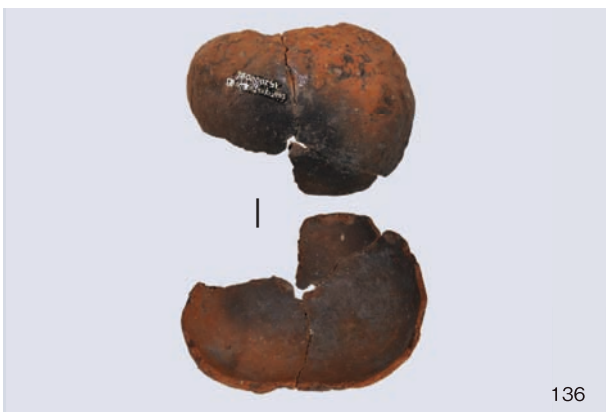
134

5) X4Y4 SC-04



135

6) X4Y4 SC-04



136

7) X4Y4 SC-04



137

8) X4Y4 SC-04 上面

出土遺物 6



165

1) X5Y3 SE-01



179

2) X5Y3 SE-01



219

3) X5Y4 遺物包含層



226

4) X6Y2 SE-01



228

5) X6Y2 SE-01



245

246

6) X6Y2 SE-01



247

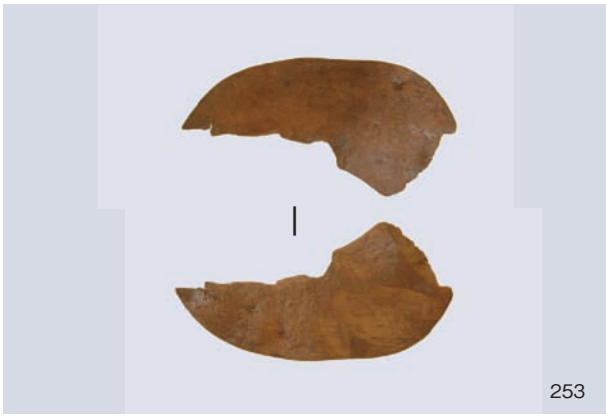
7) X6Y2 SE-01



252

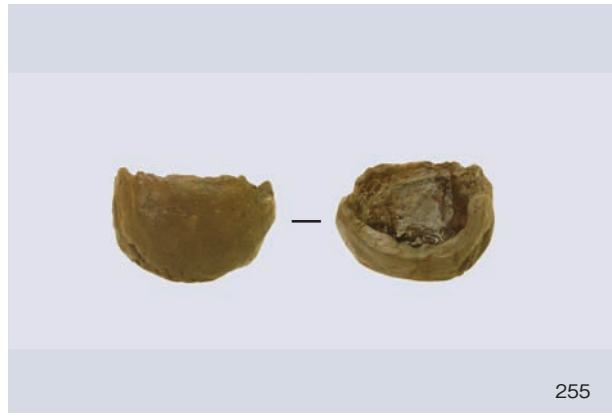
8) X6Y2 SE-01

出土遺物 7



1) X6Y2 SE-01

253



2) X6Y2 SE-01

255



3) X6Y4 SK-06

259



4) X6Y4 SC-01 上面

333



5) X7Y2 SE-02

267



6) X7Y2 SE-02

268



7) X7Y2 SE-02

269



8) X7Y2 SE-03

271

－ 報告書抄録 －

書名	山王遺跡 8
ふりがな	さんのういせき 8
副書名	第10次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1309集
編著者名	加藤隆也
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20170327
郵便番号	810-8621
住所	福岡市中央区天神 1-8-1
遺跡名	山王遺跡
ふりがな	さんのういせき
遺跡所在地	福岡市博多区山王二丁目4-4,1-2,2-2,2-3,4-2
市町村コード	40132 遺跡番号 2379
北緯	33° 34′ 49″
東経	130° 26′ 07″ (世界測地系)
調査期間	20150824～20160226
調査面積	996㎡
調査原因	配送センター建設
種別	集落
主な時代	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、中世
遺跡概要	竪穴建物18、大型掘立柱建物2、井戸27など
特記事項	周辺遺跡最古級の素掘り井戸、インドガラス

山王遺跡 8

－ 第10次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1309集

2017（平成29）年3月27日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 協文社印刷株式会社
〒819-0001 福岡市西区小戸4丁目24番5号

SANNOU SITE 8

